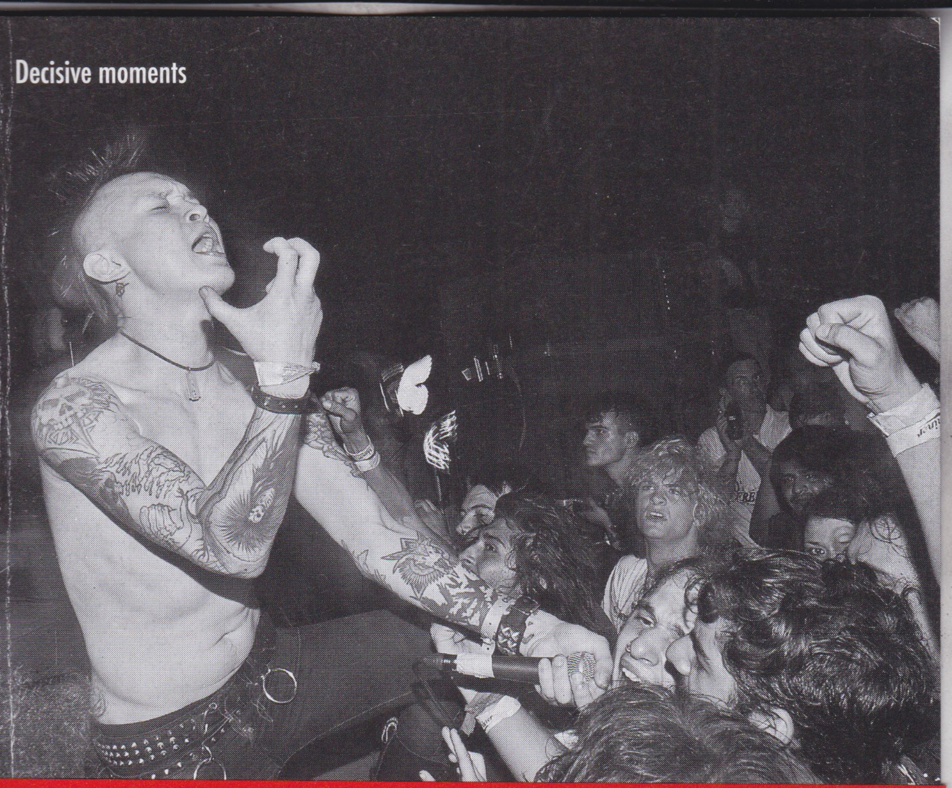


STEVEN RUUD

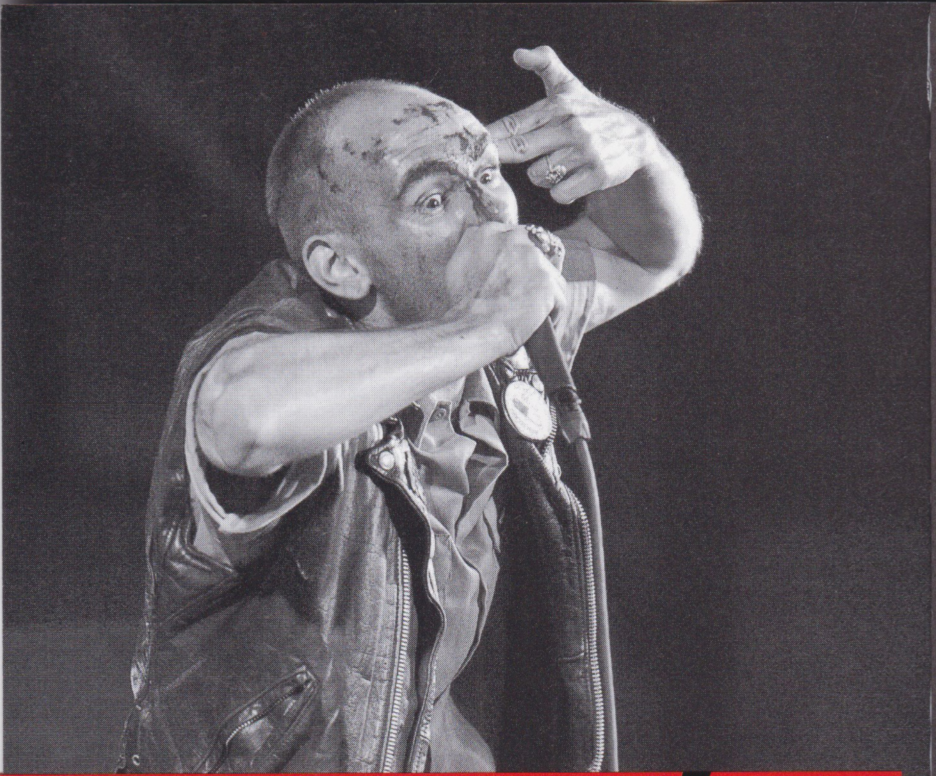
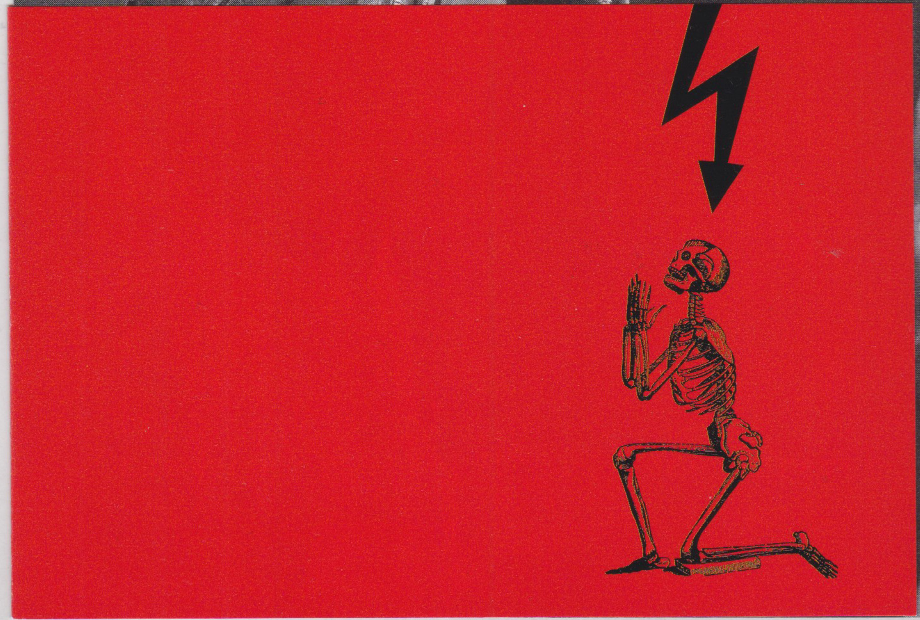
CHAOS IN TEJAS 2013 PHOTO REPORT

ERNST AND THE EDSHOLM REBELS

DISTORTION

el zine

vol.14

Decisive moments



STEVEN RUUD

CHAOS IN TEJAS 2013 PHOTO REPORT

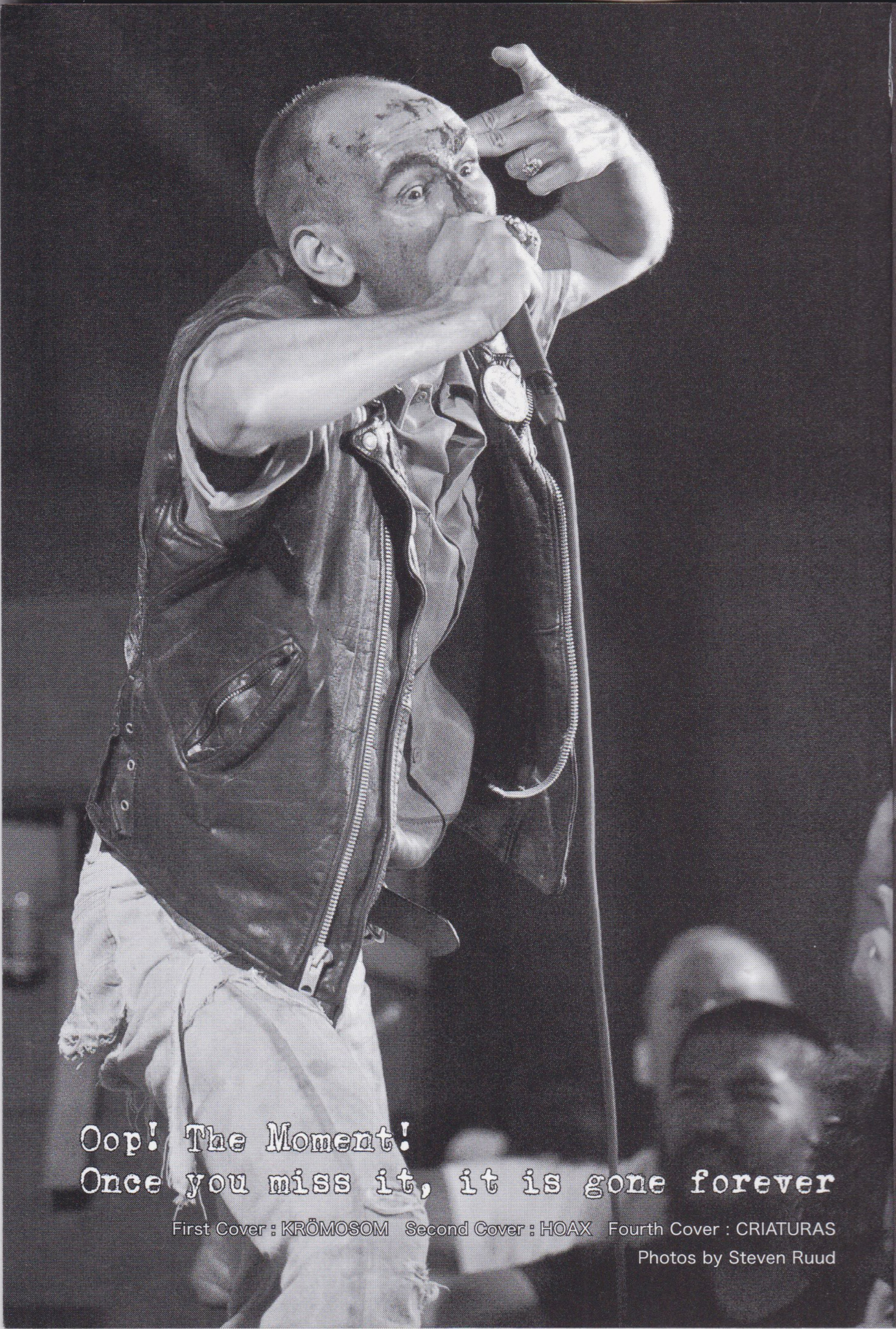
ERNST AND THE EDSHOLM REBELS

EATER

DISTORTION

el zine

vol.14



Oop! The Moment!
Once you miss it, it is gone forever

First Cover : KRÖMOSOM Second Cover : HOAX Fourth Cover : CRIATURAS
Photos by Steven Ruud

contents vol.14



90年代のDisコア(not D-Beat)ムーヴメントを牽引したスウェーデンのDISTORTION Recordsが今年、SÖTLIMPAとCRUDE S.S.のディスコグラフィーLPをリリースして復活!!今ではすっかりD-TAKT & RåPUNK Recordsにお株を奪われてしまった感もありますが、スウェディッシュ・ハードコア=DISTORTIONというイメージをお持ちの方は、今尚多いのではないでしょうか(ディストリビューションも良くて入手しやすかったですし)。

いつまた活動停止するか分かったものではないので、この機会を逃してなるものか!と主宰者のMatsへのインタヴューを敢行しました。尚、▶マークの質問は、高円寺BOYの大倉さんに作ってもらった質問です。

Matsに対してはちょっとレイジーな印象もあったので、今号の記事の中でも真っ先にとりかかったのが本インタヴューです。8月中旬～9月上旬にかけて、複数回に渡りメールで行ないました。

最初は実にスムーズなやりとりができたのですが、徐々に、3回催促してようやくレスポンスが1回あるかないか…くらいまでに陥り、自身とJonsson(ANTI CIMEX)の写真を送ってきたのを最後に、完全に連絡がつかなくなりました。

スウェディッシュ・ハードコアの写真集の発行を予定しているようですが、一体いつ出るのか…。HPを10月1日にオープンすると言っていたのですが、10月5日現在、まだ工事中です。この号が出る頃には完成しているのでしょうか…。そんな気まぐれMatsですが、インタヴューそのものには当時の話題盛り沢山でバッチリ答えてくれています。どうぞお楽しみ下さい!

■そもそも、いつ、どのようにしてパンクに興味を抱くようになったのですか?キッカケとなったバンドは何でしたか?

「まぁ、基本的には1979年のことさ。俺の母親の兄弟が色々とスゲーやつを聴かせてくれたんだよ。定番のDAMNED、CLASH、PISTOLSとかのUKもの。それにスカンジのEBBA GRÖN、RUDE KIDS、BITCH BOYS、SODSとかだな…。それからだよ、俺は夢中になってショーに通ったり、当時の俺が持っていたレコードなんかよりも遥かに格好良い、遠く離れた異国のバンドを発見したりしたんだ。そうして、"こんな宝物を自分でもリリースしてみたい"っていうアイデアを得たってわけ」

■DISTORTION Recordsを始めたのは91～92年頃でしたか?どうしてレーベルを始めようと?DISTORTION Recordsの前にはHARDCORE HORROR Recordsをやっていましたよね。

「実際には82年から、20～50タイトルを抱えた小さなディストロをやっていたんだ。Jonsson(ANTI CIMEX)とガッチリ組んでさ、ANTI CIMEXの「Anarkist Attack」やSHITLICKERSのEPなんかをメチャクチャ売ったもんだぜ。そのディストロはBULLSHIT Recordsという名でよく知られていた。84年になると、俺は自分自身のレーベルをやろうと思ってね、それがHARDCORE HORROR Recordsだ。最初にリリースしたのがDNAの12"。しかしながらスウェディッシュ・ハードコアの第一世代は86～87年にはもう殆ど壊滅状態で、もっとメロディックなバンドが台頭してきた。初期のバンドの大部分は様々な理由から解散しちまってて、活動を続けていたバンドは僅かなものだったよ。TOTALITÄRにBLACK UNIFORMSとかくらいでさ…。DISTORTION Recordsを設立したのは91年。その頃は安っぽいシンガロングなパンクがもう何年もの間多勢を占めていて、みんながウンザリしていたんだ。そんな中、極限までノイジーなD-Beatバンドの新しい波がやってきた。再びロウなパンク・バンドがどんどんとリリー

スするようになっていったんだ。NO SECURITYであったり、ARSEDESTROYER、WARCOLLAPSEとかだね…。その当時は、DISCIPLINE/VINYL JAPANから(ANTI CIMEXの)アルバム『Scandinavian Jawbreaker』について連絡があったりしたものさ」

■当時、お手本としていたレーベルはありましたか?

「いや、他のレーベルのことなんて実際気にしちゃいなかった。DISTORTIONってのはよく使っていたアンプの名前だし、俺のお気に入りの一枚、DISORDERのシングル『Distortion To Deafness』から拝借したものだ。そして俺がリリースするつもりだった作品はどれもノイジーで薄汚い、歪みまくった耳障りなロウ・パンクだったからな。だからDISTORTIONって名前はこの任務にピッタリだったわけさ」

▶DISTORTION Recordsの親会社はDOLORES Recordsだったんだよね?

「DOLORESでメール・オーダーを担当していたときに、DOLORESの内部レーベルとしてDISTORTIONを始めたんだ」

▶デスメタル・レーベルのBLACK SUN Recordsも親会社はDOLORESだよね?




Mats(左)とJonsson(ANTI CIMEX)　91年スウェーデンの田舎でのフェスにて

君もBLACK　SUNの仕事に携わったり、デスメタル連中と交流があったの?

「BLACK　SUNもまたDOLORESの内部レーベルだった。Rolf(83年からDOLORESで働いていた)が運営していたんだ。そう、俺はデスメタルにも興味があったし、レーベル・マネージャーをやっていたから、全ての内部レーベルの流通や契約なんかも担当していたよ」

▶DOLORESはまだ存在するの?

「今では会社としての上辺だけが残されているに過ぎない。DOLORESは99年にVIRGIN/EMIに吸収されて、BLACK SUNは2005年にCANDLELIGHT(※EXTREME NOISE TERRORのメンバーだったLee　Barrettが設立したレーベル)に売り飛ばされた。そして俺は今でもDISTORTIONをやっている」



ARSEDESTROYER

■DISTORTION Recordsのリリースはスウェーデンのd-Beat/クラスト・ハードコアが中心ですよね。やはりそれは設立当初から意識されていましたか?90年代初期のスウェディッシュ・ハードコア・シーンは当時の僕にとって未知のものでした。だからあなたのリリースにはすごく興奮させられましたよ。

「そういう時期だったのさ。俺たちはDISCHARGEと80'sのストレートなロウ・パンクに夢中だった。そして俺はこの手の音楽以外をリリースするつもりも全くなかった。そんなことは他のレーベルが得意としていたしね」

■バンドの作品をリリースする際に、レーベルとして重視していることは?

「レコーディング時には、その完成度について、かなり心血を注いでいる。WOLFPACKのレコーディング作品を聴き直してみてくれ。98年のやつだ(※アルバム『Lycanthro Punk』のことだと思われる)。後の作品なんかよりもパワフルだろ。俺はいつだって制作にかなりの費用を費やしている。作品は永遠に残るものだからな。バンドはロックでソ





リッドなリリースを携えて、ツアーに出て行く。そしてキャリアを積み上げていくものだからね」

■80年代当時、ハードコアのショーには足繁く通っていましたか?その頃の、何か面白いエピソードはありませんか?

「80年代には色んなバンドのショーを沢山見たよ。初めて行ったショーで俺はJonsson(ANTI CIMEX)と出会ったんだが、そいつは81年か82年のパンク・ショーだったな。NASTY BOYS、DESTROYなんかが出演していたんだ。いい思い出だよ。82年当時、SHITLICKERSはメチャクチャだったな。4曲プレイしたところで、会場の奴らはショーを中止にするため電源を落としたくらいさ。そしたらバンドのメンバーは機材をブッ壊してまわった。もちろん、1983年の4月にヨーテボリで行われたANTI CIMEXとDISCHARGEによる2日間は歴史的な出来事だった。金曜日の昼間に「Raped Ass」EPが印刷所から会場に直接届けられて(※ショーは金曜・土曜に行われた模様)、俺はBrutal Chaos Magazineの第4号(※Matsが当時発行していたファンジン)をそのショーで発売したんだ」

▶PUKEやANTI CIMEXを初期に出してたCBRも90年代はデスメタル中心になったけど、CBRは誰がやってたの?君は一切関わってなかったの?

「CBRを運営していたFredrikのことはよく知っていた。彼はデスメタルとハードコアの草分けだし、UNLEASHEDやTIAMAT、そしてENTOMBEDのデモとかをリリースしていたよな…。NAPALM DEATHやCARCASSみたいなバンドのレコードもよく買っていたよ。彼は今でもスウェーデン国内のバンドをリリースしていて、ロックのフィールドで精力的に活動している。世界的に評価されているFIRESIDEやREFUSEDといっ

たバンドをリリースしたりね。しかしながらCBRは91年か92年に清算されたんだ。俺は在庫の全てを買い入れて、レーベル自体はBIRDNEST RecordsのPer(※CHARTA 77のメンバーでもある)が買い取った。そして98年だったかな、ANTI CIMEX『Absolut Country Of Sweden』CD/LPの権利を買い戻したんだ」

▶これもCBRの質問で恐縮だけど、ANTI CIMEX『Absolut Country Of Sweden』のCDは全部ゼロックス・スリーヴ?プロ・プリント・スリーヴのCDを1度も見たことがないんだけど?

「そうだ。ファースト・エディションにはでかいステッカーもついていたが、スリーヴはいくつかの理由によりゼロックス・タイプだけだ」

▶MOMENT MANIACS(※ANTI CIMEXのJonsson、WOLFPACKのJockeと、ブラック・メタル・バンドMARDUKのBogge、Froding、Danielによるプロジェクト・バンド)をリリースしたいきさつを教えて。彼らはライヴもやってたの?

「JonssonはMARDUKのメンバーと同じ街に住んでいたんだが、俺はこれを面白い偶然だと思ったんだ。Jonssonの状態はかなり悪くて、これが彼の最後のスタジオ作

ANTI CIMEX





DISFEAR

品にもなっちまったな。ライヴは一度もやっていない。Jockeは今でもWOLFBRIGADEでプレイしている。Boggeはアメリカに渡って、LAのチンピラになった。Frodingは MARDUKを辞めてヴァイキング・メタルのバンドでプレイしていたな。Daniel Dellamorteはヘヴィメタルの本を書いた。そしてJonssonはこの時以降、ずっと病院を出たり入ったりしているんだ」

▶つまるところ、僕は当時のスウェーデンのハードコア・パンクとデスメタルの関係について、もっといろいろ知りたいんだけど、知ってる範囲で聞かせてもらえる?

「ハードコア・シーンにいたいくつかのバンドのメンバーは実際にデスメタラーだったよな。Björn(DISFEAR)、Wallenberg(SKITSYSTEM)、そしてもちろんTomas Lindberg(LOCK UP、AT THE GATES、GROTESQUE等…)とかさ。90年代の頃はANTICIMEXとMORBID ANGELなんかがギグやフェスで共演していたから、メタルとハードコアはミックスされていたよな…」

■では、80年代のスウェディッシュ・ハードコアのシーンと現在のシーンでは、色んな面で違ってきているように感じますか?今のシーンに対して何か思うところはありますか?

「この数年というもの、俺は全然ショーに行っていないんだ。当時のバンドで今でも活動しているのなんて一握りだけだしな。まぁ、シーンにはそれほど違いなんてないと思う

ぜ。むしろ、社会全体がこの数十年で発展していった。そういう意味では、ショーをやる会場が今では変わっちまったかな。古いスクワットは取り壊され、様々な面において、全てが政府のコントロール下にある。会場も合法化されたものばかり、アルコールにしてもな…」

■ちなみにUmeåのパンク・シーンやD-TAKT & RåPUNK Recordsに対してはどんな印象を抱いていますか?

「スウェーデン北部には全然行ったことがないんだ。けど、若い奴らがシーンで活動しているのはいいと思うよ。俺たちのロゴと恐ろしくよく似ているけどな(※D-TAKT & RåPUNK Recordsのロゴも三面ドクロ)。まぁ、俺たちのやっていることが真似されるのは初めてのことじゃないさ」

▶DISTORTIONが活動停止する前に、DISARMを再発する予定があると発表してたよね?なぜ実現できなかったの?そして君が実現できなかったDISARMの再発を、なぜD-TAKT & RåPUNKのような若造が実現できたと思う?


AVSKUM

「ディストリビューターなんかが倒産していく状況に対して、俺はもう心底ウンザリしていたんだ…。俺はCDのリマスターもやって、実際にその金も払ったんだぜ。だけど、レコード・ショップの仕事も進めていたせいで残念なことに時間がどんどん経っていってしまった。そしてメンバーはすぐにでもリリースしたがっていたんだ。あの頃、D-TAKT & RåPUNK

は明らかに唯一の選択肢だった。気にしちゃいないよ」

▶STRAIGHT EDGE MY ASSってバンドがいたよね?名前がBLACK UNIFORMSのデモのタイトルだけどBLACK UNIFORMSとは何か関係があったの?



BLACK UNIFORMS



STRAIGHT EDGE MY ASS

「いや、関係ないよ。このバンドはSKITSYSTEMのAlexがMOTÖRHEAD/DISCHARGEにインスパイアされてやっていたハードコア・パンク・バンドで、当時はスクワットなんかで時々演奏していたね。メンバーはBLACK UNIFORMSと大体同じくらいの世代で、よく覚えちゃいないがBLACK UNIFORMSも88年頃からやっていたんじゃないかな。CDが大分あとになってから、2002年だかに出ていたよな」

■そう、暫くの間DISTORTION Recordsのリリースは止まっていましたよね。どんな理由から停止していたのですか?

「ディストリビューターがいくつも倒産して、メチャクチャ頭を悩ませられたんだ。かろうじて今回はリリースすることができたけどな。もう長いこと、とある日本のレコード店は5000ドルを未払いのままでいるんだぜ…」

■今年、SÖTLIMPAとCRUDE S.S.をリリースしたわけは?あなたがバンドにオファーしたんですか?

「再発に関して、俺たちがやることはシンプルさ。決まったロイヤリティを、彼らが著作権協会に加入しているなら払うだけ。両方のアルバムともに認可されたものだよ。CDでしかリリースされていない音源をヴィニール化する予定もあるんだ。WOLFPACKやAVSKUM、GENOCIDE SSといったバンドの、俺が以前リリースしたタイトルをね」

■SÖTLIMPAとCRUDE S.S.のLPですが、日本盤を出したのはどうして?

「俺は80年代からずっと、帯やステッカーやら色んなものがついた日本盤のファンだからね。それに、日本の多くの人たちがスウェーデンの音源やシーンが好きなことを知っていたから、それで君たちに何か特別なものを用意したかったんだよ」

■今、スウェディッシュ・ハードコアの写真集にとりかかっているんですよね。この本の詳細について聞かせてください。

「Sebastian Todorという一人の写真家と84年に出会ったことが始まりさ。彼はいつも写真を撮りまくっていてね、10000枚以上かな、俺も色んなアーティストの作品で彼の写真を使わせてもらっていたんだ。俺たちは一緒に旅行に行ったりしたし、彼はANTI CIMEXとDISARMのフィンランド・ツアーにも同行したりしていたね…。だからこの本は彼と彼の写真に対する俺からの賛辞なんだ。基本的に83年から93年までに関するドキュメントと素晴らしい写真からなる300ページを超える本になるだろう」

■DISTORTION Recordsの長い歴史の中で最も嬉しかった思い出というと?

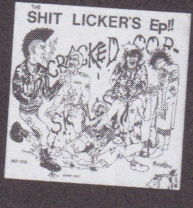
「大成功した94年のHardcore Holocaustフェスと、92年のGBG Hardcore & Punk(※DOLORESがリリースしたVA『GBG Hardcore』のことだと思われる)のリリース・パーティーだな。昔のバンドがみんな出演してくれたんだ」

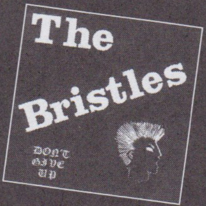
■難しい質問でしょうが、あなたにとってのスウェディッシュ・ハードコア・パンクのレコード、ベスト10を挙げてください。

「これは82～84年頃に俺がヘヴィ・ローテーションで聴いていたレコードで、今、パッと思いついたベスト10だ」



ANTI CIMEX – RAPED ASS EP
SHITLICKERS – CRACKED COPSKULLS EP
MOB 47 – EP
HUVUDTVATT/PICNIC BOYS – SPLIT EP
ARROGANTA AGITATORER – ARROGANS EP
MODERAT LIKVIDATION – S/T EP
ASTA KASK – FÖR KUNG & FOSTERLAND EP
REALLY FAST VOL.1 – V/A LP





THE BRISTLES – DON'T GIVE UP EP
ABSURD – BLODIG STAD EP
E.A.T.E.R. – DOOMSDAY TROOPS EP

■あなたはスウェーデンのハードコア・シーンに長くいますが、年齢を重ねるにつれ様々なモノの見方というのは変わってきましたか?
「イエス。社会にしても、多くのことが30年前と比較すれば全然違っているように思える。古くからのパンクスと、90年代後半からの新規のパンクスとでは、その政治性や倫理観には、多かれ少なかれ違いがあるだろう。80年代にはその違いはもっと顕著だった。現代では、大部分のことが実によく組織されているように見える。恐らくこれが今日の社会による情動というやつなんだろうよ」
■色んな人によく聞く質問なのですが、今のDISCHARGEについてはどう思っています?一番好きなDISCHARGEのレコードは?
「こいつはちょっと悩むな。彼らの昔の作品は今でもよくかけているんだ。そして、俺にとってRatはやはりVARUKERSであり、CalがDISCHARGEだ。どちらのバンドも、それにDISORDER、GBH、CHAOS UKも、当時俺が聴いていた音楽の大半を占めていたからな。
オールタイム・フェイヴァリットはもちろん『Why』の12インチだ。20年もの間ターンテーブルを占拠しているし、聴き過ぎて5枚程ダメにしたほどさ。俺は未だに覚えているぜ。俺の友達がロンドンへ旅行に行った際に『Why』を買ってきたんだ。そして俺がそいつの部屋に行ったら、奴の部屋はメチャクチャに破壊されていた。奴は『Why』を初めて聴いた瞬間に気が狂っちまったのさ!!!」
■94年には日本を訪れていますよね。何か日本に対する驚きはありましたか?ちなみに、最近の日本のハードコア・バンドは好き?
「期待通りだったよ。気分も実によくて、クールな人たちとも沢山出会えた。伝統的な場所や魚市場、寺なんかも見てまわってね…。そしてもちろんギグも!素晴らしい瞬間だった。それにクールなディストリビューターやレコード店も色々と訪れることができた。最近はそんなに新しい音源は聴いていないんだ。今でも俺のお気に入りは日本の昔から

のバンドで、BASTARD、DISCLOSE、G.I.S.M.、ROCKY & THE SWEDEN、GAI、EXECUTEだね」

■では、あなたにとってのハードコア・パンクとは?

「君にカオスをもたらす音楽の壁、困難を打ち砕き、何よりもアグレッシヴなもの!!!そして生き様さ…」

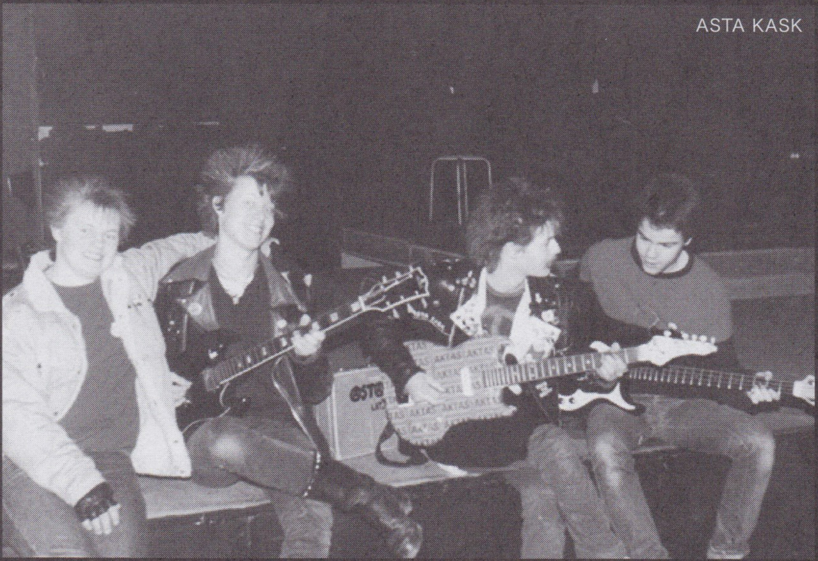
■今後の予定も聞かせてください。

「色々とリリースの計画もあるし、俺が持っているデモ音源をテープに落としたいんだよな。かなりレアな音源もいくつかあるから、うまくいけば日の目を見ることになるだろう。HEADCLEANERS、DNA、SVART PARAD、ASOCIALなども予定しているぜ」

■インタヴューさせてくれてありがとうございます。最後に読者にメッセージを。

「もうすぐスウェーデンのバンドが日本へプレイしに行くって聞いているぜ。あと、俺たちの新しいサイトもチェックしてくれよ。2013年10月1日にオープンだ!!!レア盤や81年以降の古い音源も扱っているからさ。Cheers!」

www.distortion.se


ASTA KASK

STEVEN RUUD
AUSTIN, TEXAS PHOTOGRAPHER

CHAOS IN TEJAS 2013 PHOTO REPORT



LEFT FOR DEAD

アメリカはテキサス・オースティン在住のSteven Ruud。バンドの"決定的瞬間"を捉えた、素晴らしい写真を撮るプロのカメラマンです。実は今号のCRIATURAS(P81に掲載)の写真を撮ったのが彼で、その縁で知り合ったのですが、バンド写真だけではなく風景写真やウエディングなんかの写真も見せてもらうと、「やっぱりプロは違うなー。つか、Chaos In Tejasの写真も色々撮っているなー(載せたい)」というわけで、今回インタヴューさせてもらう運びとなりました。写真を撮ることによって救いを得たと言う彼へのインタヴュー+今年の5月末～6月初旬にかけて開催されたChaos In Tejas 2013のフォト・レポート(表紙のKRÖMOSOM/表二のHOAXもその時の写真です)な感じでお楽しみ下さい。

■まずは日本の読者に自己紹介をお願いします。

「アートとミュージックを愛する日本のみんな、こんにちは!GAUZEは永久に最高だぜ!ケンジのインタヴューを受けるから、僕は今、ムチャクチャ興奮しているんだ。そして、我が地元テキサス州オースティンの天才的な音楽家にしてゴット・ファーザー、そう、Roky Ericksonがサイケデリックなナンバーと共に放った、この最高の言葉について僕は考えているところさ。

"I've been working for the Kremlin with a two headed dog"

(※「Two Headed Dog」の歌詞の一節)

いや、マジな話しだよ。僕は38歳で、オースティン近くの他の都市に住んでいたこともあるけど、もうここに暮らして15年になる。娘が2人と息子が1人いて、とても愛らしいガール・フレンドもいる。それと空っぽの財布もね!長年に渡って地元の音楽シーンには熱中しているけれど、最近はシーンに関わっている素晴らしいバンドや人々のことを、僕のカメラで記録することに関心を向けているんだ」

■カメラと写真に興味を抱いたのはいつ頃からですか?

「君にそんなことを聞かれるなんて奇妙なことだよ。だって僕はつい先日、そのことについて自問自答していたところなんだから!

正直に言えば、僕は自分の母親について記さなければならないね。Instagramと Flickrが登場するずっと前から、僕らが旅した場所であったり、出会った人たち、宿泊

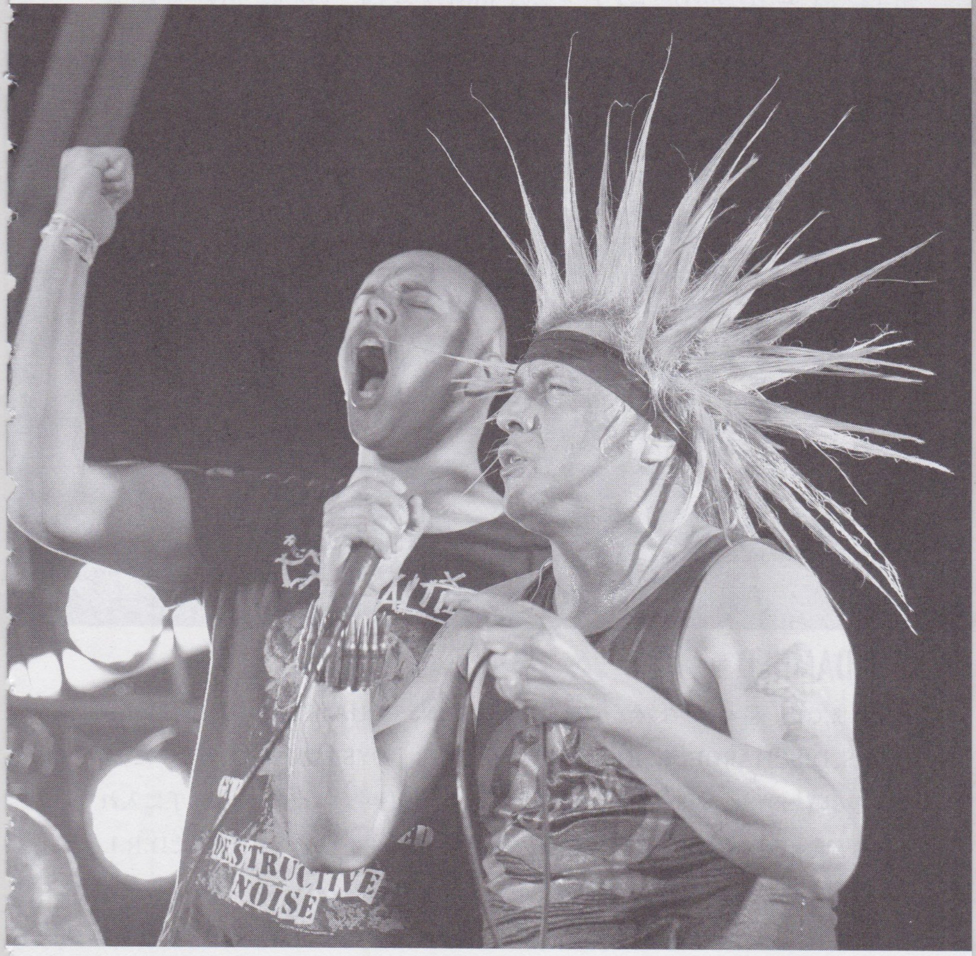


RIVAL MOB

先、食べ物なんかの写真を撮ることに、彼女はすごく熱心だったんだ。母は僕らのためにそうしてくれたんだと思う。おかげで年をとった今でも、当時を振り返って思い出すことができる。実際にどこへ行こうが/何をしようが、どうしたって記憶は曖昧になるからね。いつも僕は母と一緒に、写真のフィルムを現像するためにFox/Kodakのキオスクに行ったものさ。

そして良くも悪くも、写真を通じて僕らはそれが撮られた瞬間について、もう一度思いを巡らすことができる。自分と"すごくキュート"な女の子が写った写真を見て、酷いショックを受けたことが2、3回はあるよ。旅行中に(僕は若かった頃、アムトラックの列車に乗ってアメリカのありとあらゆる場所を旅して廻ったんだ)出会って恋した女の子たちが、写真の中ではゾッとするようなルックスだったりね。恋心が収まると気がつくのさ。"青春時代の恋愛"が僕を盲目にさせていて、彼女たちは全然可愛くなかったってこ

THE CASUALTIES



とにね!あぁ、そうだ、僕に初めてのカメラをくれたのも母だったよ!」

■初めて聴いたパンク/ハードコアのバンドと、初めて写真を撮ったバンドを覚えていますか?

「初めて聴いたパンク・バンドはSEX PISTOLSだった。『Never Mind The Bollocks…』を聴いたその瞬間。僕はあんな音楽をそれまでに聴いたことなんてなかったよ!当時の、僕の若き12歳の心は高鳴ったものさ。そしてもっとパンク・ミュージックを探し出さずにはいられなかった。ちょうどその頃、Rustyという年上の子供と出会ってね、彼



THE DAMNED

はそれまでで一番パンクな奴だった。SUBHUMANSやCHAOS U.K.、THE SPERM BIRDS、DISCHARGE、T.S.O.L、そしてTHE BIG BOYSを聴かせてくれたんだ。僕らはその頃、テキサスのミッドランドでスケボーばっかりやっていたんだけど、手に入れられる音源は何でも買いまくっていたよ!テープのトレードをしたりね。J.F.AにD.R.I、THE DICKSの曲とかが入った『Thrasher Skate Rock』のテープ・シリーズは全部持っていたし、擦り切れるほど聴いたものさ。そういったバンドが僕のお気に入りでも



SUDOR



WORLD WAR 4

LOS CRUDOS



あったしね。

僕が聴いた最初のハードコア・バンドというと、YOUTH OF TODAY。当時(厳密に言えば1986〜87年)はパンクとハードコアは明らかに別物だったよね。僕は初期のニューヨーク・ハードコアからボストンのバンド、D.C.のバンドに至るまで、全部大好きでさ、…それはもうハマっていたよ。僕がライヴ写真を撮ろうとした最初のバンドは日本のD-CLONEだったんだ。酷い写真だったけどね。その後にCRO-MAGSを撮ったときには、大分マシな写真が撮れたよ!」

■写真の技術はどこで学んだのですか?写真の専門学校?それとも独学で?

「えーとね、1995年にサム・ヒューストン州立大学のメディア通信部の1年生だったときに、基礎は教わったんだ。写真撮影のクラスでは、主に暗室の使い方について時間が割かれていてさ。ガイダンスも一切なしで課題を撮影しに行かされて、それからフィルムを現像するために暗室に行って、自分たちのコンタクト・シート(ベタ焼き)を見て、そして泣き叫ぶ!全然簡単じゃなかったよ。だけど露光のコツをつかんで現像の技術を扱えるようになると、写真の仕上がりは魅力的になった!しかし、今にして思えば残念なことに、1年生を終えると僕の人生は暗闇の中を歩むことになる。そして結局その後の15年間もの間、僕はカメラをしまいっぱなしにしていた。再び真剣にカメラを手にすることは、2009年までなかったんだ。その後、僕はテキサスのウェイコにある写真の専門学校で授業を受けて、卒業後はウェイコ・トリビューン・ヘラルドという、セントラル・テキサスでは最大手の新聞社の、フリーランス・カメラマンとしての職を得たんだ。地元の雑誌・ボヘミアへの寄稿も始めた。優れた表現をするには何が大切なのか、そのことを知るのに、この雑誌への寄稿は本当に役に立ったよ」

■では、撮影時に大切にしていることとは?

「撮影する前には、異なった色んなことを僕は意識しているよ!だけど、それを1つまで絞るとしたら、タイミング、になるだろうね。僕にとって、構成と光の具合はとても重要なんだ。しかし、それらはシャッターを押す「瞬間」には、二の次になる。僕の残りの人生は、Henri Cartier Bresson(※フランスの著名な写真家)が言うところの、"決定的瞬間"(decisive moments/※同名の写真集も存在する)を追い求めることに費やされるだろうね。"決定的瞬間"について、彼のウィキペディアから引用してみよう。"写真は絵画のよ

うなものではない"とCartier Bressonは1957年のワシントン・ポスト紙で語っている。"写真を撮るとき、一瞬の創造的な断片がそこにはある。目は構図、つまりは生活そのものの表情を見なければならない。また、シャッターを押す際の直感を知らねばならない。それは写真家が創造的であるための瞬間なのである"と彼は言っている。"あぁ!その瞬間!一度逃してしまえば、それは永遠になくなってしまう"ともね」

■ウエディングであったり、子供たち、食べ物、自然など、バンドだけではなく様々な写真を撮っていますよね。難しい質問だと思いますが、一番好きな被写体は何ですか?

「その通り、最近は多方面に活動しているんだ。友人たちの多くが、ライヴの写真を撮ることが僕にとって"最適な仕事"だと思っていて、その意見に僕は部分的には同意するよ。だけどそれだけではないってことに僕は気がついたんだ!僕がそこにいるってことに気がつかずに、警戒していない状態で何かをしようとしている人たちこそが、最高の被写体だね。僕は心の底からフォト・ジャーナリストなのさ」

■どんなカメラを使っていますか?ハードコアのギグのときは、カメラを変えますか?

「キャノンの5D MK IIIと1D MK 4の両方を使って撮影している。レンズは全て"L"シリーズだね。うまく伝わるか分からないけど、"結構いいね"という程度なんかではなく、自分が求めているショットをこれは可能にしてくれるんだ。最初の数年間は完成度の低いレンズを使っていたせいもあって、"そこそこ"のショットしか撮れずにウンザリしていたことがある。フェスとかでバンドを撮影するときには、一つはフラッシュをたく用に、もう一つは自然光で撮るために、2つ用意していくね」

■パンク/ハードコア・バンドの写真のうち、今までのベスト・ショットは何になりますか?

「うーん、CRO-MAGSが演奏するステージから前方宙返りをキメた男の写真と、INFESTのJoe Denunzioの顔を正面からカメラで捉えて、どうにか撮影できた写真。これらが同率で一番かな。彼は大男でね!INFESTは最高のバンドだよ!」

■パンク/ハードコア・シーンにおけるカメラマンで、好きな人はいますか?

「イエス。いつだって大好きなのは、Glen E. Friedmanだね。あとはMartin CrudoとChris Boarts Larsonの大ファンなんだ」



NO TOLERANCE

■Chaos In Tejas 2013はいかがでしたか?気に入ったバンドは?

「Timmy(※企画者)のことは昔から知っていたし、一時期すごく親しくしていたこともあった。僕はいつだって、彼のなすことに尊敬の念を抱いているんだ。毎年こんなフェスを企画しているんだからね。開催された最初の年から行っているし、たくさんの素晴らしい思い出ばかりさ。ただ、僕の印象ではChaos In Tejas 2013はこれまでの中でも最高のものだったよ。会場、出演バンド、観客、企画などに関してね。明らかに、今年が最もプロフェッショナルだった。

LOS CRUDOSは大好きだね。最高に激しく、そしてどういったサウンドを出すべきかを、彼らはよく熟知している。最高峰のバンドの一つだね。FRAMTIDはまさにパーフェクトだ。非の打ち所がない。楽しませてもらったよ!KRÖMOSOMも本当にグレートだったな。RIVAL MOBはいつも通りに素晴らしかったし、もちろんINFESTは会場をメチャクチャにしちまった。バンドによって観客があんなにイカれちまう様を、僕はこれまでに見たことがない。大混乱が起こったのさ!」

■カメラマンを続ける動機とは何ですか?

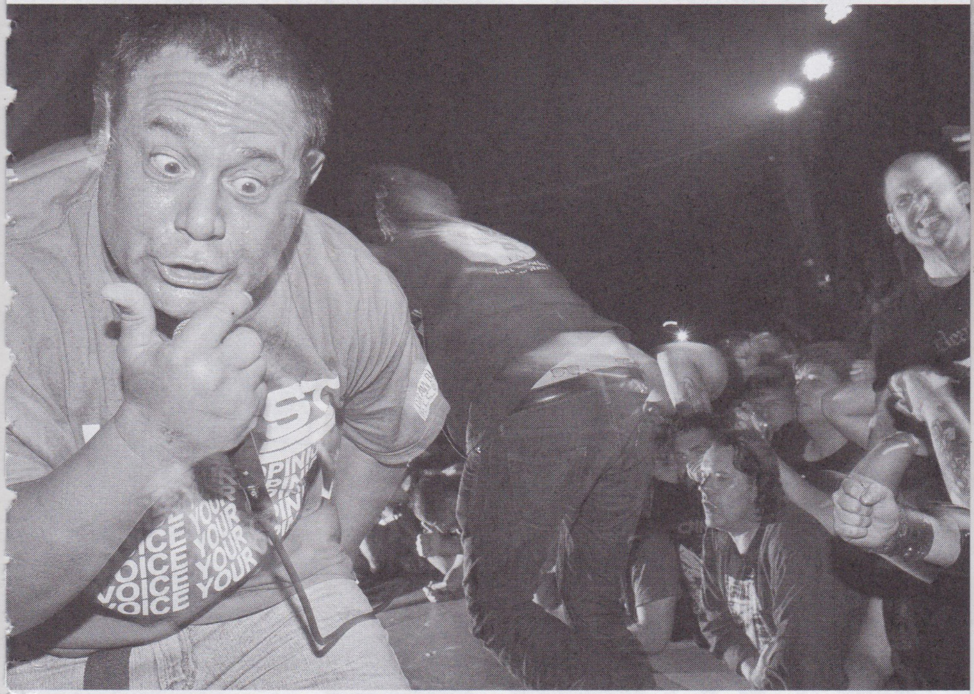
「富と名声?なんてね、ハハハ!主に情熱と、あとは正気を保つためかな。実は、僕はやむを得ず写真を撮ることになったんだ。だけど、写真を撮ることによって、次こそはもっと良い写真を撮ろうという目標ができるし、いつも自分自身に厳しくあるようになった。これは、僕が真っ当でいられることにすごく役立っている。僕は自暴自棄になる傾向が過去にはあったんだ。写真を撮るということは、悪魔を寄せつけないよう、僕の心を落ちつかせてくれる行為なんだよ」

■日本の読者にメッセージを。どうもありがとう!

「僕からの日本の読者へのメッセージは、敬愛と感謝に尽きるね!君たちのパンク/ハードコア・ミュージックに対して、僕らは愛と尊敬の念を30年もの間、抱いているんだよ!ハードコア/パンクにおいて、最も模倣されたサウンドって日本のバンドのサウンドじゃないかな!どうか音楽を作り続けてくれよ!日本のバンドがアメリカに来て僕らをブッ飛ばすことができるよう、バンドをサポートし続けてくれ!そして、できることなら、GAUZEとBASTARDとS.D.SとFORWARDのメンバーからなるスーパー・グループを結成してくれ!ありがとう、そしてさようなら日本!」

STEVEN RUUD

INFEST




THE C-3'S

三重県四日市のトータル・パンク・ショップVORTEXを拠点に活動中のAll Femaleパンク・ロック・バンド、THE C-3'S。
自主リリースのデモCDRを経て、今年のうだるような酷暑の最中、2曲入りの1stシングルをOVERTHROW RECORDSよりリリースしたことは、皆さんの記憶にも未だ新しいのではないでしょうか。
UKニューウェーブ〜アナーコ・パンクを吸収して弾き出されるショッキング且つスリリングなサウンドは、垢にまみれたパンク・ロックの定石の先を行く、本当の意味での"ポスト"・パンクであり、海外のリヴァイヴァル・ポスト・パンク勢とも全く異なるオリジナリティを確立している。とにかくソング・ライティングのセンスがズバ抜けています。
ベース・ヴォーカルのバンさんにメールでのインタヴューを試みました!

■まずは結成の経緯からお聞きしたいのですが、結成自体は昨年2012年ですか?どんなキッカケでTHE C-3'Sは始まったのでしょう?

「今のメンバーの3人で、2008年頃にスタジオで楽器持ってって遊ぼうっていう感じでからです。ライヴする予定もなく、とくに目標も持たずにただ何かをコピーして遊んでたのですが、VORTEX(私達が営むSHOP)が移転して2Fにライヴが出来るスペースを自分たちで作ったから、ここでなら私達もライヴ出来る!と(笑)。まだバンド名もなく、デビュー・ライヴはVORTEXの移転OPENパーティーでした。ちなみにオリジナル曲も1曲はあったのですが、その日はカヴァーのみで、LAUGHIN'NOSE「PARADAISE」、BUZZCOCKS「BOREDOM」、X RAY-SPEX「BONTAGE UP YOURS」、SICK THINGS「BONTAGE BOY」を演りました。OPENまでの連日の工事と店の準備の徹夜でフラフラだったのもあって、それはもう相当ヒドいもんでした。リハを観ていたSYSTEM FUCKERのメンバーが目を伏せてたのが印象的でした(笑)」

■(笑)。THE C-3'Sというバンド名にはどんな意味を込めたのですか?

「単語というよりも記号っぽいバンド名がいいな、と思って。3人でも出来る。CANの『C』で、C-3'Sと。
私達みたいな3人でもこうやって「やりはじめた」「できるんだよ」と。バンドやりたいって思ってる人たくさんいるだろうけど、そんな人に勇気を与えれたらな、と。上手いとかへ

タとかじゃなく、誰かの評価でもなく、やりたいようにやれば良いのだと」

■「やりはじめた」「できるんだよ」というのは、バンドに限らず、お店(VORTEX)にも共通しているのかなと思いました。ぼんやりとした質問ですが、VORTEXの延長線上にTHE C-3'Sがある、という感じでしょうか?

「はい。VORTEXが移転して、C-3'Sというバンド名が付いてからは、間違いなくVORTEXの延長線上での活動を意識しましたし、確かにそうなりました。なんといってもVORTEXのスタッフ3人でやってますから…!!

ツアーで四日市で演りたいというバンドがたくさん県外や海外から来てくれても、サポートしたり、対バンするバンドも少ない四日市で、C-3'Sならいつでも出れますっ!!というスタンスでいます。VORTEXもC-3'Sも、思いたったらすぐで行動&やらなきゃ出来るか、出来ないか?どうかわからない。ズッコケルことも楽しみたいです。やればどんどんこの世界が広がってくし繋がってく。バンドを始めてそれが何倍にも膨れていくから、今はそれが楽しくて仕方が無いです。がその分、そっちを一生懸命にやりすぎてVORTEXが疎かになってますけど…(苦笑)」

■デモCDRをリリースしたのは結成してすぐの頃でしたか?その頃はサックスも入れていたようですが。

「2012年2月に初ライヴをVORTEXでして、DEMOのレコーディングとリリースが2012年9月でした。SAXがいたのが2012年8月から2013年の2月までの半年で、レコーディングだけではなく、もちろんライヴも4人でやってました。最初3人(現在のメンバー)だけでやってた時は演奏も拙く、不安に溢れたステージだったのですが(笑)SAXが入って、ピロロロロ〜〜〜〜とその不安や拙さを吹き飛ばしてくれました。それはとても快感で(笑)そのまま勢いに乗ってDEMOを作って世に出そう〜!となりました」

■今夏にリリースされた1st EPですが、元々はOVERTHROW RECORDSのモーリー(※森下篤さん)からリリースの誘いがあったんだと思います。話しを振られた瞬間、いかがでしたか?

「本当にビックリしました。VORTEXに森下さんが遊びに来てくれた時にC-3'SのDEMOを買ってってくださって、そこからしばらくしてお誘い頂きました。やはり今までのOVERTHROW RECORDSはハードコア・パンクのレーベル、というイメージでしたし、皆さ

んも意外だと思われたんじゃないでしょうか?しかも無名で演奏力も実力もない私達。「大丈夫でしょうか?」と何度も森下さんに訊ねました(笑)」

■曲についてお聞きしたいのですが、まず「Fact」。最初に聴いたとき、Honey Baneの「Girl On The Run」もちょっと彷彿とさせられたのですが、この曲はどんなイメージで作られましたか?

「まさに!出だしの部分は、Honey Baneの「Girl On The Run」をスタジオでかけてこんな雰囲気のイントロにしたい、と作りました。感じて頂いて嬉しいです。あとはその曲を作った頃は、POISON GIRLSやTOXIC WASTE、CHUMBAWAMBAの『REVOLUTION』などをまた聴き込んでおりました。

歌はIan Duryのように歌えたら…、とそんな気持ちで歌ってます(笑)」

■歌詞の中には、"Tragedy in '45 / Tragedy in '86"というフレーズがありますが、この"45"は"広島・長崎への原爆投下"で、"86"は"チェルノブイリ原発事故"のことでしょうか?インナーにある「Fact」の歌詞の下には、IAEAが福島の原発を視察しているような写真が掲載されているので、現在の福島へと繋がるように作られた曲な



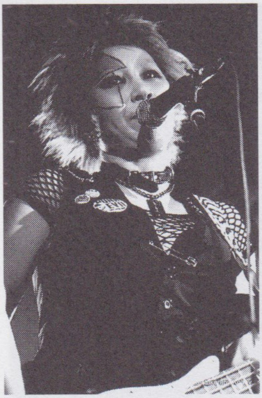
のかな、と思いましたが。

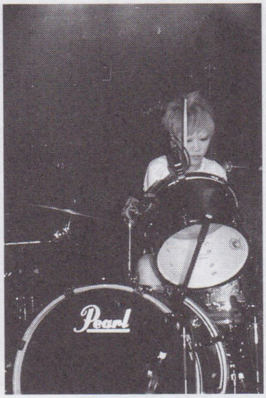
「その通りです。原発事故があってからのTVなどの情報が嘘過ぎて恐ろしくなりました。私(Bass/バン)には小さい子供がいるのですが、少しでも守りたいと、放射能の被害や、自分で出来る少しでも防ぐ方法をネットで調べたりしてるとドンドン目に入ってしまう恐ろしい事。原発や戦争、医療や食生活とかの身近な「(時間の経過で忘れてはいけない)出来事や事実」に対してその時にNO!と。少しでも?と感じたら自分で調べたり考えたり何か行動しなきゃ、という内容です。「秘密保全法」なんて法律が通ってしまったら、本当に恐ろしい。騙されたまま騙され続けるなんて嫌だ。

まさか7年後の東京オリンピック開催が決まってしまうなんてね…。それまでに海外からの注目も大きいのだから少しでも今よりマシな国になってることに期待したいですが、もしかしたら…、って思ってたことが実際の出来事となってきてるから本当に恐ろしい。何も信じられない」

■ただ、「Fact」も「Bell is ringing」も、歌詞ではあまりストレート/限定的な表現はせずに、聴き手によって、様々に解釈できるようにしているのかな、という印象もあり







ます。

「そうですね。C-3'Sの歌詞はほとんどそうかも知れません。ほとんどの曲の歌は楽器のような感じで声/言葉を音として、語尾はこんな単語で終わりたい、とか、ここでこの言葉を使いたいから、という単語や発音の音から歌詞を付けてる部分も大きいので、意味合いも限定的な表現にはなってないですね」

■あと「Fact」と「Bell is ringing」ではヴォーカルが違いますよね?バンさんとアリサさんで歌い分けていると思うのですが、その歌い分けはどのように?歌詞を書いた人がその曲を歌う、という感じですか?

「はい、ズバリその通りです(笑)。曲も歌詞も2人で持って来たのを繋げました。歌詞の内容見せ合って1曲に繋げれるね、と」

■「Bell is ringing」の、"Starting bell is ringing"から"You arrive there,～"の流れなんて最高にキラーで痺れました。この曲はどんなイメージから作ったのでしょう?

「ありがとうございます！この曲はOVERTHROWからのリリースが決まってから作った曲で、私達なりにかなり試行錯誤しました。で、ユーモアも込めて曲の頭バンが歌う「私はどこにいるの?(迷い)私がそれ(この曲)を作る事ができたら、愛を忘れた誰かさんの魂を復活させる為に歌うわ」と。で、アリサが「ベルが鳴ったよ。さあ、その時が来たよ、始める時が」と、誰かさんの背中を押す。それは自分に対してでもあるし。DEMOの



最後の曲「Step Forward」の続編というか。「Step Forward」では「膝をかかえて何考え込んでの?私達がいるじゃない。きっとうまくいく、私達なんかがこうやって今ステージに立って歌ってるじゃない、自分を信じて!」ってな恥ずかしいくらい真っすぐな、私達から元気の無い人への応援歌なんです」

■レーベル・インフォにもあったスペインのBELGRADOやアメリカ・ポートランドのARCTIC FLOWERSといったバンドの、ダークで冷たい感触のポスト・パンク・サウンドよりも、もっとTHE C-3'Sは肉感的で躍動感のあるパンク・ロックに感じました。曖昧な表現ですが、"空気感"がヒリヒリしていて、でもカッチリし過ぎていないというか。メンバーさんの中では、THE C-3'Sのスタイルといいますか、「いや、THE C-3'Sはポスト・パンクだよ」とか、ありますか?

「ニューウェーブや、ポスト・パンクと呼ばれるバンドや「ポスト・パンク」という言葉の意味は大好きですし、光栄に思います。サウンドの種類/ジャンルではなく、パンクから産まれた次世代の「ポスト・パンク」バンドという意味ではそうありたいですね!

しかし例えばダークで同じフレーズをリピートするような曲や挙げられたバンドやレコードは好きですし、その中での高揚感は大好きですが、C-3'Sでそんな曲をやろうと

なると…(笑)。いろいろやりたい(笑)。

AU PAIRSの曲をしばらくライヴでもカヴァーしてましたし、色んな曲をC-3'Sなりにカヴァーしたいってのはあって、最近は60年代の曲をカヴァーしたいね、となっててその辺りのレコードを聴き漁ってたり。そのときの気分や私達のブームで色んな曲をコピーして解体したりして。自由にはやりたいけど、ルーツな部分を踏まえてって部分は大事にしたいです。基本的には3人とも共通して70's〜80'sパンクが好きで、バンドの人間臭さや、ライヴで感じる熱量が感じられるバンドに魅力を感じます。

EPがリリースされて、各レコード屋さんのコメントを拝見した時「70's後期UKのパンク・バンド〜」的なことを多くのレコード屋さんで書いてもらってて、めちゃめちゃ嬉しかったです。あの2曲でそう感じてもらえるのは意外でしたから。

そして、「フリーキー」「ヒリヒリ」「スリリング」って音に対する言葉の表現が大好きなので、そんなバンドになりたいです。カッチリし過ぎてないのはメンバーの人間性だと思います(笑)」

■ジャケットのアートワークですが、モノクロの植物(樹木)とタイル状の壁の上に、ピンクのバラが配置されているようなデザインですね。これはどういった意図が?

「名古屋の鶴舞公園でライヴをした時にジャケットに使おうと写真を撮りためておりましてその中から使いました。最初から漠然とイメージはありました。自然のモノと人工的なモノ。ぶっちゃけTHE MOBのアルバム・ジャケットのオマージュな部分もあります。整備された公園での自然/人間によって汚染されてる空と木/人間の発明(トイレのタイルです)/美しいけど不自然で異質な蛍光ピンクのバラ。人類がいつか滅亡してもまた人類に似た生き物は同じような歴史を作るのでしょうか?そんな意も込めてます」

■ちなみに、レコーディングでメンバーさんそれぞれ、特に気にかけたところがありましたら教えて下さい。

Gu/アリサ「デモ音源の時とまた違った雰囲気の曲ということで、ギターはメロディーを大事にした。レコーディング中にレコーディング・エンジニアのマサヤ先生に気持ちを込めて弾くと伝わるよと言われたので精一杯気持ちを込めた。それだけ」

Dr/モグ「良く寝て当日食べ過ぎないで(笑)本番に弱いので、メンバーの足を引っ張らないように。「Bell〜」の始まりはゆっくり、後半は早くなるので、ペースを保つ。皆の音

をしっかり聴き取ること」

Ba/バン「自分たちで作ったのに私達にとってはとても難しい2曲で、ただ音を外さずに演奏/歌うとか、リズムを合わすということがとても難しかった。何テイク録ったか分からない…」

■今作、2曲入りの45回転、7インチというフォーマットへのこだわりはありましたか?

「最初から森下さんからの提案でした。私達も7インチ、45回転、2曲というのは憧れでもありましたし」

■他にモーリーからの提案やアドバイスはありましたか?また、「電話の話しが無駄に長い」とか、「酔っぱらって電話してくるな!」とか、氏に対する苦情・腹が立ったことがありましたら教えて下さい(笑)。

「あはは!特にないのですが(笑)、i-Podを首から下げて、今日はキャンディーズとC-3'S聴きながら来たよ〜♪と満面の笑みでいらした時は、とっても光栄だなと。キャンディーズと同じ並びで聴いてもらえるなんて!!!」

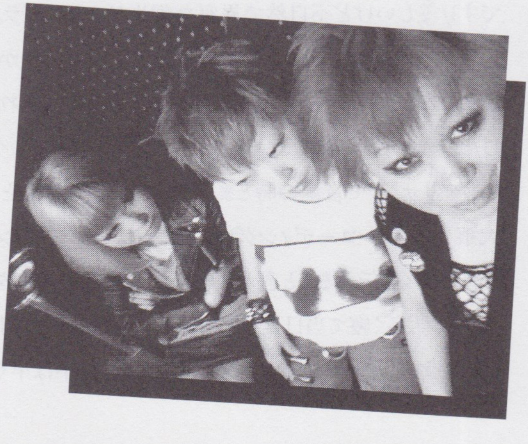
■THE C-3'S、今後の展開・野望などなどありましたらお聞かせ下さい。

「ライヴも色々な所で色んなバンドとやってみたいし、今まで四日市に来なかったバンドを迎えて企画もしていきたい。

キーボード/シンセも取り入れてみたいし、色々楽しみたいです。そしていつかアルバムが出せたらな、というのは目標です」

■最後に、読者に何かメッセージがありましたらお願いします。

「是非!私達の本拠地VORTEXで、C-3'Sのライヴを観てください!そして一緒に踊りましょ〜!」




ERNST AND THE EDSHOLM REBELS

まさかの再結成に続きジャパン・ツアーも差し迫ったE.A.T.E.R.(ERNST AND THE EDSHOLM REBELS)fromスウェーデンwith VENDETTA from東京のDOOMSDAY TROOPS OVER JAPAN TOUR 2013'!ここ日本に於いてマニアックなRAW PUNKSを魅了して止まない彼等が日本にやって来る!そんな秒読み段階の最中、丁寧且つ詳細に当時の事からプライベートな事まで答えてくれた。
MOB47しかりスウェーデンの人間は非常に物事の進行がスムーズで丁寧で、IKEAのイメージそのままであると個人的に思う。
北欧の寒風が生んだRAW PUNK ATTACKの奇跡の来日に刮目せよ!(文頭に名前が無い回答は立ち上げメンバーであるMikael Gröten Karlssonが答えてくれた) INTERVIEWED:SO(HARDCORE SURVIVES)

■まず、メンバーの名前やパート、年齢、今までにプレイしてきたバンド等について教えてください。

Åke Auge Källback「ギター。51歳。昔はHOLLYWOOD INDIANS、NIHILIST ERNA等でプレイしていた。今はTHE CAT & THE UNDERDOGSというバンドでAVSKUMのHåkanも一緒に演ってるよ。E.A.T.E.R.に加入したのは2010年から」

Mikael Gröten Karlsson「ギター&ヴォーカル。47歳。昔のバンドはINCHARGE、



PRODUCT ASSAR等。1982年にE.A.T.E.R.を始めたんだ」

Mikael Micke Larsson「リード・ヴォーカル。48歳。昔はPSYKJOUREN等でプレイしていた。今はVÅLDSAMT MOTSTÅNDってバンドもしているんだ。1983年からE.A.T.E.R.に加入」

Snake Andersson「ベース。46歳。K-D SKINSってバンドをしていた。1985年にE.A.T.E.R.に加入」

Emil Edman「ドラム。22歳。昔のバンドは…。今はVÅLDSAMT MOTSTÅNDというバンドでもプレイしているよ。2010年にE.A.T.E.R.に加入」

■皆さんお仕事はしていますか?家族はいますか?

Åke「俺は10代の犯罪を犯した子達が集まる施設で働いていて、結婚もしている。娘1人と2人の息子がいるよ。Mikaelはアルコールやドラッグ中毒の人たちの施設で働いていて3人の子供がいる。Micke、Snake、Emilは皆同じような状況かな(笑)」

■スウェーデンという国について教えてください。

「とても美しい国で良い人が多いよ。全てを崩壊させるライト・ウィングの連中が走り周っているのは残念だけど」

■E.A.T.E.R.の再結成以前にはバンドをプレイしていましたか?またパンク・シーンに関わっていましたか?





Åke「俺自身は彼等に誘われるまで15年もバンドはしていなかった。それでも、関わっていた多くのバンドからパンク・アティテュードを得ていたよ」

■2010年に敢行したUSツアーはどうでしたか?またなぜアメリカに行く事になったのですか?

「アメリカは素晴らしかったよ。TVには映らないようなバンドと競演したり、沢山の面白おかしい人々にも会った。VIOLENT PARTYのザックからオファーがあって実現したんだ。一切の躊躇も無く行ってしまったね」

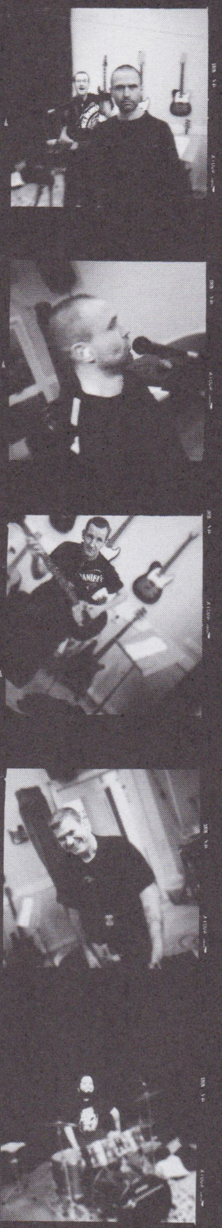
■僕はDJを回す時には2010年のE.A.T.E.R.の新作EPをかけるのですが、素晴らしい作品なのに流通が悪くて残念でしたよ。

「有難う!21世紀に俺達はE.A.T.E.R.をやりたかったんだ。流通はディストリビューターや会社なんかを通さず全部自分たちでしていたんだ。誰にも俺達のレコードから金を搾取されたくなかったんだ。今まで日の目を見なかったEP『ABORT THE SYSTEM(システムを止めろ)』って事だね。流通が悪かったのは残念ながらヨーロッパ外や日本への送料も高かったしね」

■日本ツアーはあなた達から僕にオファーしてくれましたよね。なぜ日本に興味を持ったのですか?

「OK、まずPUNK ILLEGAL 2010というパンク・フェスティヴァルで1985年からの古い友人であるASTA KASKのMickeに会ったのが始まりなんだ。彼が日本に行った時の事を話してくれて、皆クレイジーでフレンドリーで80年代からのスウェーデンのバンドを愛している事を教えてくれたんだ。アメリカ・ツアーの時にJakke(ex-NERVESKADE)とAlex(ex-PERDITION)と2、3日一緒にいて日本の素晴らしさをここでも教えられた。そう、だから滅茶苦茶日本に行きたいぜ!ってなったんだ。Soが日本での良いオーガナイザーという事も聞いたし、俺達の曲で世界で一番クレイジーな日本のパン





ABORT THE SYSTEM - BEFORE IT ABORTS YOU!!

クスが暴れてくれる事を楽しみにしているよ」

■いつ頃からパンク・シーンには関わりましたか?またどうやってパンクを聴く機会を得たのですか?

Åke「1977年にパンク・ロックを聴き始めて、それから英語の新聞で新しいバンドを知ったりした。勿論、スウェーデンのファンジンなんかもね。それから、地元のレコード屋に通ってパンクっぽいジャケットやバンド名のレコードを買ったりしたよ。Mikaelは1980年から聴き始めてそれと同時にバンドも始めたんだ。独学で楽器を覚えて簡単な4〜5個位のコード進行で人生やフラストレーションの事について歌っていたよ。大人達からの評価も上々だったし、町をぶらついて不満を言っている事なんかよりよっぽど意味がある事をしたと思っているね。それと、80年代初頭にはNY VÅGっていうラジオ番組があって、毎週新しいRAW PUNKなバンドをかけていたんだ、そこにはE.A.T.E.R.なんかもね」

■多くの日本のパンクスが80年代初頭のスウェーデンのバンドに影響を受けたり、大好きなのですが、当時のシーンはどんな感じだったのですか?また、ストックホルムやヨーテボリ等各地のシーンは繋がっていましたか?

「俺達の様なローカルなバンドは各地に存在していて、ライヴも色々な所で行なっていたんだ。ANTI CIMEXやPRODUCT ASSAR、

AVSKUMにASTA KASK、MODERAT LIKVIDATION、SÖTLIMPA、MOB47等々。そこで出会い飲んだり、楽しい時間を過ごしていたよ。本当に沢山の思い出があるけど、全部なんていくら時間があっても語りつくせないよ」

■NISSES NÖTTERというバンドをご存知ですか?小学生の時にバンドを始めたと聞いたのですが、当時ではそれは当たり前の事でしたか?

「そのバンドは知っているよ。何回か1983年にライヴもした事があるし。多くのバンドが82年から84年にかけてライヴをしていたと思うけど、皆幼かったよ。俺達は大体15歳から17歳位に始めたんだ」

■スウェーデンではレコードのDIYリリースが数多く存在していましたが、UKのRIOT CITYやNO FUTUREのようなインディーズ・レーベルは存在していましたか?

「殆どのバンドがDIYでリリースしていたと思う。でも、DIYなバンドをサポートするレーベルも少なからずあったよ、REALLY FAST RECORDS(Comp LPS、KURT I KUVÖS等)、A-RECORDS(ANTI CIMEX)、PANG RECORDS(ASTA KASK)等の様にね」

■当時からのパンクスで今でもバンドをプレイしている人はいますか?

「ギターを再び手にしてバンドをまた始める人間も結構多いよ」

■どんなバンドに影響を受けましたか?

「UK77'/UK82'。それにUS80'sなんかもね」

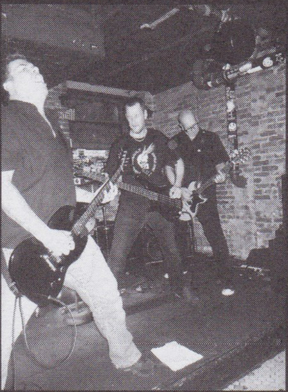
■歌詞は何のことについて歌っているのですか?

「政治的な事と不安について。俺達はポリティカル・バンドであると思っているよ。何かに対して立ち上がろうとした時、それは既にポリティカルな事であり、基本的なアプローチだと思うんだ。ポリティカルな事に参加しようとしまいと関係ない。政治的な観点から来る強い感情の表現だと、自分達の音楽を感じている。音楽や政治を語る時には歌詞が参照されるけど、それは決して政教新聞ではないよね。しかし、俺達の根底や社会的背景にある表現方法なんだ」

■1st EPをリリースした当時はどういう感じでしたか?また社会的背景は歌詞にも表されていましたか?

「俺達のサウンドはシャープなギターと、歪んだベース、ムカつく程良いドラムから凄い





スピードで進化を遂げたと思うよ。そんなお陰でヴォーカルのMickeのパフォーマンスも派手だった。82年から83年にかけては既にシャープに仕上がっていたと思う。1st『Doomsday Troops』や『Chaos Cassette』にみられる様にね。勿論、その当時世界で起こっている事に影響を受けていたよ」

■今と昔を比べると、あなたの身の回りで起きた変化とは何ですか?

「昔はファンジンや遅く到着する手紙、電話でコミュニケーションを取っていたけど、今はFACEBOOKやインターネットがあるし僅か数秒で連絡が取れるよね。それは良い事なのか…」

■幻の2nd EPを僕自身がリリース出来た事は凄く光栄なのですが、どうして当時にリリースされなかったのですか?

Micke「本当にリリースをしたかったのだけど、資金的に難しかったんだ。貯めていた資金をうまく使う事が出来なかったのはまだまだガキだったからだと振り返れば思う。それで、世に出る事がなくなった」

Mikael「それに、俺達の音楽が2nd EP『Abort The System』や3rd EP『Dieu et Letat』(※こちらも未発表音源)から離れていっている雰囲気があったと思う。古いロック・サウンドはE.A.T.E.R.では無いと思ったし、俺はこのバンドのオリジナル・メンバーだからね。あと、1st EP『Doomsday Troops』や『Chaos Cassette』のようなサウンドを求めていた人の興味が失せていってしまった事もあるかな」

■日本のバンドや文化について知っている事はありますか?今回が初来日ですか?
「メンバー全員が初来日だよ。沢山の日本人や文化と触れ合いたいよ」
Åke「日本のバンドは少ししか知らないな〜。D-CLONE、THE STALIN、TEENGENERATEにめっちゃ可愛い少年ナイフ」
■今のスウェーデンのパンク・シーンとの関わりはありますか?また競演するバンドは?どれ位の頻度でライヴをプレイしますか?
Åke「個人的には、俺達はもっとライヴをしなくちゃと思うね。勿論、シーンとの関わりはあるよ。対バンはMASSGRAV、ASTA KASK、SKÄMSSUBMERGED、THURNEMAN、VICTIMS等かな」
■パンクと生活のバランスはどの様に考えていますか?
「何をするにしてもパンクからの影響だと考えている。どの様に物事に対処するべきかをパンクが教えてくれたんだ」
■それでは最後にメッセージをお願いします。
「ABORT THE SYSTEM – BEFORE IT ABORTS YOU!!(システムを止めろ!奴等がオマエを止める前に!!)」

Hardcore Survives presents
E.A.T.E.R.(ERNST AND THE EDSHOLM REBELS) from Sweden
& VENDETTA from Tokyo "Doomsday Troops Over japan tour 2013"

11/2(sat) Tokyo -Antiknock-
11/3(sun) Nagoya -Daytrive-
11/4(mon) Osaka -King Cobra Squat-
11/6(wed) Takamatsu -Toonice-
11/7(thu) Hiroshima -Border-
11/8(fri) Tsuyama -k2-
11/9(sat) Yokkaichi -Vortex-
11/10(sun) Tokyo -Earth Dom-



Death to False Metal Punk

INTERVIEWED:大倉　了(RECORD BOY)

「今度、スウェーデンのSONIC RITUALのEPを出すんだけど、日本で流通してほしい」と、Electric Assault Recordsという聞いたことのないレーベルから突然メールが届いたのが、今年の3月。良く聞けば、スウェーデンのスラッシュ・メタル・バンドANTICHRISTのEPも同時リリースとのことで、新しいレーベルにしてはおいしいところ持って行くなー、と、ちょっと興味を持ってやりとりしてたら、「SONIC RITUALのインタヴューやってくれるファンジンもあれば紹介して」なんて言ってきたので、これはレーベルの紹介記事にしたほうがいいのでは?と思い、このたび、el zineさんでページをいただきました。ところが、Electric Assault Recordsのリリースが延び延びになってる間に、個人的に以前から興味のあったデトロイトのシーンで、『F.O.A.D.』というメタル/パンクの4 WAY SPLIT LPをリリースしていたBitchy WitchのAlejandraさんからも連絡がありまして、新作をリリースするとのこと。さらに、もう1年以上前に送金して、あまりにも時間が経ちすぎてすっかり忘れてたBLUDWULFのJimmi Sinnからも急に連絡が来て、「オーダーもらってたヤツ、できたぜ！」と、自信満々でメールが。これは、今ならBOYにしかできない、メタル・パンクが結集する記事ができる！！と思い、Electric Assault、Bitchy Witch、そしてレーベル名で言えばBattlecoreのJimmi Sinnの3者にインタヴューしました。インタヴューなら、ただ訳してテキスト作ればいいんだから楽だろう、と軽い気持ちで始めてみたんですが、僕の貧弱な英語力以上に、どの人達も言葉づかいが悪いと言うか、ぶっちゃけ何言ってるのかサッパリ?な部分が多くて、かなり苦労しました。


右端がHenry。左の2人はNIFELHEIMのTyrantとHellbutcher

Electric Assault RECORDS

一応、今回のメタル・パンク特集の主役はこのレーベルのHenry君です。一体どういう経歴がある人物なのか知らないけど、スウェディッシュ・メタル・シーンの有望なバンドやミュージシャンと関わりが強いのか、SONIC RITUALとANTICHRISTの他に、デモEPがアンダーグラウンド・シーンで話題となった、サタニック・スラッシュ・メタルVAMPIREもリリースするかも？なんて話も一時してました(その話は結局流れたようですが)。そして極めつけは、BOYがちょうどメンバーとも直でやりとりしてた、カナダのメタル・パンクABSOLUTもリリース予定に入ってる!!!ABSOLUTは、MIDNIGHTやRAMMERでもギターを担当していたメンバーが参加してるモントリオールのパンク・バンドでして、BOYが生き残りを託したいくらいに大きな期待を寄せてる、最上級の注目バンドなんです。この目の付け所は、ちょっとタダモノではないと思い、SONIC RITUALの話なんかいいから、君自身のインタヴューにしましょう！という展開になりました。

■レーベルを始めたきっかけを教えてください。レーベルをやる以前から、メタルやパンクのシーンとのつながりはありましたか？

「簡単に話すと、Electric Assault Recordsはアメリカはロードアイランドのドゥーム・メタル・バンドPILGRIMのデモ・テープをリリースするために始めた。バンドがスタートしたばかりの時に彼らを見て一発で気に入ってしまって、彼らの音源を広めるために何かしなきゃと思ったのが始まり。その後、友人がやってるバンドの音源をリリースしていくことに決めて、NYCのNATURのデモが次の候補だった。カセット・テープでリリースしたかったんだけど、考えが変わってヴァイナル・フォーマットにしようと思った。だけど、バンドがEaracheと契約してからは、もう僕には何もできなかった。でも、いずれリリースまで持っていくつもりだよ！

SONIC　RITUALは僕の友人で、彼らのユニークな音楽性はもっと多くの人が聴いてみるべきだと思ってた。そんな時、もともと『The Last Exodus From the Land of the Dead』をリリースする予定だったレーベルの話を聞いたんだけど、そのシングルのリリースが3年くらい遅れてるっていうのがわかって、それでそのシングルをリリースする機会が僕に回ってきた。そして友人達の音源をリリースする形でスタートしたレーベルは、ANTICHRISTの音源をリリースすると決まった時に、良質な音楽をプロモートするという考えにハッキリ変わった。でも、どんな音源をリリースするにしても、バンドとの関係性が必要であり、それがレーベルの基本理念になっているかな。

Electric Assault Recordsを始める前は、Guitar World magazineに寄稿したり、友人であるNATURのToothとRyanといっしょにギグのオーガナイズとかもしてた。



BBQのブッキングとか、HOUR OF 13、INQUISITION、NOCTURNAL(ドイツ)、MIDNIGHTや、他にもたくさんのバンドのギグを企画した。そういったバンド以外や、他のシーンには特に関与していない。他の人からの影響は抜きにしても、自分が好きでサポートするバンドだけに集中していたいから、他のシーンに関与するのはちょっと違う気がするね」

■年齢、人種、住んでいるところ、あとリリース作品の詳細を教えてください。ANTI CHRISTやSONIC RITUALと仲がいいみたいだけど、スウェーデンに住んでいたことはあるんですか?

「ニューヨークで生まれ育って、今もここに住んでる。僕の名字は中国語で、家の血統を追っていくと中国の南、香港とかその辺になるみたい。僕の代で80代目ということになるらしい。

ASLT-01はPILGRIMの『Forsake Man』デモ・テープ。かなり作りこまれたドゥーム・メタル2曲入りの作品で、REVEREND BIZARREとBLACK SABBATHの影響を感じさせる。100本限定でリリースされて、即ソールド・アウトだった(Electric Assault RecordsのBandcampで聴くことができる)。次のASLT-02はSONIC RITUALの現時点での最新作、『The Last Exodus From the Land of the Dead』EP。リリースするのにたくさんの困難があったから、僕は"Cursed Mama"なんて呼んでるけど、なんとかリリースできてよかった。メタルとパンクのクロスオーヴァーを考えるのに、SONIC RITUALは今最も面白いバンドだと思う。SONIC RITUALと同時にリリースされたのが、ASLT-03現行スウェーデン、そして世界で最高のスラッシュ・メタル・バンドANTICHRISTの『Burned Beyond Recognition』EP。これは彼らの過去作品とは全く違って、格段にアグレッシヴに、そして邪悪な作品になっている。DARK ANGELの『Darkness Descends』か、SLAYERの『Hell Awaits』みたいな感じかな。B面はクロアチアのオブスキュア・スラッシュ・メタル・バンドEVIL BLOODの"Kill With Napalm"のカヴァーを収録してる。1000枚限定のハンド・ナンバリング入りリリースで、これもあっという間にソールド・アウトだった。ハンド・ナンバリングというのがこんなに大変だったのかというのが、このリリースでよくわかったよ。もうやることはないな。

今後のリリースは、ANTI-CIMEXみたいなサウンドのカナダのバンドABSOLUT、あ

とフィンランドのSvart　Recordsとの共同リリースで、ヘヴィー・ブルース/サイケ・ロック・バンドのGOLDEN GRASS。このバンドはLA OTRACINAのAdam Krineyが始めたニュー・バンド。さらに先のリリースでは、さっきも触れたNATURのデモのヴァイナル化、Brandon Farrell(GOVERNMENT WARNING、DIRECT CONTROL、MUNICIPAL WASTEのメンバー)がやってる、CELTIC FROSTとENGLISH DOGSに影響されたメタルコアのOBSESSORのEP。あとドイツのOCCVLTAのデビューLPも。これはSAINT　VITUSとHELLHAMMERをミックスしたみたいでカッコいいよ。まだ他にもリリースの予定は有るんだけど、また時期が来たら公表すると思う。
確かに僕のレーベルがリリースした最初の2作品はスウェーデンのバンドだけど、実際スウェーデンに住んだことはない。飛行機の乗り継ぎで5時間ストックホルムに滞在したくらい。そこでSONIC　RITUAL/IN　SOLITUDEのHenke　Palmとシティー・センターでコーヒーを飲んでさ。Henkeのことは知っていたけど、ANTICHRISTメンバーとは会ったことがない。お互い共通の友人はいたけどね。はっきりさせときたいのは、僕は別にスウェーデンのバンドだけが好きっていうわけじゃなくて、リリースした2枚がたまたまスウェーデンの最高の2バンドだったということ。スウェーデンには今もたくさんいいバンドがいるかって?もちろんさ。だけどそれはほかのどの国でも変わりない。スウェーデンはとても小さな国で、バンドもそれぞれのメンバーが掛け持ちでやってたりするから、それでたくさんのバンドが存在してるように思えるけど。だけど、まぁ、SONIC　RITUALみたいなバンドよりも、ダサいバンドの数の方が断然多いけどね…」
■SONIC　RITUALはまだ活動しているんですか?すでに解散してしまったと思ってました。
「僕から彼らのことはあまり話せないけど、とにかく解散はしていないということだけは言える。休止状態とでも言うのかな。HenkeはIN　SOLITUDEで忙しいし(IN　SOLITUDE以外にも、彼はPIG　EYESでも活動しているし、機会があればVAMPIREでも演奏している)、Linneaはthe　OATHで忙しいのと、もうスウェーデンに住んでいないというのもある。ViktorはVICTIMSのGarethといっしょに新しいバンドDIAGNOSIS?BASTARD!に打ち込んでるから。こんな感じでSONIC　RITUALとしての活動に十分な時間がないんだ。僕個人的にはまた近いうちに活動を再開してくれることを願ってい

るよ」

■ANTICHRISTのEPはよく売れたそうですが、今後が有望なスラッシュ・メタル・バンドの一つですかね。

「うん、だけど売れるというより、多く流通に流れているというか。かなりの数をトレードや卸でやりとりしたから、利益の面ではそんなにない。Electric Assault Recordsは始めたばかりのレーベルだし、まだ知名度もそれほどではないから、バンドだけじゃなく自分自身のプロモーションのため、そういった手段で多くやり取りをしていく必要があったんだ。言うまでもなく、レコードを入手してもらうのが第一だけどさ。ANTICHRISTが今最も注目されているスラッシュ・メタル・バンドだというのは間違いない。2000年代半ばから出てきたトレンド気取りのバンドはみんなやめたり消えていった(またはクソつまんなくなった)奴らばかりだったけど、ANTICHRISTはさらに良くなっていっているし、現代では考えられないようなユニークな音を作り上げている。僕は、彼らの『Forbbiden World』LPは、『Ride the Lightning』や『Show No Mercy』と同一線上に挙げることができる作品だと思う。たとえ新作シングルが今まで以上にエクストリームな音になっても、バンドはヘヴィ・メタル・フィーリングを常に維持し続けようとし



SONIC RITUAL

ている。最近のバンドじゃできないことだよ。新しいLPの発売が待ちきれない」

■あなたがthe OATHのEPのアメリカ流通を行ったのは、Linneaからの依頼があったからですか?

「僕がthe　OATHのデビュー・シングルのアメリカ流通を行った理由は簡単で、ただ純粋にあの作品を気に入っていたから。"Night Child"は最高だろ?Linneaが僕に、初期MERCYFUL　FATEと70年代のSCORPIONSを足したようなバンドをやってると教えてくれた時は、それはちょっと言い過ぎだろと思ったんだけど、僕が間違ってた。このバンドはアメリカでも紹介されるべきだ。そしてこれが僕の中で最高のセールスを記録したバンドになった。the　OATHについては、他にもいいニュースがあるんだけど、まあそれはもうしばらく待っててくれ」

■あなたの1stリリースであるPILGRIMについて、もう少し教えてもらえますか。

「PILGRIMはアメリカのロードアイランドの若いドゥーム・メタル・バンドで、REVEREND BIZARRE、SAINT VITUS、BLACK SABBATHに影響されている。最初に彼らを見たのはHOUR　OF　13と演ってた時で、ToothとRyanが彼らと同じ出身地だったこともあって、彼らに勧められてチェックしてみたというわけだよ。ティーンエイジだった僕は、パワフルなJonの声にとにかく打ちのめされた。彼らはアメリカのバンドがプレイする、トレンド・スラッジみたいなクソとかじゃ全然ない。この連中は本物のミュージシャンで、同じ情熱を共有できる奴らだった。面白いことにメンバーは日本のポップ・カルチャーとかにも興味があるらしくて、彼らの最大の夢は日本でプレイすることらしいんだ。だけどさっき君が言った通り、日本じゃ誰も彼らのことを知らない。日本でドゥーム・メタルといえばCHURCH　OF　MISERYやCOFFINSがいるけど、ドゥーム・メタルの認知度はどんな感じなんだい?」

■(一方通行のインタヴューなので会話のキャッチボールは成立しません。次の質問です)今後のリリース予定を聞かせてください。僕はABSOLUTのデモが最高に素晴らしかったから、彼らのMLPを楽しみにしているんですが。

「ABSOLUTのMLPは今秋にリリース予定だよ。デモが気に入ったなら今回は驚くんじゃないか?ギターが全く別物だからな。もしVOIVODのPiggyがANTI-CIMEXでプレイしたらどうなる?彼らの1st MLPはそんな感じになってる。さっきも言った通り、Sva

rt Recordsとthe GOLDEN GRASSのデビュー・シングルの共同リリース、NATURの2009年デモの12"盤、OBSESSORのEPとドイツのOCCVLTAのデビューLPは2014年の早い時期になりそうだな。いま動いているリリースといったらこんな感じ。他にもいくつかプランは決まっているんだけど、今はまだ言えない」

■リリースはアナログ・フォーマットにこだわってますか?CDは嫌いなんですか?

「アナログ・フォーマットだけでリリースをしようというのがレーベルを始めたきっかけでもある。ヴァイナル・レコードという点はとにかく強調したい。PILGRIMのカセット・テープをリリースすることになった時、その時点では今後レーベルを続けていく具体的な案とかは何も持っていなかったんだけど、今は完全にレーベルに身を捧げている。そして今後もヴァイナル・リリースでやっていきたい。別にアンチCDというわけじゃないんだけど、アメリカではダウンロードするか、アナログ盤やカセットを買うかのどちらか両極端だから、CDのセールスは難しいんだ。ダウンロードっていうのは確かに素晴らしい。バンドが了解してくれれば、僕は二つ別々のマスターを作りたい。一つはアナログ、一つはデジタルみたいにさ。そうすればアナログ派の人にはそのフォーマットが持つ最高の音を提供できるわけだし、MP3で聴きたい人にはそのベストな音を聴かせてあげられるというわけさ。デジタル・マスターをアナログ・フォーマットに、もしくはその逆にとか単純に考えておかしいだろ?僕自身はヴァイナル・フォーマットを好んでいるわけだけど、デジタルに比べてデリケートだし、まあそういったこともあるから、音がよければCDもいいかなって時もある。でもIRON MAIDENのCDで聴けるサウンドはマジでクソだ。全部デジタル・リマスターされてさ、音がいい感じに圧縮されてるというか、とにかくいい音になっちゃってるんだよ。だけどRUSHの場合は違ってさ、僕は70年代のRUSHのレコードは全部売って、『Sector 1』ボックス・セットを買ったんだ。これに関してはそんな酷い音にされていなかったから。あと編集盤とかの場合はCDの方がいい


ABSOLUT

かな。一つの作品のトラックが両面に分けられてると、CDの方を選びたくなるのはわかるだろ?(フィンランド・デスメタルの)NECROPSYのコンピレーションなんかは僕がCDを選ぶ場合の良い例だよ。熱くなっちゃってゴメン、だけどCDのメリットとデメリットというのはよく考えるところだからね」

■最近気に入っているバンドはなんですか?リリースしたいバンドはありますか?

「Electric　Assaultのことを考えると、頭に浮かぶバンドは一つだけ。やっぱりSATAN'S SATYRSだ。今アメリカで一番エキサイティングなバンドだと思うし、僕が今気に入っているバンドという点でも彼らが何より一番だ。彼らと友達であることはすごくうれしいし、必要な時があればいつでも手を貸したいと思っている。ただ残念なことに僕の

レーベルで彼らの作品を作る機会は今のところない。だけどBad Omen Recordsが僕よりも優れた仕事ができることはわかっているし、その方が彼らのことをより多くの人に知ってもらえるだろうから。ボストンのMAGIC CIRCLEも大好きだから、近い将来一緒に作品を作れたら嬉しい。彼らはまさに今のドゥーム・メタル・バンドがどうあるべきかということの良い手本だと思うよ。

ただレーベルがあまり多くのバンドを抱えてしまうのは望まない。一つ一つの作品に集中したいし、バンドをプロモートしていくにも少数の方がいい仕事ができると思うから。学校の先生みたいなモノだな。生徒が増えれば、それぞれにあてられる注意も散漫になっていく。たくさんのバンドと契約しながらそれぞれのリリースにフェアでいられるというのは難しいと思う」

■NYではショーをオーガナイズしてるみたいだけど、それについて教えてください。どのバンドのライヴがよかったですか？

「僕がブッキングした中で一番素晴らしかったのはMIDNIGHTだ。あんなライヴを見せてくれるバンドはMIDNIGHT以外はないよ。見るたびにスゲーことが起きるんだぜ。僕にとって残念なのは、ライヴ中に怪我をしたかヒドく酔っ払ったかで、その日見たことを何も思い出せないことだ。最初に彼らに出演してもらった時はもうホント凄かったんだ。ガラスがそこらじゅうに散らばっててさ、デカい十字架二つが粉々にぶっ壊されてて、素晴らしいショーだったよ。彼らを知って、MIDNIGHTこそ常に最高のライヴ・バンドだと思うようになった。オーストラリアのVOMITORもそれに並ぶくらいヤバい。奴らと道路を走るのは、もう狼の群れと一緒に走ってるようだね。他にもいいバンドはたくさんいたけど、この二つはとにかく予想できないことだらけだった」

■最後に読者にメッセージをお願いします。

「僕のインタヴューをしてくれて、ありがとう!あんたがElectric Assault Recordsに興味を持ってくれて本当にうれしかった。こうして日本のレコード店でもElectric Assault Recordsの作品が売られているというのは凄く最高なことだ。そしてみんながElectric Assault Recordsの作品を楽しんでくれることを期待しているし、そういった人たちには敬意を表したい。リアルなバンドと音楽だけを、僕たちだけのやり方でサポートし続けていこうぜ。Fuck the world!」

Bitchy Witch Records



「デトロイトのシーンは面白い、けど連中にコンタクトとっても無駄だ」という話はかなり前から聞いていて、実際、2002年にリリースされたFEAST　OR　FAMINEというクラスト・コア・パンク・バンドの自主リリースLPは流通最悪で、当時メンバーにコンタクトして入荷させるのにも大変苦労した思い出があります。その2年後の2004年に発表されたデトロイト・スラッシュ・メタルSAURONの1stアルバムもまた流通激悪で、その内容のクレイジーさも手伝って、アンダーグラウンド・シーンではカルトな名作とされています(現在は別レーベルから再発されています)。さらに近年では、ダイハードなメタル・ヘッズもデトロイトのシーンには一目置いていて、BORROWED　TIMEという正統派ヘヴィ・メタル・バンドのデモCDが、当店では大反響を呼びました。しかし、これも流通には乗っていなくて、他ではなかなか入手しづらい状況です。そして、この三者三様の個性的な連中が、一つの線でつながるというのが、デトロイトのシーンの面白さだと思うのです。メタル・パンク・ファンならばご存じのとおり、FEAST　OR　FAMINEはSHITFUCKERのメンバーが過去にやってたバンドで、SAURONとBORROWED　TIMEはメンバーが重複しています。この辺の事情について、Bitchy Witch RecordsのAlejandraさんという女性と、PERVERSIONというバンドのギター＆Vo.のFernandoさんのインタヴューを読んでいただきたいのですが、特筆すべきは、ここに名前が登場するどのバンドも、タイプはバラバラだけど、伝統を踏襲しながらも非常に個性的なスタイルを確立してるという点です。あと、ガラが悪い。Alejandraさんのシメのメッセージが素晴らしいです。

INTERVIEWED:大倉　了(RECORD BOY)

■レーベルを始めるに至った経緯を教えてください。レーベルを始める以前からデトロイトのメタル/パンク・シーンと関わりはありましたか?

Alejandra「『Filthiest of Apocalyptic Detroit』4 WAY SPLIT LPのリリース以前からメタルとパンク・シーンには関わっていたわ。ショーをいくつかブッキングしていたし、あのレコードに参加してるバンドはみんな友達だった。ちょうどお金があって、4 WAY SPLITとかいいんじゃないかな?ってあの時に思ったの。それであのレコードを作って、そしてリリースの後、FernandoがBitchy Witchに加わってくれて、一緒に運営していくことになったというわけ」

Fernando「Alejandraがスタートさせて、4 WAY SPLITのリリース後まもなく流通を手伝うために俺も参加した。個人的にやってるバンドのパートナーとなるレーベルが必要だったから。2003年にデトロイトへ引っ越してきて、それからDemoniac PossessionというZINEを始めた。Averno Recordsというレーベルもやってて、最初はテープをリリースしていた。それから2008年にそこで知り合った仲間達とPERVERSIONを始めた。Bitchy Witchへの参加はその後」



■年齢、人種、仕事等の個人的なことを尋ねてもいいですか?Alejandraさんは、バンドはやってないんですか?

Alejandra「バンドはやってない。ただゴミみたいな仕事をして学校へ行ってるだけ。人種について聞きたいのなら、私はラテン系だけど、SHITFUCKERのDaemon Bitchにユダヤの遺伝子もブチまけられてるわ」

Fernando「俺の出身はベネズエラのカルカス。歳は27歳で法律事務所で働いてる。そしてPERVERSIONでヴォーカルとギターを担当しています」

■レーベルの第一弾リリースは『Filthiest of Apocalyptic Detroit』4 WAY SPLIT LPで間違いないですよね?このリリースについて、もう少し詳しく教えてください。

Alejandra「そう、『F.O.A.D.』がBitchy Witchの最初のリリース。法律の問題でやっかいなことになってる友人を助けるためのお金が必要だったの。参加バンドもみんなとにかくマジだった。SHITFUCKERのShagratはアートワークを描いてくれたし、Fernandoは今一緒にレーベルを運営してるわけだしね。流通に関してもすごく一生懸命にやってくれてる。『F.O.A.D.』LPはBitchy Witchが資金を出してリリースしたわけだけど、あれはデトロイトのメタル・パンク・シーンの人間みんなによる新しい構想だったのよ」

Fernando「Bitchy Witchのファースト・リリースは確かに『F.O.A.D.』4 WAY SPLIT LPだ。Alejandraが録音とプレスにもお金を出してくれて、リリースして1年もしないうちにソールド・アウトになった。そしてアンダーグラウンドのシーンを通してたくさんの仲間達と出会うことができて、今後のリリースのディストリビューターとも出会えた。そうして、俺たちのアンダーグラウンドな表現を理解してくれる人たちの手に、今後も俺たちの作品が届くだろう」

■新作のPERVERSION『Storm of Evil』LPについて教えてください。

Alejandra　Photo by Kim Khamo



Alejandra「『Storm of Evil』LPのリリースは、『F.O.A.D.』4 WAY SPLIT LPの後にBitchy Witchがやるべき、ごく自然な流れだった。PERVERSIONは常にエクストリームでブルータルなバンドだったけど、最近はその凶暴性はもう次の段階に行ってるような感があって。そんな時に彼らの1st LPがリリースできるっていうのは凄くうれしいことね」

Fernando「俺が一番考えてたことは、PERVERSIONのレコードを作ったら、流通を自分で完璧にコントロールしたかった。どこのディストロに何枚送ったか、とかを正確に把握してさ。作品については、7曲入りの古風なデス/スラッシュ・メタルのレコードだよ。PERVERSIONは、SEXTRASH、HADEZ、PENTAGRAM(チリ)、HOLOCAUSTO、SEPULTURAなどの南米バンドと、POISON、SODOM、DESTRUCTION、PROTECTROなどのジャーマン・スラッシュに影響されている。LPは既にリリースされて、儀式じみたギグもやってプロモーションしてるよ」

■Bitchy Witchの今後のリリース予定を教えてください。

Alejandra「次のリリースはチリのEJECUTOR。南米のクレイジーで速いデス/スラッシュが好きなら、間違いなく気に入るわ」

Fernando「EJECUTORはサンチアゴのデス/スラッシュ・メタルで、90年代後期から活動しているんだけど、今回出る『Tiempo Profano…Tiempo Divino』が1stフルになる。ATOMIC AGGRESSOR、DEATH、TREBLINKA、SEPULTURAが好きなら絶対にオススメするよ。それと、コロンビアのPRESAGIOの7"EPもリリースする。伝説的カルト・バンドのNEBIROSのメンバーもやってて、BLASFEMIA、PARABELLUM、NEKROMANTIEみたいな感じの、まぁコロンビア特有の原始的ウルトラ・メタル・タイプのバンドだ。スゲーんだよ!!あと、これも言っておきたいんだけど、チリのINFERNAL SLAUGHTERってのも出す。POSSESSED、KREATOR、DESTRUCTION、RAZORなどの影響が感じられるバンドなんだが、最近のバンドでは完璧に近いオールドスクールなデス/スラッシュ・メタルだと思う。レコーディングはほぼ終えていて、PERVERSORのTorridがサンチアゴのEtagordスタジオってとこでミックスからマスタリングまでやってる。EJECUTORのアルバムもそこ。彼のスタジオは、冒涜と死の匂いが充満する連中の巣窟と化してるよ」

■リリースはアナログ・フォーマットにこだわってますか?CDは嫌いですか?

Alejandra「CDはマジでクソ。私らがCDをリリースすることはないわ。永久不滅なフォーマットなわけでも、コレクタブルなモノでもないでしょ。デジパックのCDはいくつか持ってるけど、そうじゃなければ私はホントCDなんていらない。絶対にヴァイナルを選ぶ。南米のバンドはヴァイナルをリリースする工場がないから、彼らのCDリリースだけは尊重するけど」

Fernando「俺たちのレーベルのリリースに関しては、アナログ・フォーマットにこだわる。CDはやらない。PERVERSIONのアルバムは、シカゴのUtterly Somber Creations (angeldelujuria@msn.com)がCDでもリリースしてくれることになってるから、バンドとしてはCDを否定してはいないけど、俺個人的にはやっぱり音楽はヴァイナルで聴きたい。もちろん、CDでしかリリースされてないものなら仕方ないけど。トレーディング・カードみたいに手軽に取引されるものじゃないんだよ、音楽は」

■今後リリースしたいと考えてるバンドはありますか?デトロイトのバンドでオススメを教えてください。

Alejandra「私は日本のPARASITEが大好き。デトロイトのバンドでは、MARROW、FINAL ASSAULT、SCUMなんかはメタル・パンクが好きな人にオススメだと思うわ。ノイジーなスラッシュが好きならチェックしてみて。SAURONのメンバーがやってるHARBINGERはメタル・ヘッズにオススメ。REAPER、SHITFUCKER、PERVERSION、ANGUISH、それとFAILEDってバンドやってるメンバーが集まったNUKEも注目すべきバンド。IRON MAIDENのリフにレミーみたいなVo.を乗せたロッキン・メタル・パンクで、今デモを作ってる」

Fernando「俺も最近注目してるバンドはいくつかある。ルイジアナのABYSMAL LORDってバンドのライヴをこないだブッキングしたんだけど、GRAVE　RITUALのメ

Death to False Metal Punk

ンバーのサイド・プロジェクトで、BEHERITや初期MORBOSIDADに電撃的なソロを爆撃しながら、激しくテンポ・チェンジするんだ。興味がある奴は:abysmalhell@gmail.comにコンタクトしてみるといい。パラグアイのBLACK HORDES SCORNも、このインタヴューを読んでるような奴ならチェックすべきバンド。HOLOCAUSTOとATOMIC AGGRESSORのミックスみたいな感じだよ。EJECUTORのベース・プレーヤーがやってるLapiz　Lazuliってレーベルからデモが出てる。ernestroyer@hotmail.comにコンタクトしてみて。デトロイトのバンドだと、NUKE、ISENBLAST、NOCTURNAL FEAR、DEMON BITCHとかかな」

■僕はデトロイトのメタルとパンク・シーンにとても興味があるので、もう少し聞かせてください。現行のスラッシュ・メタル・バンドで最上級にクレイジーなロウ・サウンドのSAURONのメンバーがBORROWED TIMEもやってて、ANGUISHがDIAMOND HEADと共演するなんて、日本では考えられないんです。

Alejandra「デトロイトのメタル・パンク・シーンはとても小さいのよ。だからいろんなバンドでメンバーは被ってるの」

Fernando「答えはシンプルだ。SAURONとBORROWED TIMEのギターをやってるVictorは凄いミュージシャンだけど、奴は俺の知る限りミシガンで一番の熱狂的なメタル・ヘッズでもある。だからSAURONも、スラッシュだけどヘヴィ・メタルありきのバンドだと思う。彼はヘヴィ・メタル・バンドで演奏することが生きがいで、彼のルーツに忠実なんだ。『F.O.A.D.』LPを聴くと、ANGUISHが以前のクラスト・スラッシュから、DIAMOND　HEADみたいなサウンドに近づいてるのがわかるハズだ。だからBORROWED TIMEとANGUISHが、DIAMOND HEADのデトロイトのショーをサポートしたのさ」

■デトロイトのメタル・ヘッズとパンクスの日常生活について聞かせてください。日本のニュースでは、デトロイトは市が破綻してアメリカのワースト・シティーになりつつあるとも報道されています。やはり危険な街なんでしょうか?

Alejandra「デトロイトでメタルやパンクをやるってのは、あんたや他の国の人達が考えてるようなファッショナブルなストリート・カルチャーなんかじゃ全くないの。何度も言うけど、シーンなんて凄く小さいのよ。メタルかパンクでいれば、クソみたいに扱われる

わ。女の子ならヤラセるバカ女みたいに言われるし、危険な時はレイプされたり殺されたりすることもありえる。男だったら、ホモ野郎っていじられて、カツアゲされたりボコられたりもする。市の大半は荒廃してきたわ。富裕層や、トレンドを追っかけてるバカな連中の居住区以外はね。終わってる。でも、メタルへのめり込めば、憎しみが生きるパワーに変わるの」

Fernando「俺はこの質問には、お前の求めてるような答えはしないよ。俺個人の生活は、仕事、PERVERSION、Bitchy Witchレーベル、ショーのブッキングなどで、日々忙しく充実してるから。俺は今、市内では生活してないけど、以前は失業率の高い街の、殺人事件の発生率も高い地域に住んでいた。でも、人間が絶対に住めないような場所ではなかった。確かに行政から完全に見捨てられて、建物も崩れたままのような地域もある。メディアはそういうネガティヴな面や銀行の破綻のニュースしか伝えないだろ。俺はそんなにこの街は危険だと感じていない。暴力やドラッグがはびこって、ギャングみたいなのが勢力を争ってたりするが、俺が以前住んでた南米の街に比べたら、まだマシ。まぁ、デトロイトのシーンはとにかく規模が小さいんだよ」

■シカゴやオハイオなどの近隣の州のシーンとの関係はどうですか?SUPERCHRISTのChris Blackは、デトロイトのバンドは面白いよ、って言ってたんですが。

Alejandra「オハイオやシカゴのシーンとの関係はとてもいい。多くのバンドがこのデトロイトに来てプレイするわけじゃないけど、Fernandoはとてもいいバンドを教えてくれて、連れて来てもくれる。でも、私らをゲス扱いするときは、デトロイトの連中はクレイジーだからメチャクチャにしてやるわ」

Fernando「プロモーターやバンド、そしてメタル・ヘッズも、シカゴやオハイオの連中とはお互いにリスペクトし合って上手くやってる。デトロイトのバンドも、その二つの都市には時々出向いて演奏してるよ。PERVERSIONはこないだシカゴでやってきたし、SHITFUCKERとREAPERも最近シカゴに行ってる。シカゴのシーンは良くサポートしてくれるし、友達もたくさん居る。イリノイは、DEATH STRIKE/MASTER、DEVASTATION、the CHASM、JUDAS ISCARIOT、CIANIDEとか、USアンダーグラウンド・メタルの歴史を振り返っても、凄いバンドを多く生み出してきた州だしね。俺はシカゴのシーンの関係者はみんなリスペクトに値する素晴らしい人達だと思う。音楽の情熱

も凄い。クリーブランド—オハイオは、ANGUISHとPERVERSIONが一度行って、MANTICOREとNEKROFILTHと共演してきた。SHITFUCKERも行ってる。NUNSLAUGHTER、MIDNIGHT、DESTRUCTORとも、もちろん一緒にやってきたよ」

■最後に読者にメッセージをお願いします。

Alejandra「el zine読者諸君、Bitchy WitchのPayPalに今すぐ有り金全部送金しな!!もしPERVERSIONのLP買ってないんなら、あんたはビビりのクソ・ポーザーだね。てめーのバカさ加減をさらけ出してるfacebookやツイッターのアカウントなんか削除してさ、クソつまんねーブログもやめちゃえばいいんだよ、誰もあんたのことなんか気にとめちゃいねーっつの!!こっちはそんなんに付き合ってるほど暇じゃないの。そんなんで時間無駄にしてるんなら、もっとMANOWAR聴く時間でも作れば!!」

Fernando「インタヴューしてくれてありがとう。SABBAT、NECROPHILE、CASBAH、SACRIFICE、KUROなどの、独創性のある、型にはまらない日本のバンドには敬意を表したい。コンタクトを取りたい人は、いつでも連絡してほしい」

Bitchy Witch：b.w.records666@gmail.com / www.bitchywitch.net
PERVERSION：perversion.detroit@gmail.com





JIMMI SINN

BLUDWULF~ROTTEN UK ~BATTLECORE

そしてこの人の登場です。相変わらず、インターネット上でリリースの告知して金を集めて、それからのんきに製作に取り掛かるという具合のようですが、毎度そうなるとわかってながらも、BOYは付き合ってしまってます。ビルの屋上の柵を自分から超えて、下を眺めて、「うぉー、超怖ぇー!!やべーよー!!」とか言ってるような感じでしょうか。現在はBLUDWULFでの活動を停止して、ROTTEN UKというバンドをやってる、Jimmi Sinnさんにインタヴューできました。

INTERVIEWED:大倉　了(RECORD BOY)

■まずはあなたがパンク・シーンに関わり始めたころの話から聞かせてください。あなたの最初のバンドはTHE ENDで間違いないですか?

「俺がパンク・シーンに深くかかわり始めたのは90年代中頃だったと思う。当時のロ

チェスターやNY西部のパンク・シーンは瀕死の状態で、デス・メタル、ストレート・エッジ、ガレージ・ロックなんかはたくさんいたけど、もっとDIYなストリート・パンクやクラストを求めていたのは俺とほんの少人数だけだった。俺達は公園でパンク・ハウスみたいなのを始めて、そのうちにゴス/ニューウェイヴ・パンクがよくやってたVertexっていうクラブにたむろするようになった。当時のシーンの中に居て感じてた虚無感からの脱出や、新しいパンク・ミュージックを探求したくて、俺はTHE ENDを始めた。EXPLOITED、CHAOS UK、DISORDER、DISCHARGEなどのオリジナルのUKHCパンクと、ENT、DOOM、AMEBIXみたいなクラスト・コア、さらに日本のハードコア・パンクにもインスパイアされて、それらを融合したようなロウ・パンクを目指していたが、ストリート・パンクスにとってはヘヴィすぎて、クラスト連中にとってはキャッチーなサウンドだったTHE ENDに、当時のパンク連中は困惑してたよ!それでも俺達は一切ブレることなく、メタルでもSxExでもガレージ・ロックのショーでも演奏して、自分達のスタイルをさらけ出してきた。そういう俺達の、小さくてもDIYなシーンを作り、視野を限定しないという考えが徐々に実を結んでいったから、俺達はたくさんの若いバンドに影響を与えたと自負しているし、俺達とともに新たなシーンが形成されていったと思う。アメリカ国内の長期ツアーもやったし、ボストンのA GLOBAL THREATとのSplitと、『NATURAL PATHS TO EXTINCTION』という単独作の、2枚の7"EPも自分達で自主リリースした。ソノシートでリリースする予定だった未発表曲も2曲あるんだけど、一番後悔してるのは、俺が一番最初にやりとりを始めた日本のパンクスのうちの一人だったDISCLOSEのKawakamiと意気投合して、Split出そうか?なんて話にまでなりかけたのに実現しなかったことだ。俺に影響を与えてくれた伝説的なジャパニーズ・パンクスとのSplitの話が生まれかけてたのに、その先をしっかり進めなかった事を俺は永遠に後悔しつづけ

Death to False Metal Punk

るし、本当にバカだったと思う。THE　ENDの7"EPはオーヴァー・プロデュースで俺は好きじゃないタイプの音だったから、もっとロウでライヴなサウンドのデモ音源を、いつか限定LPで出せれば嬉しいんだけど」

■BLUDWULFを始めた頃の話を聞かせてください。

「THE ENDが消滅しかけてきた頃に、俺とギターのAlex "sid richards"(R.I.P.)は、BLACK UNIFORMS、ENGLISH DOGS、WARFARE、GENOCIDEや80年代のメタルに完全にハマりだして、もっとヘヴィな新しいことをやりたくなっていた。THE ENDをやっていても、SLAYER、MOTORHEAD、VENOM、CELTIC　FROST、VOIVODなんかはよく聴いてたし、メタルもパンクも同じくらい好きだったから、自分らでメタル・パンクスって言いだしたのもこの頃だった。そして、メタルとパンクを完璧に融合できるチャンスは今だと、その時感じた。俺がストリート・パンク・シーンに関わるようになってから、他のパンクスの多くも成長して、新しい何かを求めているのを感じていたし、俺達がその"新しい何か"を提示してやりたかった。たいがいのパンクスはグラムや77スタイルに流れて行ったけど、その一方で、もっとスラッシュな方へと向かう奴もいたし、とにかく今がグッド・タイミングだ、と、その時感じ取ったんだよ。音楽のスキルもしっかりある若いパンクスを見つけて、終わりかけてたTHE ENDをBLUDWULFとして立て直して、その後は知っての通りさ」

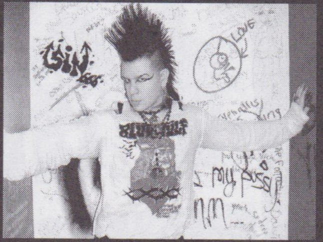
■Charged RecordsやHells Headbangersから作品をリリースした経緯を教えてください。Charged Recordsはまだ存在するんですか?

「CASUALTIESでCharged Recordsもやってたジェイクとは良い友達だったし、彼は当時メタルやスラッシュにも入れ込んでいた。彼はBLUDWULFのヴィジョンを良く理解してくれて、サポートしたいと言ってくれたんだけど、それと同時に俺とJakeは、ストリート・パンク・シーンがネクスト・レベルに向かう必要性を感じていた。BLUDWULFのレコードを出すってことは、当時のCharged　Recordsにとってはリスクを伴う大きな賭けだったんだが、セールスはとても良くて、MUNICIPAL WASTEやTOXIC HOLOCAUSTなどの、それまで触れたことのないバンドに触れて興味を持つパンク・キッズも生み出せた。Charged Recordsは今はもう機能していない。でもJakeは現行のUK82/ストリート・パンク/ポゴ・パンクを集めた『Punx　Unite』comp.シリーズの次の企

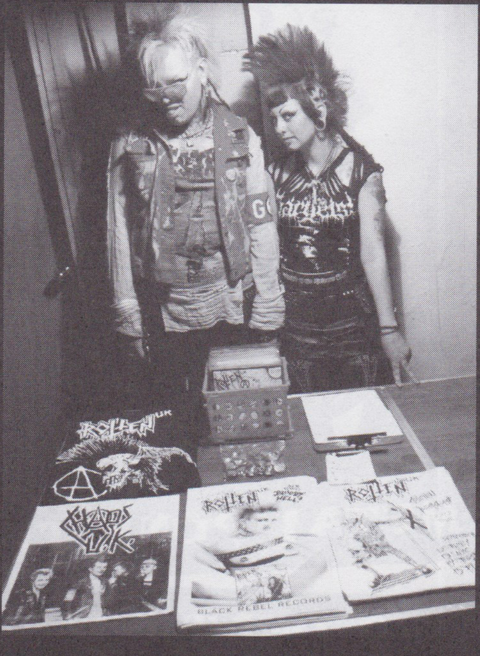
画も話していたし、何かまたやるんじゃないかな。BLUDWULFは、1stアルバム以降、もっとクラストとブラック・スラッシュなアグレッションが増したから、Hells Headbangersのようなレーベルからリリースしたほうがいいと単純に思ったんだ。Hells Headbangersからは、シングル・コレクションを今年の冬にリリースする予定もある」

■BLUDWULFはなぜ活動を止めたんですか?その後すぐにROTTEN UKを始めたんですか?

「BLUDWULFのメンバーはほとんどがポートランドに移住してしまったから、新しいメンバーを見つけてCHILDREN OF TECHNOLOGYとTIGER JUNKIESとの3 WAY Split音源を録音したんだが、やっぱり以前のメンバーじゃないとダメだと感じた。NUNSLAUGHTERとのSplitや他の新音源を録るためにポートランドまで行く計画も立てたりもしたんだが…。でも、俺はBLUDWULFを完全に解散させたつもりはないぞ!ヴァンパイア・スラッシュはいつか復活する。ROTTEN UKを始めたのは、単に原点回帰。もっとシンプルに楽しむためだけの、メタルのテクニカルなものとは離れたこ



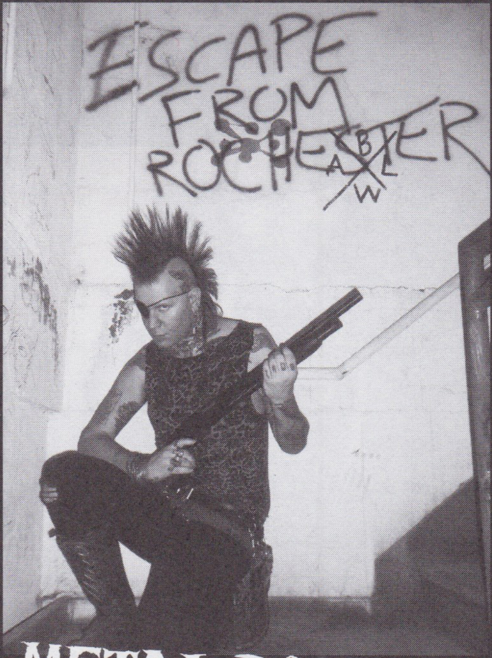




とをまたやりたくなっただけ。もっとルーズで、"DON'T GIVE A FUCK"(誰がどう思おうが知ったこっちゃない!)なパンク・ロックをね。俺がもともと好きだったようなバンドは、そういうスタンスのバンドばっかりだったし。でも、パンクが潜在的に持つメッセージ性をもっと強調したかった、ってのもある。メタルってのは音楽に社会性/政治性を反映させない傾向が強いが、BLUDWULFをやっててメタルのそういう面にはちょっと違和感があった。俺が好きだった古いUKパンクは、やっぱりメッセージ性も凄く刺激的だったし」

■ROTTEN UKはなぜニューヨークのバンドなのに"UK"が付くんですか?また、ROTTEN UKの今後のリリース予定があれば教えてください。

「もともとはROTTENの名前で始めたけど、イングランドにJohnny　Rottenの物真似





METAL PUNK TILL DEATH

NO DEATH TILL DOOMSDAY

Vo.がやってるSEX PISTOLSのカヴァー・バンドが居るみたいだから(そのバンドはスゲー観てみたいんだけど)、CHAOS UKみたく"UK"付けよう、って、ウチのギタリストが提案したんだ。俺はアタマにDISが付くバンド名みたいな発想で最初はイヤだったんだけどね。でも俺も南米のスラッシュ・メタル・バンドでもROTTENってのが居ることに気付いてたし、俺たちが80年代のUKを愛してるってのも良く表れてるから、まぁいいかな、と。たぶんいずれGBHみたいに、CHARGED ROTTENになるだろうな(笑)。今後のリリースに関しては、『Broken Coffins』ってタイトルのソノシートと、『Bat Shit Crazy』っていう7"EPをリリースする予定。これらのリリースに関しては凄く気合い入れてる。他にも企画はいくつかあるよ。誰か、LPのリリースをやってくれないかな。あと、俺が一番やりたいのは、ROTTEN UK-HOME VIDEOってのをVHSフォーマットで出したい。インタヴューやライヴ、ステージ以外の様子なども収録した、昔のJettisoundzやVisionaryみたいな(※どちらも90年代イギリスのパンク・ビデオをシリーズでリリースしていたレーベル)ヤツ。俺はあのシリーズのビデオを見て育ったからね」

■METAL PUNK DEATH SQUAD(以下MPDS)について教えてください。インターネット上で多くのパンク・キッズがこのリーグに共鳴していたけど、僕が感じたのは、発案者であるあなたは途中からそういうキッズにはあまり関与してないように見えたんですが。

「MPDSは俺とMasayasu(G.A.T.E.S.)、Joel Grind(TOXIC HOLOCAUST)、イギリスのStaff(Tardis Records、Destroy ZINE)の4人で始めた。不吉で世紀末的なパンクとメタルを愛して、それらを完璧に融合できる連中が集う同盟みたいなものを目指して。各地の支部でパッチを作って、それを付けてる奴をギグで見つければ、お互いが意気投合してサポートし合える、ってのが理想だったけど、時間が経てば面白がってた連中も冷めて、当初の理想みたいなのは忘れ去られた。MPDSは幻想だったと笑う奴はいるのかも知れないけど、まだ生き残りは存在するぞ!DEATH TO FALSE METAL PUNKS!!俺は今だってほとんどのジャケットにMPDSパッチを縫い付けてるし、ベストの背中にもしょってる。MPDSって、ちょっとメタリックな音楽性の面が強調されてきた感があるから、俺は今、パンク・アティテュードの方を強調していきたいと思ってる。METAL PUNK TILL DEATH…NO DEATH TILL DOOMSDAY!!!」



■僕はROTTEN UKにはメタル要素を感じませんが、そもそもROTTEN UKはあなたが始めたんですか?それとも誰か他のメンバーが始めたんですか?

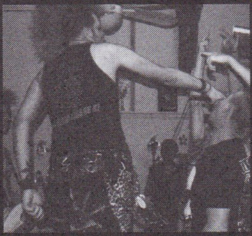
「俺にはパンクと同じくらいメタルの血も流れてるんだよ!たぶんだけどな!だからいいんだよ!!ROTTEN UKには完全にメタルの要素があると俺は断言する。7"EPはJack Control(WORLD BURNS TO DEATH)がマスタリングしてくれたんだけど、俺たちは彼に「VENOMのCronosがBLITZ歌ってるみたいなのを思い描いてくれ」って言ったんだ。今のROTTEN　UKは、EXPLOITEDの中期みたいな感覚のメタル・パンクに向かっている。ミドル・テンポの曲調で、俺的にはフィンランドのハードコア・パンク・バンドの円熟期みたいなヘヴィさだ。スカンジナビアのハードコア・サウンド要素はどんどん取り入れたい。ROTTEN　UKは、俺がSECT　SSっていうアナーコ・ゴシック・ポスト・パンクを短期間やってた時に、RAUNCHY SEXっていうバンドやってたMatt Sexxが、酒飲んでアンパン吸って生まれたようなUK82パンク・バンドの構想を持ちかけてきたのが始まり。周りがみんなノイジーなDISCHARGEスタイルばっかりだったから、なぜEXPLOITED、VARUKERS、CHAOS　UKウォーシップなバンドは出てこないん

だ?と、ちょっとパンク・シーンに退屈していたんだ。勘違いするなよ。俺はDISCHARGEが大好きだ。でも、ACTIVE MINDSが歌ってた"dis is getting pathetic!"には完全に同意するし、ノイジーなスラッシュをやるパンクはもう腐るほど存在するから、ROTTEN UKではOiみたいな感覚のあるハードコアをやろうって決めた。ドラマーとベース・プレーヤーはかわるがわる交代して、Andy　Toofarがベースに落ち着くかと思ったんだが、彼はオークランドに引っ越してEFLUXUSを始めた。次にベースを担当したThe Kulpritは、LSDキメてパトカーとカーチェイスしたり、ケンカして割れたボトルで相手の首を刺したりとか、刑務所を出たり入ったりしてるような奴だった。ULTIMATE ACID PUNK CHAOS!!!でも今は、RATIONAL ANIMALSってバンドのCam Deanがドラムで、Anarchy Jakeってのがベースで入ってくれて、今までで一番ガッチリまとまった演奏をできるラインナップになったと思う」

■ロチェスター周辺のパンク・シーンについて教えてください。最近いいバンドはいますか？

「ロチェスターのシーンってのは、USHC、スケボー・パンク、パーティー・パンク、ロックンロールだののシーンは基盤が強固なんだけど、BLUDWULFやROTTENは全く別物だ。俺は常に新しいものを求めてきたから、そういった主流の連中はどうでもいいよ。でも、俺たちみたいな、おかしなパンク・バンドのシーンも小さいけどしっかり存在する。ケンカや暴力、ギグでの暴動など、しょっちゅうライヴ・ハウスを出禁になる揉め事は起







こすけど、もっと俺たちが歌ってる内容にも注目してほしい。俺たちと一般社会との関係についても歌ってたりしてるんだが、酒/ドラッグ/パーティーといったイメージで覆われているから、それもほぼ無意味だ。FLIPSHITとTHE　NARCSっていうバンドはスケート・ロックだけど凄くいい。BASTARD、INTEGRITY、CHRISTIAN　DEATH、THE　STOOGESをミックスしたようなDEATHCAMPも注目してほしい。今言った3バンドは7"EPが出てて、どれも内容はいいよ。KHAOTIK　DIISORDERってバンドをやってた奴が新しく始めたロウ・クラスト・ステンチ・コアのASSBEERは、俺のお気に入りのロチェスター・パンク・バンドだ。ロチェスター以外のニューヨークにももちろんいいバンドは居る。シラキュースのHUNTED　DOWNや、NO　FUCKERのメンバーがやってるユティカのHERPES、アルバニーのNEUTRON　RATSとか。俺たちは流行りに流された連中とは決別してでも、NYのパンク・シーンを辛抱強く立て直していきたい。あと、BOG PEOPLEやFUNERAL DRESSをやってた連中が今やってるPRIMITIVE　PACTは素晴らしい80's　UKパンク・リヴァイヴァルなバンドだ。それと、ロチェスターのシーンで忘れてはいけないのは、バンドよりもROCHESTER TEENSET OUTSIDERっていうファンジンかも知れない」

■あなたは最近、どのようにして音源やパンク・ウェアーを手に入れてますか?ロチェスターにはパンク・ショップのような店はありますか?

「もう最近は俺もオンライン・ショッピングで買ってるよ。でも、古いグッズなんかは、フリー・マーケットや古道具屋で探して、メタルでもゴスでもオリジナルな80'sグッズをミックスして、俺らしくユニークなパンク・ルッキングになるように考えている。昔の映画やコミックからもファッションのヒントは得ている。セディショナリーズにハマっていた時は、http://blakkmarket.storenvy.comここと、たぶんfacebookが見つかると思うけどTERMINAL　CHAOSって店も刺激的だったから、好きな奴はチェックしてみるといい。常にいろいろ探しまわってはいるかな。レコード屋もロチェスターにいくつかあって、レコードに限らずオモチャなどのレアなコレクターズ・アイテムを売ってる店では、BARTERTOWNっていう、ホラー・ムービーや音楽ソフトを扱う店がある。あと、NEEDLE　DROPっていうインディーズ・パンクを扱うレコード屋もある。数年前は知り合いや友人たちが、ヴィンテージ古着やタトゥー・ショップなど、たくさん店をやってた

よ」

■あなたのパンク・ファッションはグラム・メタルのようなセンスもあって、そこが面白いと思うんですが、どういったパンクとメタルが好きだと、そんなふうになってしまうんですか?

「あ?80年代のヤツだよ!悪いかよ!!俺はもう、黒いクラスト・ファッションに飽き飽きしていたんだ。日本の80'sパンク/ハードコアのユニーク且つ完璧なスタイルにも強く影響された。ファッションは自分を表現できる芸術だ。着飾ることがポーズではない。確かにファッションにしか興味のない奴もいるだろうけど、そういう奴はこういうスタイルがトレンドじゃないと感じた瞬間すぐに居なくなる。ヴィジュアルと創造性は本来は一体なんだ。RIISTETYT、KAAOS、AMEBIX、ANTISECT、EXPLOITED、BROKEN BONESなどが俺を形成した重要なパンク・バンドで、BATCAVE/DEATH ROCKルックも常に俺を刺激する。SPLATTER PUNX FOREVER!!!!」

■最後に読者にメッセージでも言って、もうシメてください。

「最後まで読んでくれてありがとう。世界各地からのサポートが俺の20年間の原動力だった。アンダーグラウンドが俺の人生であり、俺にはここしかないし、他に何もいらない。様々な経験が俺を強くしてくれて、裕福な偽善者のためのクソみたいな奴隷社会を生き抜く術を学んだ。混沌のサイクルは巡り巡って、支配に下るか、次世代のために完全なる自由の社会を作るか。今がその時だ。peace//anarchy//chaos」



SOLPÄÄTOS



新潟発・フィンランド経由の3ピース・ロウ・パンクス、SOLPÄÄTOSがこの度1st EPをリリース!同郷のNO SURVIVORS、PISTOL JOKEとの3 WAYスプリット、そしてVA『RAW PUNKZ』を経て満を持しての4曲入りは、80's FINNISH HARDCOREへの絶えぬ憧憬と、2013年の今を生きるパンクスの堪えぬ衝動がぶつかり合った傑出の一枚。これを聴いて血湧き肉躍らなきゃ嘘だ!ギター・ヴォーカルのタカヒロさんに、メールでインタヴューさせてもらいました!　Live Photos by KENTA NAKANO(NO ASSOCIATION)

■1st EPによせられたSKIZOPHRENIAのユウさんのコメントによると、KAAOSの『RISTIINNAULITTU KAAOS』がFINNISH HARDCOREを知るキッカケとなったようですが、そもそものパンク/ハードコアとの出会いはどんなものでしたか?

「中学生の時に聴いたLAUGHIN'NOSEですね。それまでも音楽は聴いていたんですけど、PUNK、HARDCOREとして意識しながら聴き始めたのはその頃かな。今ほどネットが普及していなかったので手探りで色々なバンドを探したりして。細かい事は考えずに気になったバンドは何でも聴いてみてましたね。あと、ブルーハーツが大好きでした」

■ちなみに、KAAOSの『RISTIINNAULITTU KAAOS』を初めて聴いたときはどんな印象を抱きましたか?

「ヤリタイ放題」

■SOLPÄÄTOSの結成は2008年頃とのことですが、どんな経緯で結成したのですか?また、SOLPÄÄTOS以前にバンドはされていましたか?

「僕がどうしてもフィンランド語で歌うバンドがやりたくて、今のベースと当時のドラムを誘ってSOLPÄÄTOSを始めました。LAMA、APPENDIX、DESTRUCKTIONS、POHJASAKKA辺りを聴いていて、KAAOS以外にもこんなにかっこいいバンドがいるんだ!と思ってすごく好きになっていきましたね。それまでは日本語や英語で歌うバンドしか聴いた事がなかったのでフィンランド語の語感にもかなり痺れました。SOLPÄÄTOS以前もバンドはやっていました。もし万が一気になる人がいたら直接聞いてみてくださーい(笑)。ベースのカズキ君とはその時も含めると10年ぐらい一緒にバンドをやっています」

■日本のLAUKAUSやPOIKKEUS、FOLKEIISといったバンドも、その初期はFINNISH HARDCOREの影響が強かったですが、SOLPÄÄTOSを始めるにあたってこれらのバンドのことも意識されましたか?

「特にそれ程意識はしていなかったですね。勿論どのバンドもかっこいいなと思って聴いていましたけど。それとフィンランド語でやるってこと以外は何も考えていなかったので」

■以前にNO SURVIVORS、PISTOL JOKEと共に自主で3 WAYスプリット『DON'T RELY GAIN IT!!』をリリースされましたよね。新潟で活動する同世代のバンド同士で、"人に頼らないで自分達で発信しよう!"という感じで作られたのですか?

「皆で集まって会議!みたいな大袈裟なものはなかったけどそれぞれがそうゆう意識は



持っていたと思います。世代的に近い3バンドで新しく、少しずつでも盛り上げていきたいなって。それと普段から仲のいいバンド同士だったので楽しいだろうなと思ったし。そんな感じです」

■今年の頭にリリースされたVA『RAW PUNKZ』にも参加されていますが、これはどういういきさつで参加することになったのですか?

「SKIZOPHRENIAのYU!君に誘われたのがきっかけですね。RAW　PUNKなオムニバスを作りたいって事で。あれは嬉しかったなー。新しい出会いも沢山あったし何もかもが最高でした。参加できて良かった。忘れられない事ばかり!」

■先日、遂に1st　EPがリリースされましたが、結成から5年目にして初となる単独音源ですよね。デモも出さずにいきなりシングル/アルバムを出すバンドも最近は結構いますが、5年程かかったというのは、"安易に出したくない"という思いもあったのですか?それとも、たまたま?

「かっこよく「安易に出すべきじゃないと考えていた…」とか言いたいけどたまたまですね。色々な歯車が噛み合って、個人的にはいいタイミングだったと思います。あっ、かな

り初期にデモを1枚出しました。ライヴで配布したぐらいだったので持ってる人はほぼいないと思います」

■1st EPのジャケット・デザインも、当時のバンドの作品を意識されたみたいですね。具体的にどのバンド/作品を意識されたか教えてもらえますか?ちょっとVAURIOのEPっぽいなとは思ったのですが。

「ご想像にお任せで。EPのアートワークはベースのカズキ君が作ったんです。ただ、フィンランドのバンドが好きなんだなって1発で分かるようなジャケットにしたかったから気に入っていますね」

■全体的にアナログ感溢れるアートワークですが、曲名や歌詞など…油性マジックで書いていますか?ユウさんのコメントに「パソコンが使えない」とありましたが、誰かに頼むのではなく、やはり「自分たちでやろう!」と?

「不思議と誰かに頼もうってゆう考えは全く浮かびませんでしたね。パソコンが使えない事もそこまで悩んだりはしなかったし。自分達が好きなバンドのアートワークも、ラフな手書きでアナログ感のある物が多かったからかもしれないです。当時は今みたいに







パソコンで作るなんてきっとなかったですもんね。全て油性マジックで書いてあります」

■ちなみに、バンド・ロゴはSORTOっぽいと思ったのですが…、関係ありますか?そもそもSOLPÄÄTOSというのは造語のようですが、どういった思いを込めてつけたのですか?

「SORTOは意識していないですね。確かにそう言われてみればって感じだったので逆にビックリしました!

バンド名に関しては意味を持たせたくなくて、響きでSOLPÄÄTOSとつけました。バンド名を決めて少ししてから似たような言葉は実際あるのかな?と思って辞書をひいていたらPAATOSって言葉があったんです。決心って意味で。本当にあるんだと驚いたんですが、やっぱりバンド名に意味はないです」

■A面1曲目、「SINÄ JA MINÄ」ですが、英訳すると「YOU AND ME」という意味みたいですね。歌詞の内容はどんなことをテーマに?

「日常とライヴ・ハウスの光景ですね。誰だって何かを抱えながら生きているんだろうけど、今は騒ごうぜっていう。あまり説明するのも野暮なのでこのくらいで」

■また、フィンランド語の歌詞は辞書で調べながら書いているのですか?発音も、全然片言っぽくなくて、本当にフィンランドのバンドみたいで驚きました。

「辞書で調べたり、翻訳サイトを使ったりです。本当は辞書だけで歌詞が書ければ1番いいんですけどね。なかなか。そう言えばSOLPÄÄTOSを始めようと思っていた頃、フィンランド語の辞書が高すぎて買えなかったんです。なので、全部のページをコピーしよう!と思ってすぐに新潟市の図書館までコピーをしに行ったりしましたね。脱線しましたがそんな事を思い出しました。

うーん、発音に関しては特に意識してないかな。フィンランドのバンドが好きでいつも

聴いているからなのかなとは思っていますけど。EPをリリースしてから、周りの人にフィンランドのバンドみたいって言われたりするのは単純に嬉しかったりします。やっぱり80'sフィンランドのバンドに強い憧れがあるので。だけど80's感に捕らわれすぎるのはダメだなって思いはありますね。僕らは今、現代で活動しているバンドだから」

■「TULEVAISUUS」(FUTUREという意味でしょうか?)だけ一切歌詞を載せていないのはどうしてですか?実はカヴァー曲なのかなと思って、色々レコードを引っ張り出してみたところ、LAMAとKAAOSに同名曲があったのですが、聴いてみると違ったので、ちょっと気になりまして。

「そうですね、FUTUREって意味です。あの曲だけ歌詞を載せていないのは単純にスペースの問題です(笑)。カヴァー曲ではないですが、LAMAもKAAOSも最高」

■レコーディング時に各パート、最も気にかけた/重視したことは何でしょう?

「勢いを出したいと個人的には思っていました。とゆうよりそれしかできないんです。だから音源を作る時にしろ、ライヴをする時にしろそれは変わらないです」

■この1st EPは、メンバー皆さんにとってどんな作品/一枚となりましたか?





「レコードで単独の音源は初だったので本当に思い入れの強い1枚になりました。人との繋がりも含めて。僕以外のメンバーも、それぞれがそれぞれの思い入れを持っていると思います。あと、1st EPを聴いてくれた人からリアクションがあったりするのは素直に嬉しいし感謝です。インタヴューをしてくれた山路さんにも」

■最近聴いて気に入っているバンドや音源などありましたら教えて下さい。パンク/ハードコア以外でもOKです。

「LAMA、POHJASAKKA、DESTRUCKTIONS、APPENDIX、VARAUS、KOHU-63なんかはずっと好きでいつも聴いているバンドですね。お気に入りのバンドはフィンランドやそれ以外の国にもまだ沢山あるけどキリがないのでやめておきます。世界各国にかっこいいバンドが多すぎる!そしてやっぱり日本はかっこいいバンドが多すぎてやられます。衝撃的なほどに!」

■今後の予定や、「こういうことをしたい!」とかありましたら教えて下さい。

「PISTOL JOKEとNO SURVIVORSとの共同企画「DON'T RELY GAIN IT!」を不定期に続けているんですが、これからもっと今より頻繁にやっていけたらなと思っています。少しずつでも盛り上げていきたいし、何よりも自分達がもっと楽しめるように。企

画に来てくれた人達にも、今日は来て良かったと思ってもらえたら最高ですね。
僕らの予定としてはドラムの27さんが今年いっぱいで脱退するので、来年からは正式なドラムが加入するまでヘルプで活動していきます。ですができる限りの活動はしていこうと思っています。県外にも行きたいし。インタヴューなのに申し訳ないんですがせっかくなのでメンバー募集をさせてください(笑)。『バンドをやりたい人なら県内の人でも、県外の人でも構いません。離れていても練習など行けます。興味を持った人がいたらvakaumus@yahoo.co.jpまで連絡してみてください』」

■最後に、読者に何かメッセージがありましたらお願いします。

「瞬間を楽しみましょう。
僕とあなたの未来の為に!
KIITOS!」





CRIATURAS

弊誌vol.3にてインタヴューさせてもらったアメリカ・テキサスのパンクス、Eddie。ex BASTARD SONS OF APOCALYPSE～DESKONOCIDOS、現在はVAASKA～CRIATURASそしてレーベルTodo Destruidoの主宰者としてガンガン活動中なわけですが、前回のインタヴュー時にはまだ始動したばかりだったCRIATURASも、早いもので2ndアルバム『Espiritu de Libertad』をリリースするまでに至りました。そしてこの作品こそが、過去作と比べても完全に一皮剥けた強烈な仕上がりなのです。

スパニッシュ・パンクとジャパニーズ・ハードコアを掛け合わせ、そこにUSクラスト・コアやロックンロール・テイストも忍ばせた、長年のキャリアを積んできたメンバーならではの高完成度。特に叙情的な旋律から一気に炸裂するタイトル曲なんて、震撼せずにはいられないキラー・ナンバーです。ハスキー&アグレッシヴなスペイン語の女性ヴォーカルもこのバンドのウリですが、やはりSEVERED HEAD OF STATEやJ CHURCHなどを渡り歩いてきたChrisのドラムの"強い音"が鍵になっているかなと。

そんなわけでのインタヴュー。ベースのEddie、ドラムのChris、ヴォーカルのDruが答えてくれました。

Photos by Steven Ruud

■まずはCRIATURASの結成の経緯を聞かせて下さい。

Eddie「2009年の夏にCRIATURASは始まったんだ。最初はレコーディング・プロジェクトとしてスタートしたんだよね。ずっと俺は女性ヴォーカルのハードコア・バンドをスペイン語でやりたかったんだよ。何人かの友達と相談して、そして動き始めた。2、3ヶ月くらい練習した後にデモをレコーディングしてね。みんなサウンドに満足していたし、お互いにうまくやっていたから、今度はライヴをやろうって決めたんだ。そして初のショーを2010年の1月にやったってわけ」

Chris「Eddieがそのアイデアを持ちかけてきてさ、凄くイカしてるって思ったんだよね。僕も何かファストなパンクがやりたかったから、サウンドも順調に固まっていったよ」

■このメンバーが一緒になったのはどうしてですか?EddieとDruは一緒にレーベル、Todo Destruidoを運営していますよね。EddieとVictor(ギター)はDESKONOCIDOSをやっていた。そしてChrisは沢山のバンド、SEVERED HEAD OF STATEやJ CHURCH、SIGNAL LOSTなんかでプレイしていましたが。

Chris「僕が過去にやっていたバンドは全て解散しちまったから、5年前くらいからずっとダラダラしていたんだ。ちょうどそんな時にEddie、Dru、そしてVictorが南テキサスからオースティンに引っ越してきた。新しいグループの奴らとツルんで、一緒に音楽をやるってのがクールに思えたのさ」

Eddie「俺たちはみんな友達なんだ。だから一緒にバンドをやることにしたんだよ」

■CRIATURASというバンド名ですが、英語でCREATURESの意味ですよね。"CREATURE"という言葉自体、色んな意味を持っていますが(生物、女、子分、架空の動物、創造物、子、などなど)、どうしてこのバンドをCRIATURASと名づけたのですか?

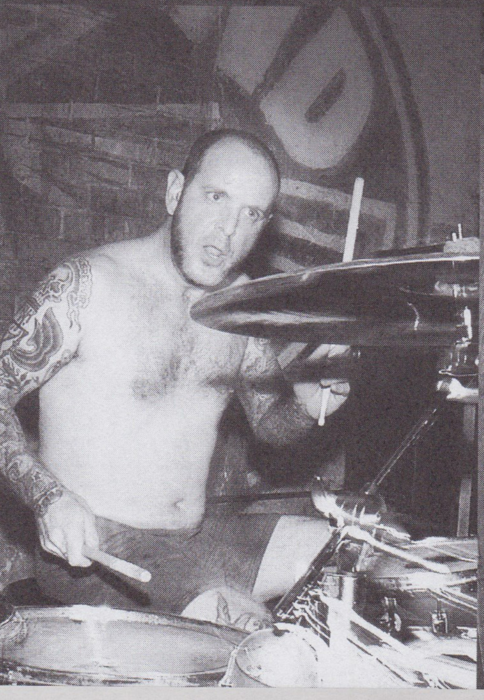
Chris「Victorがつけたんじゃなかったかな。これは"CHILDREN"のスラングなんだ。俺たちのサウンドとスタイルにドンピシャだと思うよ」

■曲作りと、あと歌詞についても聞かせてください。"Invierno Nuclear"という曲もありますが、これは核兵器がテーマの曲ですか?

Eddie「普段は俺が曲の基本的な骨組みを作っているんだ。そして残りはバンドみんなでつめていく感じかな」


CRUD
2008







Dru「その曲は核兵器が使われたあと、苦痛の季節についての歌よ」

■『Espiritu de Libertad』LPのレコーディング時に一番重視したことは何ですか?

Eddie「時間をかけて、できうる限りのベストな仕上がりになったことを確認する。それだけさ」

Chris「そうだね。曲そのものを強固な塊にしたかったんだ。実際にレコーディングのときは、他のパートを台無しにしすぎない程度に、できる限りラウドなドラムにしようといつもしているぜ、ハハハ…」

Dru「レコーディング期間中はマイコプラズマ肺炎にかからなかったのが嬉しかったわ、ハハハ!」

■タイトル曲"Espiritu de Libertad"のイントロがちょっとJUDGEMENTっぽいなと思いました。Eddieが日本のハードコアが大好きなのは知っていますが、他のメンバーはどうですか?

Eddie「そのパートはChrisが担当したんだよ。だから彼がJUDGEMENTを意識したかは分からないな」

Chris「日本のハードコアからは物凄く影響を受けているよ。あのパートをJUDGEMENTっぽくやろうとは思っていなかったけど、類似性については認めるよ。クールに聴こえて、しかもJUDGEMENTと比較してもらえるなんて光栄だから、全然OKだね!」

Dru「みんな日本のハードコアは大好きよ」

■LPのタイトル"Espiritu de Libertad"ですが、英訳すると"Spirit of Freedom"になりますよね?

Dru「イエス。まさにその通りの意味よ。自由とは、今日における物の見方のことも意味しているわ」

Eddie「このLPに収録した曲の多くが、自由に生きることであったり、少なくとも、できる限り自由に生きようと試みることについてなんだ。だから"Espiritu de Libertad"とこのLPを名づけたのさ」

■今回のジャケットのアートワークを担当している、Alex Wardとは誰ですか?このアートワークはCRIATURASをとてもよく体現しているし、力強く、素晴らしい作品だと思います。

Chris「ありがとう!このカヴァー・アートは僕のガール・フレンドのAlexが描いたんだ。彼女は自分の作品は全て手作業で描いてて、ちょうどバンドに関する絵も描き始めたところなんだ。彼女は素晴らしいアーティストだと思うし、このカヴァーによって、オースティン以外の人たちが彼女の作品に関心を抱いてくれたらと願っているよ」

■今作はResidue Records(アメリカ)とHardware Records(ドイツ)からリリースされていますが、決め手となったのは何でしたか?

Eddie「Jordan(Residue Records)は古くからの友人でね、彼にリリースを依頼されたとき、すぐにみんな了承したよ。Hardware Recordsに関しては、彼は以前にVAASKAのレコードを出してくれたから、今回も連絡してみたんだ。彼はVAASKAのレコードのとき、すごくイイ仕事をしてくれたからね。それでCRIATURASのLPも彼にやってもらったってわけ。俺たち全員、両方の仕上がりにはとても満足しているよ!」

■ところで、Druには好きなヴォーカリストっていますか?本当に熱情的で格好良いスタイルですね。

Dru「ありがとう!!!ALASKA Y LOS PEGAMOIDES(スペイン)のAlaskaが大好きなの。それにCOMESのChitose、PARALISIS PERMANENTE(スペイン)のEduardo Benavente、SIEKIERA(ポーランド)のTomaszね」

■では、最近のバンドでオススメを挙げてもらえますか。

Eddie「Todo Destruidoからリリースしているバンドは、本当に全部大好きだよ。だからこそリリースしたんだしね。だからオススメしたいのはKURRAKA、SUDOR、IMPALERS、LA URSS、SKIZOPHRENIA、ZYANOSE、POLISKITZO、DRAPETOMANIAとかかな。他の現在進行形/最近のバンドだとFORWARD、INFERNOH、FRAMTID、そしてINSTITUTIONが最高!」

Dru「もう、好きなバンドなんて、あまりにも沢山いて名前を挙げられないわよ!」

■他のバンドやレーベル、仕事などの近況についても。

Eddie「俺とDruはまだTodo Destruidoをやっているよ。VAASKAでもプレイしているし、それに新しいバンドを2つ始めた。DYEとEKSTRAKTIONっていうんだ。あと、今でもホテルで働いているよ…」

Chris「パワー・ポップ・バンドのGHOST KNIFEってバンドもやってて、新たに取り掛

かっているプロジェクトではギターを弾いている。テキサスの盲学校でヴァンとバスの運転手として働いてて、日常生活には心底ウンザリしちまってるよ、ハハハ」

Dru「今は4つの仕事を掛け持ちしている。それとKURRAKAでもプレイしているわ」

■CRIATURASの今後の予定や目標は?

Eddie「もっとツアーに出たい!」

Chris「そうだな!東海岸?西海岸?中央アメリカ?ヨーロッパの北部?それとも日本?できるなら全ての場所に行きたいね!!」

■インタヴューさせてくれてありがとうございます。日本の読者にメッセージをください。

Eddie「インタヴューをありがとう。そしてCRIATURASに興味を持ってくれて感謝するぜ!」

Chris「テキサスにいつでも来てくれよ!!Muchas gracias,domo arigato,and thank you」

Dru「うん、どうもありがとう。テキサスに是非来てね。銃をブッ放して、BBQをしようね」



LASHING SPEED DEMONS VOL.15






山口冨士夫

…今回はガラッと趣を変えて、先日亡くなった山口冨士夫を取り上げます。el zine的には全然接点なさそうなミュージシャンだけど、実は山路編集長からのリクエストであります。…ちょっと、その昔DOLLで連載してた「LET'S START DIGGIN'」(山口冨士夫のバンド、村八分も"パンクの元祖"として紹介したことがあった)のノリを思い出しつつ行ってみよう。基本的にハードコアとか全然関係ない話が続きますが(そして今回、長いです)、よろしくお付き合いください。

TEXT:大越よしはる

生誕〜ザ・モンスターズ / ザ・ダイナマイツ

山口冨士夫。1949(昭和24)年8月10日東京生まれ。英国人の父親と日本人の母親の間に生まれ、孤児院で育ったハーフの少年は、中学生の時にギターを弾き始める。そして阿佐ヶ谷界隈の悪友たちとザ・モンスターズを結成。65年のことだった。メンバーは瀬川洋(ヴォーカル、ギター)、山口冨士夫(リード・ギター、ヴォーカル)、大木啓造(サイド・ギター)、吉田博(ベース)、野村光朗(ドラム)の5人。冨士夫、時に16歳。

やがてグループ・サウンズが全国的なブームとなり、都内の米軍キャンプなどでR&RやR&Bのカヴァーを中心に活動していたザ・モンスターズは、1967年11月のレコード・デビューの際に、レコード会社の意向でザ・ダイナマイツと改名。ポップでフラ

ワーな感じの楽曲に山口冨士夫のあまりにもワイルド過ぎるギターが炸裂する、デビュー・シングルにして代表曲「トンネル天国」(オリコンチャート73位：ちなみにこの曲はリード・ヴォーカルも冨士夫だった)で知られることになる。

1968年3月に2枚目のシングル「ユメがほしい」をリリース、続く68年4月には唯一のオリジナル・アルバムとなった『ヤング・サウンドR&Bはこれだ！』がリリースされる。…しかし当のメンバーたちにとっては、改名も職業作曲家の手になるレパートリーもすべてレコード会社からのお仕着せ…という不満が絶大だったらしい。当時のライヴの定番だったルーファス・トーマスの「Walkin' The Dog」以外は、カヴァー曲の選曲もすべてレコード会社によるものだったとか(アルバム・タイトルに"R&B"とありながら、BEE GEESなどポップな曲が目立つ)。アルバムのリリース以降も、68年6月に「真夜中の動物園」、9月に「恋は？(クエッション)」、69年5月に「バラと悪魔」…と、3枚のシングルがリリースされているが、「トンネル天国」をはじめとするGS然とした楽曲は、ライヴではほとんど演奏されなかったという(それはそれで十分カッコいいのだが。特に「トンネル天国」はGS史上に残る名曲だと思う)。

1998年に発掘リリースされたザ・ダイナマイツ69年のライヴ音源『LIVE AT THE "GO GO ACB"1969』を聴くと、当時の彼らのレパートリーはDEEP PURPLEやオーティス・レディング、そしてBLUE CHEERヴァージョンの「Summertime Blues」やCREAMヴァージョンの「Spoonful」など、全曲が洋楽のカヴァーで、その頃には同時代のいわゆるニュー・ロック/アート・ロックを志向していたことがわかる。よく"B級GS"などといわれるダイナマイツだが、本人たちはあくまでも本格的なロック・バンドを目指していたし、実力も十分にあった。

しかし彼らの"求める音楽"とレコード会社など周囲に"求められる音楽"は最後まで食い違ったまま(「トンネル天国」以上のヒットも出なかった)。メンバーそれぞれが志向する洋楽ロックの方向性もそれぞれに違ってきていたし、その上事務所からは薄給の飼い殺し。…結局ダイナマイツは69年末に解散してしまうのだった。

そして村八分へ

当時、同時代の洋楽ロックの影響を受けていたのはザ・ダイナマイツだけではなく、グループ・サウンズといわれたバンドたちの多くが、GS然とした楽曲から本格的な洋楽ロック志向へと移り変わりつつあった。横浜のゴールデン・カップスあたりを中心に、その頃アメリカで話題だった"スーパー・セッション"を模したミュージシャン同士のセッションがよく行なわれるようになり、1970年初頭、山口冨士夫もそんな場に顔を出すようになる。冨士夫が、後に村八分で活動を共にする青木眞一と知り合ったのは、その頃だったという。当時の冨士夫は"ザ・ダイナマイツ"名義でステージに立ってもいたらしい(実際には"山口冨士夫グループ"ともいうべきセッション・バンドだった。一方で当時瀬川洋と野村光朗による"ニュー・ダイナマイツ"も活動していた)。

そして1970年3月、山口冨士夫はチャー坊と出会う。…"チャー坊"こと柴田和志は50年(昭和25年)5月5日生まれ。京都の政治活動家の次男で、文学や絵画に傾倒するアーティスト志向な青年だったが、後に興味を音楽に向け、69年5月に渡米。そして12月、ヘルズ・エンジェルスが観客を刺殺した事件で有名な、オルタモント・スピードウェイでのTHE ROLLING STONESのステージに衝撃を受けて、自身もバンドの結成を決意したという。アメリカから帰国し、東京を経て京都に帰ろうとしていたチャー坊は、市ヶ谷で冨士夫と知り合った。

チャー坊とツルむようになった山口冨士夫は京都と東京を往復するうち、1970年5月10日には初めてチャー坊と共にステージに立つ。日比谷野外音楽堂に出演した"山口冨士夫グループ"は、冨士夫(ギター)、石川恵(ベース:当時フード・ブレイン〜後にファーラウト他)、つのだひろ(ドラム:後にFLIED EGG他。日本の英詞ロック史上に残るバラード「Mary Jane」で超有名。ちなみに漫画家つのだじろうの弟)、成毛滋(キーボード:元ザ・フィンガースのギタリスト。後にFLIED EGG)、そしてチャー坊(ダンス)という豪華な編成だった。

コレを機に、山口冨士夫とチャー坊は新たなバンドを結成する。最初期のメンバーは冨士夫(ギター)とチャー坊(ヴォーカル)、そして染谷青(ギター)、青木眞一(ベース)、恒田義美(ドラム:後にハルヲフォン)の5人で、1970年6月30日に京都円山野外

音楽堂で初のライヴを行なう。この時点ではバンド名自体が決まっておらず、"ななしのごんべぇ"(そのまんま)を名乗っていたのが、時には"山口冨士夫グループ"だったり、水谷孝(ギター、ヴォーカル)をフロントに"裸のラリーズ"を名乗ったり、流動的…というか不安定な活動だったらしい。その頃はオリジナル曲もなく、THE ROLLING STONESのカヴァーを中心としたセッション・バンド的な活動だったようだ(裸のラリーズは水谷を中心に67年から活動していたが、当時は実質的に水谷一人だった)。

1970年秋に染谷青と恒田義美が脱退。山口冨士夫とチャー坊は、その頃からオリジナル曲を作り始める。70年12月、当時17歳だった"ユカリ"こと上原裕(ドラム)が参加し、翌71年1月にはチャー坊の旧友・浅田哲(ギター:フォーク・クルセダーズ〜シューベルツで知られる、はしだのりひこ…の従兄弟)が加入。この編成になって、バンドは村八分と名乗るようになる(よくもまあ、付けも付けたりといった感じのバンド名…)。ようやく編成が固まった村八分は、京都市内のディスコ「ガロ」での精力的なライヴ活動に乗り出す(ちなみに当時の"ディスコ"では、レコードではなく生バンドの演奏で踊っていたのである)。71年3月20日には京都大学西部講堂で、ディスコのハコバンとしてではない、コンサートでのデビュー…を飾り、そして早くも71年4月には大阪のスタジオでデモ録音を行なった。

この時に録音された6曲は、20年を経た1991年5月にCD『草臥れて』としてようやくリリースされた(CDのタイトルともなった初期のレパートリー「くたびれて」は、村八分として初のオリジナル曲だったという)。村八分の音楽性は、このレコーディングの時点でほとんど完成していたといっていい。

…THE ROLLING STONES/キース・リチャーズの影響を色濃く感じさせる、山口冨士夫の鋭いギター。本当にSTONESそのものな感じのフレーズを弾いているのに、STONESのリフのモロなパクリじゃないのが不思議、としか言いようのないセンスで、とにかくリフ・メイカーとして並外れたものがあると思う(スライド・ギターも上手かった。ギタリストとしては、先に述べた"スーパー・セッション"の主役、マイク・ブルームフィールドの影響も大きかったという)。ちなみにこの時点で冨士夫はまだ21歳。

そして、一般に"ひらがなのロック"などと形容されるチャー坊…の(曲名通り)"ぐにゃぐにゃ"した歌唱。『草臥れて』の時点ではまだ青いというか、時にはユーモラスに

さえ聴こえるヴォーカルだが、“びっこ”“めくら”“かたわ”といった放送禁止な言葉が次々と飛び出し…そしてそれは誰かを差別するのではなく、アウトサイダーたる自身を刺そうとするかのような棘を持っていた。何より、THE ROLLING STONESに範を求めながら、一方で徹底的に、独自な日本語のロックにこだわったその姿勢(同時代の日本のバンドでは、はっぴいえんどと双璧を成す…と、個人的には思っている)。

そんなマジカルなR&Rを引っさげて精力的な活動を開始した村八分だったが、一方でそのステージングはあまりにも気まぐれ過ぎた。ステージに上がって、延々とチューニングだけして引っ込んでしまったり(苦笑)、会場に来ても結局ステージに上がらなかったり(…)。あるいはステージに出て演奏を始めても、気分が乗らないとチャー坊が歌わない曲があったり(そういう時はインストゥルメンタルになった。『ライブ』収録の「のうみそ半分」が実例)…と、かなり一筋縄ではいかない(?)連中だったらしい。そこらへんもある意味パンク的なアティテュードと言えなくもないが(苦笑)。

ともあれ1971年6月頃から、山口冨士夫(ギター)、チャー坊(ヴォーカル、ハープ)、浅田哲(ギター)、青木眞一(ベース)、ユカリ(ドラム)という編成で、京都を中心に活発なライヴ活動を行なっていた村八分だった(71年7月には福岡でも演奏している)。そしてバンドは、71年秋には拠点を東京に移すこととなる。

一方でバンド内にはドラッグが蔓延し、そしてメンバー間の人間関係は悪化の一途。山口冨士夫が麻薬所持で逮捕されたりなどの事件もあって、1971年10月にはユカリが脱退(その後ごまのはえを経てSUGAR BABEに参加。後に青木眞一はニューミュージックの世界に行ったユカリを強烈に非難している)。ユカリの後任には、ドラムの経験がなかった“カント”こと渡辺作郎が加入した。71年11月には東京大学駒場祭や慶応大学三田祭に出演するが、その後71年末にはチャー坊の気まま過ぎる(…)ステージングに業を煮やしたか、青木が脱退する。結局カントも72年春には脱退(村八分参加以前からやっていた○△□の活動に戻る)。

リズム・セクションを失った村八分は京都に戻り、立て直しを図る。1972年春にはチャー坊と浅田哲の旧友だった“ヨッチャン”こと加藤義明(ベース)が加入し、その後72年5月にはアメリカ滞在中にチャー坊と親しくしていた“シゲト”こと村瀬茂人(ドラム:71年当時はカメラマンとして村八分のステージを撮影していた)が参加する。ヨッ

チャンは元々ギタリストでベースの経験がなく、シゲトはカント同様、楽器の経験自体なし。当然ながら最初はどうにもぎこちないアンサンブルだったが、バンドはライヴを重ねていった。この頃バンドは、京都KBS放送のスタジオでオンエア用の録音を行なっているが、お蔵入りに（2003年になって『UNDERGROUND TAPES 1972 KBS京都スタジオ・ライブ』として発掘リリース）。

そして1972年8月27日、村八分は新編成で初のコンサート形式のライヴを、京都円山野外音楽堂で敢行する。ヨッチャンとシゲトの参加以降、古巣「ガロ」での連日連夜の演奏をリハーサルのようにして、精力的なライヴ活動を続けるうちに、新たな村八分の演奏はどんどんまとまっていた。72年9月〜10月にかけては福岡市内のライヴ・ハウスでハコバン状態のライヴを繰り返し、72年11月11日には京都会館で"村八分公演"を主催。1週間後の11月18日には慶応大学三田祭前夜祭に出演。この時のライヴは30年近く経った2000年にCD『LIVE'72－三田祭－』としてリリースされている。

現存する村八分の音源で1972年後半の演奏を聴くと、ユカリ在籍時のグルーヴに較べてどうにもリズム隊がたどたどしい感じに聴こえてしまう。それでも、タイトなスケジュールのライヴ活動を重ねる間に、楽器初心者だったシゲトのドラミングは目ざましい向上を見せていた。そして72年末までには、新たな村八分の演奏は新たなグルーヴを創り出していた。

この頃、マーク・ボランなどを撮影したことで有名な写真家・鋤田正義が山口冨士夫を撮影。村八分の音楽的なモデルとなったTHE ROLLING STONESもメイクをしていた…グラム・ロックの時代だ。当時の村八分の写真を見ると、彼らも立派な（？）グラム・ロッカーに見える。そしてグラム・ロックがパンクの源流のひとつになっていることは、今更言うまでもないだろう。

年が明けて1973年1月には、京都大学西部講堂で2日間連続のワンマン・ライヴを行なう。一般に、この時の演奏が村八分のピーク…と言われることが多い（この時のライヴのうち7曲は、2003年にリリースされた『UNDERGROUND TAPES 1973京都大学西部講堂』で聴くことが出来る。残念ながら音質はあまりよくない）。その後2月にはフジテレビの番組「リブヤング」に出演。「鼻からちょうちん」「にげろ」の2曲を演奏して、話題となった（2000年にシングル「Recorded Live '73」としてリリース）。

2000年に『LIVE'72－三田祭－』がリリースされて以降、『ライブ』と『草臥れて』以外の多くの演奏…が、CDで聴けるようになった（決定的だったのは05年の『村八分BOX』だった）。改めて、シゲトとヨッチャンが加入して間もない1972年後半と73年1～3月の音源を聴き較べると、演奏の違いはかなりはっきりしている。

1973年初頭のライヴにおける、山口冨士夫と浅田哲のソリッドなギター・リフやソロの有機的な絡み合い…村八分では、最初から最後まで冨士夫がリード・ギターで、それ以外のギタリスト（浅田＆ヨッチャン）はサイド・ギターとしてクレジットされていたが、浅田脱退直前の73年3月頃の音源を聴くと、ツイン・リードに近いアンサンブルも聴かれる。そして、別人のように上達しているヨッチャンとシゲトのリズムのキレ。客に悪態をカマしまくるチャー坊の、自由過ぎる（？）アティテュードは相変わらずだったが（笑：『LIVE'72－三田祭－』では、チャー坊の「客の、レベルが、低い！」「なんか言いたいことあるんやったらバンドやれ、バンド」というMCが聴ける）。

村八分の終焉

1972年には東芝からレコード契約のオファーがあったが、バンドは（というかチャー坊は）それを断り、結局73年に入ってエレック・レコードと契約を果たす。結成から約3年、バンド史上ベストな状態でいよいよレコード・デビューか…と思われた村八分だったが、しかし悪魔のグルーヴ・マシーンがそのまま転がり続けることは、やはりというか（？）かなわなかった。ステージ上に限らず、ひたすらに唯我独尊な姿勢を貫いていたチャー坊と、他のメンバーの関係は、徐々に悪化する。レコード契約が決まるのと前後して、浅田哲がクビ同然にバンドを脱退。

1973年4月、村八分はギタリスト一人の4人編成でエレックのスタジオに入り、録音を行なっている（『村八分BOX』で聴くことが出来る）。しかし、やはりというべきか、納得の行くサウンドにはならなかったようだ。それはそうだろう…ギター2本の絡みを活かしてきたアンサンブル面で、浅田哲の抜けた穴はそれだけ大きかっただろうし、心理的にもメンバーたち自身が思った以上に、ダメージは大きかったらしい。

…ともあれ再び京都に戻った村八分は、改めて立て直しを図るのだった。ヨッチャン

が本来のパートだったギターを担当。そして新たに“エーイチ”こと見掛栄一（ベース）が参加。ギター2本の5人編成に戻ったバンドは、1973年5月5日（チャー坊の誕生日）に京都大学西部講堂でのライヴを決定し、頓挫してしまったスタジオ録音に代わってライヴ・レコーディングでのアルバム制作を企画する。

しかし、浅田哲とのコンビネーションが崩壊したことは、山口冨士夫のメンタリティに大きく影響していた（浅田の脱退、というかクビはチャー坊が一人で決定したことで、冨士夫は納得していなかったという）。チャー坊との確執や諸々のトラブルもあり…冨士夫の心はバンドから離れつつあった。京大でのライヴは予定通りに開催され、ライヴ・レコーディングも実行されたが、結局冨士夫はこのライヴを最後に村八分を脱退する。

この時のステージを収録したアルバム『ライブ』（そのまんま）は、長いこと村八分として唯一の公式な音源だった。その演奏内容について、浅田哲在籍時のパフォーマンスを知っている人たちからは「本当はこんなもんじゃない」と言われ続けたし、メンバーたち自身もおおむね否定的なコメントをしている、ある意味残念なアルバムだが、そうはいってもこのライヴ盤が、1973年以降20年近い間、村八分の音を聴ける唯一のアイテムだった。

確かに浅田哲在籍末期に較べると、山口冨士夫とヨッチャンのギターの絡みはあっさりした感じに聴こえるが、それでもこのアルバム、その後の発掘音源に較べれば音質も遙かにいいし、チャー坊の歌もその後発掘された初期音源に較べると明らかに妖気が増している。リズム・セクションにも重みがある。

特に注目すべきは、以前の音源に較べてスピード感が増している点。エーイチ加入から1ヵ月にも満たない急造編成ながら、1973年1月頃のライヴに較べても、明らかにパンクな疾走感がある。いや、拙い演奏でファストなR&Rを叩きつけた後のパンクス同様、急造編成故のマジックだったのか。…村八分が、ミュージシャンとしての演奏経験よりも人間力（？）重視でメンバーを迎えてきたのは、偶然ではなく意図的なものだったらしい（楽器の経験のないメンバーには、ドラムも含めて山口冨士夫が教えたのだという）。73年当時の演奏をコレ以上の音質で記録した音源は結局現在まで出ていない

し、このアルバムが長い間"日本のロックの名盤"として語られ続けてきたのは、別にコレしかなかったからという訳でもないはず…だと思う。

1973年5月5日のライヴ後、バンドを脱退した山口冨士夫を除くメンバー4人はギャラを手に渡米する。サンフランシスコ到着後はそれぞれ別行動となり、結局村八分は自然消滅に近い状態で解散した。エーイチは帰国してから解散を知ったというし、ヨッチャンは長いこと海外を放浪していたらしい。73年7月には『ライブ』がリリースされて、ほとんど都内と京都でしかライヴを観られなかった村八分の音がようやく全国に届き、話題となる。しかし、その時点では村八分というバンドは既に存在していなかった。

『ひまつぶし』とそれから

村八分を脱退した山口冨士夫は間もなくソロ活動に入り、1974年4月には"トッチン"こと高沢光夫（ベース、ギター：ほとんどの作詞も担当。かつてザ・ダイナマイツのローディーだったという）、高橋清（ドラム、パーカッション）を迎えたトリオ編成で、エレックからアルバム『ひまつぶし』をリリースする。全曲で冨士夫自身がヴォーカルをとるだけでなく、ギター以外にベースやハープやパーカッションも担当し、村八分時代とは一味違った陽性のR&R（A面1曲目を飾る名曲「恋のビート」に顕著）と、冨士夫作詞の「おさらば」に代表される、やるせなさが滲むブルージーなナンバー…が並び立つ、これまた日本のロック史上に残る名作アルバム（ドラムの音が全体にペラペラな感じなのは残念だが）。高沢による歌詞も、まるで冨士夫本人の言葉であるかのようにハマっていると思うし、何より冨士夫の声自体が魅力的。そしてこのアルバムでの音楽性が、その後の冨士夫のR&Rの根幹になっている。

アルバム中で異色なのは、1曲だけ英語で歌われる「Can Not Wait」かもしれない。ここでの、いかにもこなれていない感じの（？）英詞と歌唱は御愛嬌という気もするが。しかしこの曲と演奏は、この少しあとにデトロイトから登場するSONIC'S RENDEZVOUS BAND（元MC5のフレッド"ソニック"スミスが1975〜80年にかけてやっていたバンド）に匹敵するような加速感を持っていると思う。村八分、そしてSONIC'S RENDEZVOUS BANDに通じる、見事なプロト・パンクっぷり。

『ひまつぶし』リリース直後の1974年4月20日、名古屋市公会堂で初のソロ・ライヴが開催され、山口冨士夫は小林英男（ベース）と高橋清（ドラム）を従えてステージに立ったが、「Can Not Wait」「からかわないで」「誰かおいらに」の3曲を演奏したのみで終了（！）したという。ちなみにその時の3曲（実際には、「Can Not Wait」の前に短いインストゥルメンタルが1曲演奏されている）は後に『ひまつぶし』がCD化された際にボーナス・トラックとして収録された（最後に「コレで終わり！」と言っているのが聴き取れる）。

その後山口冨士夫は横浜に引っ越し、1976年8月に、ルイズルイス加部（ギター：元ゴールデン・カップスのベーシスト。後にPINK CLOUD他）と新バンド、リゾートを結成する（加部によれば、リズム隊はライヴ毎に違ったという）。しかしリゾートは約8ヵ月の間に数回のライヴを行なっただけで、77年春には音源を残さずに解散する（76年のライヴを収録したブートが存在するらしい。聴きたい！）。

70年代が、後半に入っていた。SEX　PISTOLSが結成されたのが、1975年のこと。そして76年以降、ニューヨークやロンドンなどでパンク・ロックが盛り上がりを見せる。この頃、村八分のメンバーだった青木眞一もSPEEDを結成している。

…当時SEX　PISTOLSを聴いたチャー（竹中尚人）が「あ、村八分だ」と思った…という有名なエピソードがあるが、村八分の攻撃的なR&R（特に後期）は実際、パンクに先駆けたものだった（『ライブ』の約1年後にレコード・デビューした外道も日本における元祖パンクのひとつだったが、個人的には村八分の方がパンク度では上回っていたと思う）。しかしその頃、青木と上原裕（SUGAR　BABE解散後もプロフェッショナルなドラマーとしてメジャーなシーンで活躍。ちなみにその後、元ザ・ダイナマイツの瀬川洋とも活動している）以外の元・村八分メンバーは、あまり表だった活動が見られなかった。

リゾート解散後にも、山口冨士夫とルイズルイス加部にチャー坊を加えた新バンド（！）、という話が出たこともあったというが、当時加部が既にチャーとの活動を始めていたため、実現しなかったという（1978年後半頃の話と思われる）。

村八分再結成〜裸のラリーズ

…ところが、1979年春になってチャー坊から声がかかり、唐突に（？）村八分が再結成。チャー坊（ヴォーカル）、山口冨士夫（ギター）、浅田哲（ベース）に、"ミッキー"こと松田幹夫（ギター：元スラッシュ）と"ボーヤ"こと榊原敬吉（ドラム）を加えた5人編成だった。

再結成村八分は1979年5月〜7月にかけて何度かライヴを行ない、79年6月には日本テレビの人気番組「11PM」にも出演する。当時のライヴ音源も後に『村八分BOX』と『UNDERGROUND TAPES 1979 京都大学西部講堂』（2003年1月リリース）でCD化され、『UNDERGROUND TAPES』の方では隣雅夫（キーボード：だててんりゅう…だててんりゅうは73年5月5日のライヴで村八分の前座を務めている）を加えた6人編成での演奏を聴くことが出来る。しかし、かつてオリジナル一本で勝負していた村八分が、この時点ではTHE BEATLESのカヴァーなども演奏していたりで（それも悪くないが）…正直言って、往年の鋭さは感じられない。更にミッキーが肝炎のため入退院を繰り返し、活動は滞る。山口冨士夫はまたしてもチャー坊との関係が悪化し、村八分としての活動継続に消極的だったこともあり、結局、再結成村八分の活動は80年までもたず、再び自然消滅に近い状態で解散となる（チャー坊の体調も良くなかったらしい）。

そして1980年夏、山口冨士夫は"ななしのごんべぇ"時代から付き合いのあった水谷孝率いる裸のラリーズに参加する。60年代後半から活動し、ダークにしてサイケデリックな独自過ぎるロックで既に伝説的な存在となっていた裸のラリーズへの冨士夫の参加は、多くのロック・ファンを驚かせた（残念ながらこの時期の演奏も、ブートでしか聴けない）。

渋谷屋根裏を中心にライヴ活動を行なっていた裸のラリーズだったが、冨士夫は翌81年春には脱退している。例えばリチャード・ヘル在籍時のTHE HEARTBREAKERSみたいなもので、土台長いこと両雄が並び立つことの可能な編成ではなかっただろう…という気はする。

活動の活発化、そしてTEARDROPSへ

その後活動停止状態だった山口冨士夫だが、1982年11月20日、法政大学でのTHE FOOLS（SPEEDを経た青木眞一がギターを弾いていた）のステージに、いきなり飛び入り出演。コレがきっかけとなったか、冨士夫の活動はようやく活発化する。83年5月にはテレグラフからソロEP『RIDE ON!』をリリース。『ひまつぶし』以来、実に9年ぶり（！）となる音源のリリースだった。同年には浅田哲、加藤義明と“MARINE BAND”名義でのライヴも行なっている。そして翌84年には、エレックの倒産に伴い長い間廃盤だった村八分の『ライブ』が再発される。

山口冨士夫をTHE FOOLSのステージに引っ張り出した青木眞一は、1983年6月にFOOLSを脱退。『RIDE ON!』録音時のメンバーで“山口冨士夫グループ”としてライヴ活動を行なっていたバンドは、その後タンブリングスとなる。パーソネルは冨士夫（ヴォーカル、ギター）、青木眞一（ギター）、青木正行（ベース：元・外道）、小林秀弥（ドラム：元TOO MUCH）の4人。ちょっとしたスーパーグループ的なメンツだった（余談だが、青木正行は今何処で何を…）。

一方、山口冨士夫はタンブリングスとしての活動の傍らで、1986年9月にはアコースティックなソロ作『PRIVATE CASSETTE』をタイトル通りカセット・テープでリリースしている（後にCD化）。『ひまつぶし』でのスロー系ナンバーで聴けるような透徹した率直さと、サイケデリックな感覚に貫かれた作品（一部ジョニー・サンダースの『HURT ME』にも通じるものがあると思う）。

更に山口冨士夫は1986年、SHEENA & THE ROKKETSのアルバム『ギャザード』の録音に参加し、ツアーにも同行した（この時のライヴ音源は翌87年にアルバム『CAPTAIN GUITAR AND BABY ROCK』としてリリースされている）。同じ86年には鮎川誠（ギター：SHEENA & THE ROKKETS）、チコヒゲ（ドラム：元FRICTION。『PRIVATE CASSETTE』にも参加。70年代にはカントや青木眞一と活動していたことも）らとのライヴを行なっている。

そしてTHE FOOLSが1986年末に活動停止すると、翌87年、山口冨士夫は青木眞

一と、FOOLSのリズム・セクションだった中嶋一徳（ベース）、佐瀬浩平（ドラム）を迎え入れて、新バンド・TEARDROPSを結成する。個人的には、ちょっとセンチな感じのするバンド名が、また冨士夫らしい、という気もする。

1987年12月にシングル「いきなりサンシャイン」でデビューしたTEARDROPSは、翌88年5月にアルバム『TEARDROPS』をリリースする。元・村八分のメンバー二人をフィーチュアしつつ、『ひまつぶし』以来のルーズで明るめなR&Rは（村八分以来持っていた）ファンキーさも増し、キャッチーともいうべきとっつきやすい音楽性になっていた。当時付き合い出した忌野清志郎（『TEARDROPS』にも参加している）の影響があったとも言われるが、個人的には、バブル経済真っ只中という時代の雰囲気も影響したのではないかと思う。ルイズルイス加部こと加部正義は「冨士夫はティアドロップスになって変わったんだ。あのバンドはしっかりしていた。それまではクスリが効いている音楽だった」と語っている。

70年代まではザ・ダイナマイツ、村八分、ソロで各1枚ずつしかアルバムが出ていなかった山口冨士夫だったが、この頃から伝説のヴェールをはぎ取るように、リアルタイムや再発などでのリリースも盛んになる。1987年4月にはタンブリングス〜TEARDROPS移行期の音源を編集したアルバム『LIKE A ROLLING STONE』（山口冨士夫ソロ名義）もリリースされていたし、88年には村八分の『ライブ』も初めてCD化されている。更に88年12月にはTEARDROPSのシングル「気をつけろ」もリリース。

TEARDROPSでの活動の傍ら、1988年にはRCサクセションの“問題作”『COVERS』に参加したり、ボ・ガンボスのステージに登場したりと、この頃の山口冨士夫はアクティヴな動きを見せていた。そして89年5月、TEARDROPSは東芝EMIとの契約を得て、アルバム『らくガキ』でメジャー・デビューする（シングル「瞬間移動できたら」もリリース）。

1989年9月には忌野清志郎と、ジャマイカのレゲエ・シーンを代表するリズム・セクション、SLY & ROBBIEをフィーチュアしたシングル「谷間のうた－素敵な泉－」をリリースする。このシングルは、清志郎の手になる歌詞が“非常にセクシャル”な内容だったため、FM東京（現・TOKYO FM）では放送禁止となり、それに怒った清志郎がタイマーズ（EL ZINE VOL.4で紹介）で“おまんこ野郎のFM東京”と歌う発端になったという…。

…個人的には、初めてリアルタイムで山口冨士夫の音楽を聴き始めたのが、この

TEARDROPS時代だった。文章でしか知らない村八分以来の、凶悪なイメージ…を頭の中で膨らませて接したのだが、予想外にポップでメジャー感溢れるR&Rで、正直言って拍子抜けした記憶がある。先に書いたとおり、時代の空気が影響した部分も大きかったと思うが、しかし改めてみれば、実のところ『ひまつぶし』以降、冨士夫自身のR&Rはいつでもソリッドながら本質的にキャッチーだった。

1990年4月、山口冨士夫は東芝EMIのロック系ミュージシャンの豪華なメンツが顔をそろえたアコースティック・カヴァー大会イヴェント"ロックの生まれた日"に、延原達治（ヴォーカル、ギター：THE　PRIVATES。その後も度々冨士夫とライヴを行なうことになる）とのユニット"ひまわり"として登場。イヴェントのタイトル曲となった「ロックの生まれた日」を披露している。この時の音源は翌91年7月にオムニバス・ライヴ・アルバム『ロックの生まれた日』としてリリースされた。そして90年5月にはTEARDROPSの3rdアルバム『MIXIN' LOVE』もリリースされている（シングル「いいユメみてね」もリリース）。

1990年9月、山口冨士夫は前年に新メンバーで活動再開していたTHE　FOOLSの10周年を祝うライヴにゲスト参加。同じ90年には冨士夫の自伝「So What 山口冨士夫」も刊行されている。そして同年5月にTEARDROPSのライヴに飛び入り出演していたチャー坊が、その後"村八分"名義での活動を再開する、という出来事もあった（チャー坊とミッキー以外は新たなメンバーだったが）。

GOING UNDERGROUND

村八分としての活動を再開したチャー坊（直接のきっかけは、THE ROLLING STONESの初来日だったという）を横目に、メジャー展開（『MIXIN' LOVE』は海外録音だった）や若手とのコラボレーションを満喫していたかに見えた山口冨士夫だったが、1991年2月のアルバム『LOOK AROUND』を最後に、まるでバブル崩壊と歩調を合わせるかのごとく、TEARDROPSは活動停止となる（その後99年2月にはライヴ盤『TEARDROPS LIVE』がリリースされている）。

翌1992年には山内テツ（ベース：元FREE～THE　FACES他）、チコヒゲ（ドラム）とのトリオ編成でステージに立ったりしつつ、ルイズルイス加部こと加部正義（ベース）、

大口ヒロシ（ドラム：元ザ・テンプターズ、PYG、ウォッカ・コリンズ他）、篠原信彦（キーボード：元ザ・ハプニングス・フォー他）というGS人脈（？）とのセッションが行われ、山口冨士夫のソロ名義でアルバム『ATMOSPHERE-Ⅰ』と『ATMOSPHERE-Ⅱ』としてリリースされた。『ひまつぶし』以降の陽性なR&Rを基調としつつ、『PRIVATE CASSETTE』に通じるサイケデリックな感覚も前面に出ている。ちなみに当時のライヴは99年になって『ATMOSPHERE LIVE』としてリリースされている。

その後1994年4月にチャー坊が死亡すると（オーヴァードーズだったという）、今度はそれと歩調を合わせるかのごとく、山口冨士夫の活動は鈍化するのだった。『ATMOSPHERE』2作が東芝EMIからリリースされたのを最後に、メジャー・レーベルからの冨士夫のリリースはない（というか、スタジオ録音のオリジナル・アルバム自体出ていない）。

1996年に『草臥れて』が“チャー坊追悼盤”として再発されると、翌97年に冨士夫は尾塩雅一（ギター：元ルージュ他。現・オスバンド）らと新たにカウンター・カルチャー・バンドを結成して活動再開。ライヴは散発的なものだったらしいが。一方で、長らく音楽から離れていたヨッチャンこと加藤義明は、この頃にソロ活動を活発化させている（ヨッチャンは現在も活動中。ちなみにエーイチこと見掛栄一も“見掛英治”と名乗ってジャズ・ベーシストとして活動している）。

ちなみに山口冨士夫は、カウンター・カルチャー・バンドについて、「あれくらい面白いイカシたバンドは、殆どやった事がなかったなあ」と述べている（本人のブログより）。残念ながら当時の音源は残っていない模様。

21世紀

…20世紀も末となった2000年10月、1972年11月23日の慶応大学三田祭前夜祭での村八分のライヴ音源『LIVE'72－三田祭－』が、浅田哲のプロデュースでCD化される（浅田はリリース前の00年8月17日に癌のため亡くなっている）。そこにはスーパーヴァイザーとして山口冨士夫の名前もクレジットされていた。そして21世紀に入り、2001年には村八分の『ライブ』が加藤義明の監修でリマスターCDとしてリリースされる。

村八分の音源発掘と再評価の機運は続いた。その後2003年1月には村八分

『UNDERGROUND TAPES』3作がリリースされ、05年には山口冨士夫が村八分時代を回顧した「村八分」が刊行、05年11月には冨士夫が監修した『村八分BOX』もリリースされている。『村八分BOX』は『ライブ』や『草臥れて』などの既発音源や未発表音源などによるCD8枚とDVDによる9枚組で、総じて音質は良くないものの、1971〜73年の様々なラインナップによるライヴやスタジオ録音をまとめて聴くことが出来る。DVDで観られる動く村八分が…アホみたいにカッコいい。

そうした流れを受けてか、山口冨士夫の活動は2002年頃から再び活発化する。00年代前半は固定したバンドを持たず（維持出来ず？）、ソロを始め、チコヒゲや延原達治やチナ・キャッツ他とのセッション的なライヴを行なっていたらしい冨士夫だったが、村八分時代からドラッグ絡みで何度も逮捕されていただけあって（？）、2007年後半には体調が悪化（糖尿病と、その合併症だったという）。07年9月30日のライヴ後に入院した冨士夫は、活動を停止する。

その後、なんとか体調が回復し、山口冨士夫は2008年11月にライヴ活動を再開。一方でこの頃、1998年のザ・ダイナマイツのライヴ音源を皮切りに、三田祭のライヴや『村八分BOX』など、冨士夫関連の発掘音源をリリースし続けてきたレーベル、グッド・ラヴィン…との関係は切れてしまったが、08年3月には新たに自身のレーベル、Fjo Recordsを発足させ、『ATMOSPHERE』録音時の未発表テイク集『OVER THERE』と、TEARDROPS時代の未発表テイク集『みどりの中へ』もリリースされた（TEARDROPS活動停止以来連絡が途絶えていた青木眞一との"復縁"も話題となった）。また、この頃冨士夫は、THE BEGGARSのEP「いきなりサンシャイン」（タイトル曲はもちろんTEARDROPSのカヴァー）をプロデュースし、ギターでゲスト参加も果たしている（TEARDROPSの『LOOK AROUND』以来となるスタジオ録音だったという）。

更に2010年3月には村八分久々の発掘ライヴ音源『ぶっつぶせ！－1971北区公会堂LIVE－』が登場。青木眞一とユカリがリズム・セクションだった時期のレアなライヴ音源で、山口冨士夫自身が「今までので、村八分の中でイチバン良い」と語っている（本人のブログより）。そして11年には横山レイ（ベース）、チコヒゲ（ドラム）との05年の演奏を収録したアルバム『FUJIO & CHIKOHIGE & REI』もリリースされている。冨士

夫の音源は常に渇望されていたし、08年以降も体調と相談しながらの散発的な活動ではありつつ、ステージで健在をアピールしていた冨士夫だった。

2011年にはFjo Recordsが活動停止となるが、この年の山口冨士夫はかなりのライヴを行なっていて、11年9月の吉祥寺ROCK JOINT GBでは外道とも共演している。当時のバンドは基本的に安藤直美（THE TRASH）がドラマーで、ベースは元TEAR DROPSの中島一徳か元ザ・ダイナマイツ（！）の吉田博が務めていたという。12年以降は再び体調が悪化していた様子だが、時々はライヴを行ない、活動に対しての意欲自体は盛んだったらしい。

終章

1994年以降、チャー坊、浅田哲、どんと（ボ・ガンボス）、大木啓造、大口ヒロシ、忌野清志郎…と、山口冨士夫周辺の人々が次々と世を去った。そして…。

…この後の話は報道もされたので、御存知の読者様も多いだろう。2013年7月14日の夜、福生市内のライヴ・ハウスに向かっていた山口冨士夫は、福生駅前のタクシー乗り場で外国人の男（在日米軍の軍人の息子だという）が日本人の男を殴っている現場に出くわし、止めに入ったが、外国人に突き飛ばされて後頭部を強打。

外傷性硬膜下血腫のため都内の病院に入院していた山口冨士夫だったが、意識が戻らないまま、容態が急激に悪化し、誕生日4日後の8月14日に死去。享年64歳。

山口冨士夫本人のブログ（http://blog.fujio-yamaguchi.com/）…最後となった2013年2月4日のエントリーには、「年取るのも悪くないぜ」とある。体調不良に苦しみながらも、“Live Fast, Die Young”ではない60代のロッカー…という立場を楽しみ、R&Rへの情熱を持ち続けていた冨士夫だったが。

山口冨士夫というと、退廃的なジャンキー…というイメージが支配的な気もするが、生前の彼を知る人たちに聞いた限りでは、とても気さくで、そしてまっすぐな人物だったという。RCサクセションの『COVERS』参加以降は反原発の立場を明確に打ち出し、東日本大震災以降は自身のブログでも度々言及、実際反原発デモにも参加している。

誰もが想像した（？）ドラッグ絡みの死ではなく、正義感/義侠心が仇になって、見ず知らずの外国人に突き飛ばされて、頭を打って死ぬ…という最期は、ある意味非常に山口冨士夫らしかった、と言えなくもない、と思う（俺自身は会ったこともライヴを観たこともないのだけど）。

…村八分/山口冨士夫の影響を最も早い時期に実践して見せたのは、一時期界隈で話題になった"静岡ロックンロール組合"のアルバム『永久保存盤』（1973年）だったのではないかと思う。70年代後半には"東京ニューウェーヴ"の一画で活動していた自殺（中島一徳と佐瀬浩平が参加していた）が冨士夫の「ひとつ」をカヴァーしていた。言うまでもなくルースターズあたりへの影響も大きかったろう。俺が故郷の北海道にいた80年代、札幌のライヴ・ハウスでは複数のパンク・バンドが村八分の「あッ!!」や「のびてぶぎー」をカヴァーしていたし、90年代に入って都内のライヴ・ハウスに通うようになってからも、『草臥れて』以降の発掘音源を聴いたと思われる若いバンドが「あやつり人形」などをカヴァーしているのを、何度も観た（聴いた）。

村八分のメンバーだった青木眞一がパンクの時代にSPEEDで活動していたり、山口冨士夫自身も一時期チコヒゲらと活動していたりと…人脈的にも日本のパンクにつながっている村八分/山口冨士夫だが。何よりも、70年代前半の日本に、村八分のようなソリッドにしてパンクなR&Rを演奏するバンドが存在していた、という事実が恐ろしい。しかし、伝説の村八分以降にも、冨士夫には長い活動が、そして長い人生があった。

山口冨士夫…改めて、冥福を祈りたいと思います。

主要参考文献：
山口冨士夫「So What 山口冨士夫」「村八分」
『村八分BOX』ライナーノーツ
「レコードコレクターズ」2001年2月号
「QUICK JAPAN」Vol.8、Vol.9、Vol.10、Vol.19、Vol.20
「DOLL」2006年5月号
ONTOMO MOOK「ラヴ・ジェネレーション 1966〜1979」
ルイズルイス加部「気ままに生きる」

MALLORCA PUNK

スペイン・マヨルカ島のパンク

親愛なる読者諸氏におかれましては、スペインの"マヨルカ"という島をご存知でしょうか?

地中海に浮かぶ人口86万人ほどの島で、1950年以降は観光地として人気を博し(中でもドイツ人に大人気のようです)、今では年間に600万人以上もの観光客が訪れる一大リゾート・アイランド…がマヨルカなわけですが、サンサンと太陽の光が降りそそぐこの美しい島にも、やっぱりパンクは根づいているのです。

EL ZINE vol.5でインタヴューさせてもらったロックンロール・パンク・バンドMOSTROSもマヨルカのバンドですし、PDXの名物男ex DETESTATION等々のKellyも一時滞在し、当地のBAD TASTEのメンバーとHOLOCAUSTO POMADAなんてバンドを結成、LPを1枚残しています。



そうして今年、マヨルカで活動しているパンク/ハードコア・バンドを一堂に介したコンピレーション、その名も『Mallorca Punk vol.1』というLPが、当地を代表するレーベルMETADONA Recordsの新レーベル"1984"からリリースされています。

マヨルカではポピュラーなのか、MOSTROSのLPと同様にシルクスクリーンで刷られたジャケットで、25バンド・25曲が収録された本作。"東京"とか"スペイン"という括りだとあまりにも範囲が広すぎて焦点がボヤけてしまいますが、人口が東京の世田

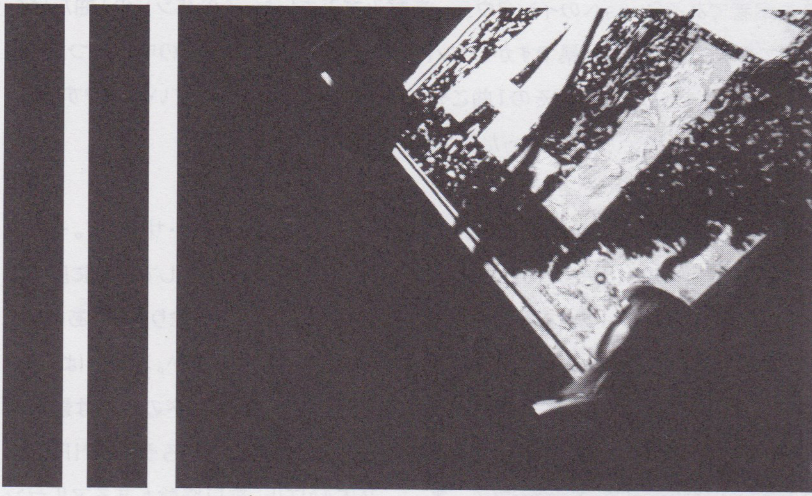
谷区と同程度だからこその、"まとまりの良さ"が感じられます。

というわけで、本コンピの作品・バンド紹介及びMETADONA Records～1984の主宰者であるOvasへのインタヴューを試みてみました。そのバンドの1曲だけを聴いて是非を書くのは乱暴ですが、バンドにとっては何十とある曲の中の一つだとしても、リスナーにしてみればその1曲こそがバンドそのものを表しているのです。だから偏見と独断でバッサバッサぶった斬ります!

本作の先陣を切るTRAUは、アクの強いヴォーカルのスラッシュ・サウンド。そのプレイ・タイムわずか30秒のため、"よーし、原稿を書くか"と針を落として椅子に座って一呼吸ついたら終わっている刹那のハードコア!…しかし、もう一捻りくらいあってもいいんじゃないでしょうか。次いでは、恐らく現行のマヨルカ・バンドの中では最も名が知られているであろうASPIRINA INFANTIL。来日経験もあるアルゼンチンのFUN PEOPLEのメンバーも在籍しており、80'sのUSハードコアを基本に捲し立てるスパニッシュ・ヴォーカル&キャッチーなコーラス・ワー



ク、やはり他のバンドと比べてもセンスが頭一つ抜きん出ています。リリースも複数ありますので、気になった方は是非チェックを。



NET WEIGHTはSEEIN'REDを彷彿とする激烈速射砲っぷりで、タイトに引き締まった音作り。本作では珍しい重厚なスカンジD-BeatサウンドのUSURAは、ウーン…、可もなく不可もなくといったところでしょうか。彼らはこれまでに7"を1枚リリースしています。80'sからの数少ない生き残り組・ベテランのESKORIAは2012年の録音で、UK82なアタック感とスパニッシュ・パンクの絶妙な融合でこれは格好良いです!METADONAからのディスコグラフィーもまだ入手可能なハズ。マヨルカ、というかスパニッシュ・フリークスは必聴です。

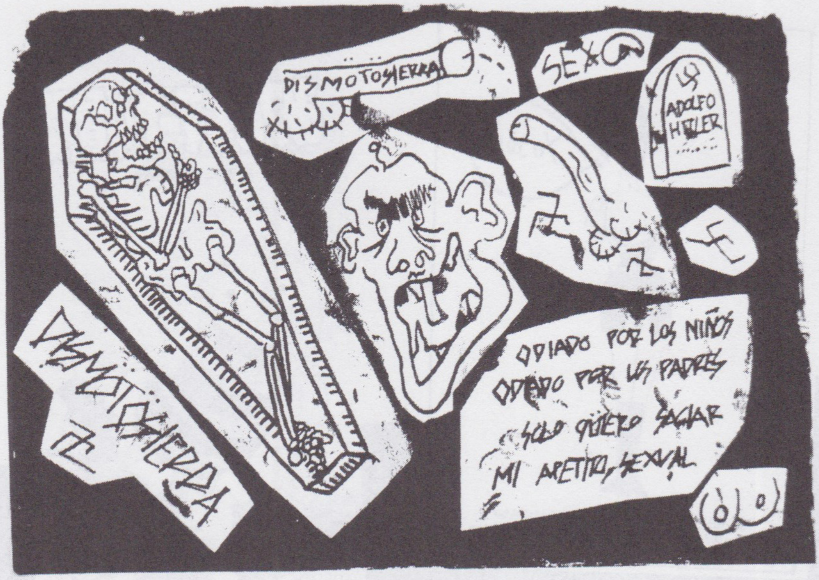


さて、弊誌前々号(vol.12)の「TOKYO RECORD SHOP LONG INTERVIEWS」のコーナーで高円寺BASEの飯嶋さんが掲げていた首チョンパLPを覚えていますでしょうか?そのLPのバンドこそ次いで登場のORDEN MUNDIALです。衝動剥き出しのロウ&プリミティヴなハードコアですが、本作の収録曲はリフレインを多用し過ぎていてちょっと退屈…。続

いてのCRASHはex BAD TASTE、MALLORKAOS、ERROR、MOTOR 49のメンバーによるバンドで、ゴツゴツ・ゴリゴリな初期NYハードコアで男汁を飛び散らかします。スラッシュでもクラストでもある意味スマートなバンドが多い中で、この手のスタイルは異色ではないでしょうか。これまでに1枚のLPを発表済み。

本作にはA3サイズのインナーもついていまして、1バンドにつき70mm x 100mm程度のスペースが用意されているのですが、そこで一際異臭を放つ、まるで根本敬のようなイラスト(ペニス&ペニス)を掲載しているのがDISMÖTÖSIERRA。案の定な怪電波DISロウ・パンクで、端的に表現するとアメリカのNU-KLE-ER BLAST SUN TAN(vol.11に掲載)を貧相且つ病的にした感じです。リズムをキープ"できていないにも程がある"ドラムも最高!"あ、ちょっと、もう疲れたから、ヤメよ?ヤメよ?"的な、唐突に曲を終えるところも最高!恐らく正式音源のリリースはまだですが、期待せざるを得ないバンドです。これぞマヨルカのゴミ(いい意味で)!

ムキムキ(CRASH)とヘロヘロ(DISMÖTÖSIERRA)に続くのは、MOTORHEADなドライビング・インスト・ハードコア・ナンバーのB.B.M.E.。正式名をBEASTY



BRUTAL MUSIC EXPLOSIONといい、ネット上でライヴの様子を見たところ、完全にインスト・バンドのようです。ちょっと面白い。"モーター"繋がりで、10バンド目のMOTORHASHYはレミーを崇拝していそうなヴォーカルによる、セックス・ドラッグ・ロックンロールなパンク。『Rock & Roll Curry』(ロックンロール・カレー)という何だか美味しそうなタイトルのアルバムを今年リリースしています。

LA ABEJA MAYAというバンドもDISMÖTÖSIERRAとタメはる意味不明なイラスト(胸部と下腹部を露出した女性のシュールな絵)で勝負に出ていますが(…出てはいない)、基本"ニョー!ニョー!"と叫んでいるだけでアッという間に終わるパンク・ロック。その不可解さに腹が立ったので、バンドの意図を探るべくGOOGLEに"LA ABEJA MAYA"と打ち込んでみたところ"みつばちマーヤの冒険"と出てきました(笑)。ドイツの作家による児童文学作品で、1975年に日本でテレビ・アニメ化&世界44カ国で放送されたようです。"うわ、懐かしい!"と思った読者さまは40代でしょうか。尚、"新みつばちマーヤの冒険"は82年から放送され、奇遇にも今年2013年からは"みつばちマーヤ(3D)"が放送されています(笑)。とりあえず"みつばちマーヤ"をスペイン語では"LA ABEJA MAYA"といいます。これだけは覚えておいて下さい。







最早LA ABEJA MAYAの後では何を聴いても空虚に感じてしまいますが、続くSKIPHOは"誰が子供たちのために祈っているのか?"と叫ぶ、凄く怒っている感じのクラスト・コア。ウン、まぁまぁです。もうこのまま無気力に書いていこうかと思いましたがLOS NIKELASで目が覚めました!ロウ・ファイな音作り&早口に捲し立てるKBDな77パンク・ロック!ウン、格好良い!女性ヴォーカルのDECRANEOはPHOGO、MALLORKAOS、SINDROME DE ESKOKOLMOのメンバーからなる典型的なスパニッシュ・ロウ・ハードコア・パンク・スタイルで、ウン、まぁまぁ!7"をMETADONAから1枚リリースしています。そしてA面ラストを飾るGUADANAは、キャッチーなハードコア。10回以上聴いてもこれ以上の言葉が出て来ない無個性さに脱帽!

というわけで、格好良いバンドとハッキリ言ってそうでもないバンドの明暗がクッキリと出たA面でしたが、それでも個性がバラバラ過ぎの逆・金太郎飴状態で面白いのです。

ではB面へ。初っ端はTRANCE。これがUmeåのバンドとも共振するタテノリのパンク・ロックで、例えるならばTRISTESSに近い。Umeåマニアックスの方で、"ピン!"





ときたならば、METADONAから予定されている1st LPを是非!ASPIRINA INFANTILのメンバーも在籍しているようで、やはりマヨルカの主軸はこのバンドに握られているようです。そして、アルゼンチンから移住してきたMacky姐さん率いるMOSTROS!インタヴュー時よりも野趣溢れるハード・ロック色が強くなっているのでGIRLSCHOOL(11月に来日しますね)なんかが好きな人もイケるのではないでしょうか。QUATERMASSは燻し銀の哀愁メロディック・ハードコアで、個人的には"BAD RELIGIONへのマヨルカからの回答"と評したいくらい、理知的なヴォーカル含めてツボでした。CICUTA PARA MIは本作唯一と言ってもいいガレージ・パンクのバンド。猛烈に芝居がかったヴォーカル(きっとリーゼントで唇を歪めて歌うに違いない)で好き嫌いが分かれるか。FAST IDIOTSはストレートに突っ走るロウ・パンク。女性のコーラスが光るが、ちょっと単調すぎる。

やや中弛みしてきたところでDESENTERRADAS。このバンドは実にイイです!女性5人組のゴス〜ホラー・パンクで、キーボード交えた奥行きを感じさせる音作りは、廃墟と化した教会で演奏しているかの雰囲気。恐らく単独作はまだでしょうが要注目で!D.M.C.は、正直ウーン…なショボショボ・パンク・ロック。悪い意味でラフすぎる。MOTOR 49も、正直ウーン…なショボショボ・メロディック・パンク。いや、"MOTOR"がつくからもっとカッ飛ばす音を期待していたので…。4 LATASはVICE SQUADの"Tomorrow's Soldiers"ヨロシクなピュア・ハードコアで今度こそカッ飛ばす!

さぁ、いよいよトリを飾るTILDA FLIPERSなのですが、これがスペーシーな電波系パンク・ロックでビックリ!反響する多重音声(ヴォーカル)で宇宙の果てへと誘われ

るサイケ・トリップ・サウンド。なぜ最後にこんなトリッキーなバンドを…とも思いましたが、クラストにD-Beat、スラッシュ、パンク・ロック、メロディック、ガレージ、ゴス等々といった闇鍋の如き今作を、ある意味でよく体現しているラストとも言えるのではないでしょうか。

広義のパンク/ハードコアをキーワードにした"島コンピ"。単独作のリリースもないバンドからベテランまでキャリアも様々。ジャンルレスなんて言葉も最早陳腐でしかありませんが、この島に渦巻く混沌と自由が生々しく感じられる作品です。何よりもインターネットでは到達不可能な、新たなバンドとの出会いが一番の醍醐味に感じられました。本作の私的トップ3を挙げるなら、DISMÖTÖSIERRA、TRANCE、そしてDESENTERRADASでしょうか。

では、次のページからは『Mallorca Punk vol.1』をリリースした張本人でマヨルカを代表するレーベル、METADONA Records(と1984)の主宰者であるOvasへのインタヴューとなります。引き続きご堪能下さいませ!




OvasとGato

Ovas from METADONA Records

インタヴュー

■初めて聴いたパンク/ハードコアというと、スペインのバンドでしたか?

「10代の頃、今から大体20年前くらいのことかな。僕はいつも友人のCarlosと一緒にいて、ストリートで煙草吸ったりビール飲んだり、はたまた落書きしたり、公共物を壊してまわったりしていたんだ。ある日、彼の兄貴が部屋を留守にしていたことがあったんで、ちょっとお邪魔してみたんだよね。そしたらその部屋はカセット・テープとレコードで溢れていた。ジャケットのアートワークが何だか格好良かったから、早速かけてみた。そしたらクソ、その歌詞に一発で共鳴しちゃったんだ。スペインのファシスト政権についてだったり、警察への憎しみ、トラブルメーカーに関する内容でさ。音楽性なんて関係なかった、とにかくその歌詞が最高だったんだ…。そのときのレコードがESKORBUTO、RIP、KORTATU、LA POLLA RECORDSだったのさ…」

■いつ、どのようにしてMETADONA Recordsを始めたのですか?1984というのはあなたの新しいレーベル?

「1999年頃にAC Recordsというレーベルを Carlosの兄貴と作ったんだ。本当、やっ

てみただけって程度のレーベルで、MALLORKAOSのLP、DISEASEのLP、あとPHOGOのCDを共同リリースしたくらいだね…。全然うまく機能していなかった。レコードも満足に流通させられなくて、主に友達のバンドに配ってまわっていたよ。当時のマヨルカには新品・中古のパンクのレコードを買える店が、ほんの少しだけだけどあったんだ。Runawayって店で、金融恐慌の煽りを受けてもう閉店してしまったけど。僕はeBayみたいな、オンラインでレコードを買うっていうのが大嫌いでね、一番金を持っている奴だけがレコードを手に入れられるみたいでさ。多分、それが原因で僕は地元のギグでパンクのレコードを買ったり売ったりするようになったんだ。そうしてMETADONAは始まったんだよ。最初にディストロとして、それからレーベルとしてね。1984は友達のFedeと一緒にやっている新レーベルなんだ。1984ってのはマヨルカのパンク・ラジオの名前で、Fedeが5年前からやっている。この

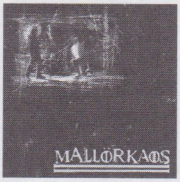


BAD TASTEクルー　1998年









レーベルに関しては、今後何が起こるか分からないけど、面白い目的やちょっとした計画はあるんだ」

■参考にしたレーベルはありましたか?

「僕の大好きなレーベルはLENGUA ARMADAなんだ。彼らの多様性と、殆どの作品にシルクスクリーン・プリントを使っているところがね。多分、METADONAがジャケットをいつもシルクスクリーンで刷るのは、彼らの影響かもね」

■バンドをリリースするとき、決め手になることは何ですか?レーベルとしての信念は?

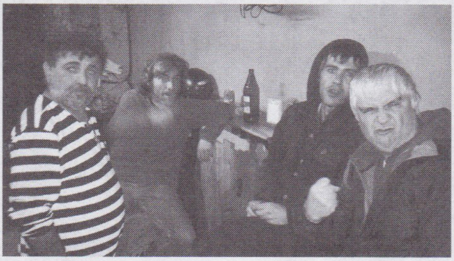
「僕がそのバンドに価値を見出し、そしてリリースしたいなと思わせるポイントは彼らが確立されたもの全てを憎むアナーキストであること。まず最初に本質がありきで、その次に音楽性さ。けど、もちろん僕がバンドの為すことが好きじゃないとダメだけどね」

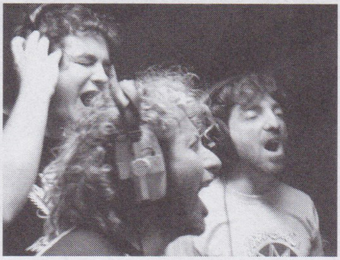
■METADONA Recordsは一人で運営しているのですか?他に仕事は?

「うん、空いている時間にレーベルとディストロの作業を一人でやっている。けど無償で協力してくれているGatoの助けなしでこれらをやるのは到底無理な話しなんだ。彼は僕にアドバイスをくれて、シルクスクリーン・プリントを手伝い、僕がリリースする作品の



ORDEN MUNDIAL


昔バンドをやっていた面々


MOSTROSの面々

デザインをやってくれている。仕事とレーベルは全くの無関係だよ。個人的な充足感のためだけにやってて、利益のためじゃない。METADONAで得たものは全て、無名のバンドのリリースやギグを企画することとかに使っているんだ」

■『Mallorca Punk vol.1』コンピは素晴らしい作品だと思います。バンドはどうやって選んだのですか?続編は予定していますか?

「糞ナチ野郎の襲撃から自分の身を守っただけなのに、莫大な額の罰金の支払いを命じられた友人のために、このコンピは作られたんだ。Fedeがパンク・コンピを作って罰金の支払いの足しにしようと考えてね。だからこのレコードの利益の全ては、罰金の支払いにあてられる。

参加しているバンドは全て、パンクやDIYと関わりのあるバンドさ。ファストなサウンドのバンドもいれば、格好良い・悪いもあるけど、結局のところみんなパンクスなんだよ。このレコードは1984の第一弾で"マヨルカ・パンク"への門戸を開いたものなんだ。もし第二弾があるとしたらそれはマヨルカではなくて、どこか別の都市のものになるだろうね…」

■『Mallorca Punk vol.1』のジャケットのイラストが少し『Great Punk Hits』に似ているなと思ったのですが(共通点は鋲ジャンとスパイキー・ヘアだけですが…)、ちょっとは意識しましたか?

「このイラストはBernat(ORDEN MUNDIAL、MAQUINA MUERTA)が何の意図もなく描いたものだよ。何かのレコードに使っていいよって、彼が僕らにこのイラストをくれたんだ。Fedeはこのイラストを見て僕にこう言ったよ。"なぁ、スゲー良いイラストだよな。このパンクスは『Insurrecto』(マヨルカ初のパンク・ファンジン)のパッチをつけて



TESTICULOS DE JEHOVA

いるしさ"。レイアウトをして改めて見てみたとき、僕らも『Great Punk Hits』を連想したよ。同じくコンピだし、面白い一致だよね」

■80年代のマヨルカのバンドというと、僕はESKORIAくらいしか知りません。当時はESKORIA以外にも、もっと多くのバンドがいたのですか?80年代のシーンはどんなものだったのでしょう?

「当時、ESKORIAはマヨルカのパンクスにすら知られていないようなバンドだったんだ。彼らは小さな村に住む無名で、不運なバンドだったのさ。パルマ・デ・マヨルカなんて都市にはいくつかバンドがいたよ、CEREBROS EXPRIMIDOSとかね。彼らが一番有名かな。ここのパンクスみんなにとっての出発点みたいなバンドさ。
他にもMOVIDAS CHUNGASやRUINA SOCIAL、TESTICULOS DE JEHOVAといった、何一つ音源は残してはいないけど、素晴らしいバンドもいた。ただ、80年代のマヨルカのパンク・シーンとなると、かなり難しい質問だね。ここはドラッグまみれの小さな島で情報も不足しているし、バスクでもなきゃバルセロナでもないからね」

■では、今のマヨルカを代表するバンドは?

「マヨルカのパンクは三世代からなっていてね。第一世代がESKORIAにCEREBROS EXPRIMIDOS…。第二世代がBAD TASTE、DISEASE、MALLORKAOS、ULTIMO PRESO…。そして最近のバンドによる第三世代がTRANCE、ASPIRINA INFANTIL、ORDEN MUNDIAL、TRAU、USURA、CRASHだね…」

■マヨルカ・パンクの魅力はどんなところですか?

「そうだな、パンクスがそれほどいるわけじゃないから、僕らは互いに密接なんだ。地元のギグでは、パンク・ロックもパンクもハードコアもクラストもスラッシュも一緒にやるし、音楽ジャンルは二の次さ」

■マヨルカという島はとても美しく、快適そうに僕の目には映ります。実際のところマヨルカでの生活はどんなものですか?

「ここは美しい小さな島だけど、ろくにやることもないところさ。マヌケになるか、パンクスになるかのどちらかだね。政府は僕らが築きあげたものを壊すことに躍起になっているのさ。海岸から10フィートの場所に家を建てている金持ちのドイツ人の奴らにもムカついてしょうがない。そんな洒落たところに住むなんて、もし望んだところで僕らには到底

不可能だからね」

■活動の原動力になっているものとは?

「僕らのやることに対して、金持ちやファシスト、政府が腹を立てている。そのことを知っているからさ」

■4回も日本に来たことがあるんですよね。好きな日本のバンドや、来日した際の感想を聞かせて下さい。

「僕は日本のパンク・シーンやレコード・ショップ、ギグ、パンクスが大好きなんだ…。沢山あり過ぎて、お気に入りの日本のバンドを挙げるのは難しいな…。THE COMESにCROW、ZOUO、SOB、GLOOMだろ…。それに今のバンドならSYSTEM FUCKER、FOLKEIIS、UNARM。けど常に魅了されているのはDISCLOSEだね。ヨーロッパで日本のバンドについて知るのは難しい。特にスペインではね。日本盤なんて普通、ここではまず手に入らないよ」

■今後のリリース予定や目標を教えて下さい。

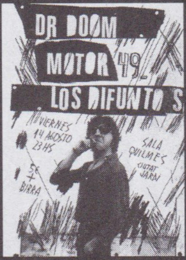
「ちょうど今、TRANCE(マヨルカ)のLPとMASTURBATORS(ペルー)のEPを作っているところだよ。それとSOBERANIA PERSONAL(1988年/アルゼンチン)のLPとかにも取り掛かっている。僕の目標はこれらのレコードをリリースすること、そして彼らの憎しみとその歌詞を世界に広めることかな。そしてレコード・プレイヤーでそれを聴きながら、友達と飲んだくれるのさ」

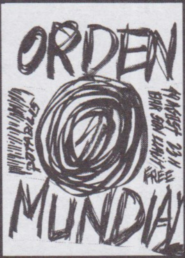
■インタヴューさせてくれてありがとうございました。最後に読者にメッセージを頂けますか?

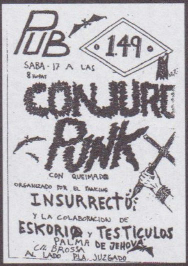
「遠く離れた国のファンジンが、僕のレーベルに興味を持ってくれたなんて光栄だよ。これを読んでいる日本のパンクスのみんなへ。君たちの素晴らしいシーンを、君たちは誇ることができる。全てを自分たちで成し遂げたんだからさ。もし君が憎しみに駆られたらマイクをつかんで叫ぶんだ。もしレコードを出したいと思ったらやっちまえ。バー混沌で会おう!」

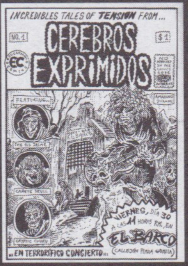
















フライヤー・コレクション

PUNK/HARDCORE IN MIDDLE EAST

『UNDERGROUND ASIA』というコンピレーションCDがリリースされています。タイトルそのままに、アジアのバンドを集めた作品なのですが、その"アジア"の範囲が未だかつてないほどに広い。

参加国は日本(VIVISICK)、中国(SMZB)、韓国(CAPTAIN BOOTBOIS)、台湾(B.B. BOMB)、香港(BRIDGED)…までなら、何ら驚きはないでしょう。

その他にも、タイ(LOW FAT)、シンガポール(THE SCUDS)、イスラエル(MONDO GECKO)、ロシア(DISTRESS)、マレーシア(CARBURETOR DUNG)、ブルネイ(SENTENCED TO BURN)、トルコ(TAMPON)、インドネシア(STRAIGHT ANSWER)、ネパール(RAI KO RIS)、フィリピン(ISTUKAS OVER DISNEYLAND)…までなら、世間的にどうかは分からないですが、幣誌読者なら驚きはないでしょう。東南アジアもロシアもイスラエルも、数多のパンク/ハードコア・バンドがいることはとっくに知られています(多分)。

さて、問題はここからです。

バーレーン(THROUGH SUNKEN EYES)、アゼルバイジャン(OVERKILL FOR PROFIT)、エジプト(FAKING IT)、レバノン(DETOX)、サウジアラビア(CREATIVE WASTE)、アラブ首長国連邦(PUBLIC REFUSE)…中東です。どうなんだろう…?僕が知らないだけで、密かに中東パンク・ブームとかあるのでしょうか?ライヴ・ハウスでは、「最近はアゼルバイジャンのバンドばっか聴いてるかな」「いや、今はレバノンが熱いわ!」なんて会話がなされているのだろうか…。

にわかにパンク/ハードコアin中東への興味が湧いてきたのですが、もちろんそれは物珍しさからだけではありません。どうしてもキワモノ的なイメージがあったので

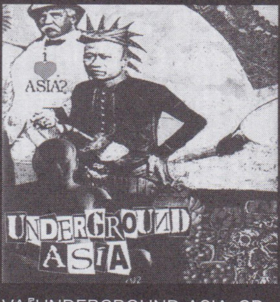
中東のパンク / ハードコア事情

すが、実際に聴いてみると完成度がやたらに高いバンドも中にはいまして、僕が一発で気に入ったのがサウジアラビアのCREATIVE WASTE。

NASUMバリのグラインド・コアで、調べてみると2012年4月に自主で1stアルバム『Slaves To Conformity』をリリースし、チェコの一大グラインド〜ハードコア・イヴェントObscene ExtremeやアメリカのMaryland Death Festにも出演と、海外へのツアーも精力的に敢行しているようなのです。アルバム発売時に行われたインタヴューが、ネパールのメタル情報サイト"DON'T SHUT UP"に掲載されていたので、主宰者のZivon Gurung(TOTAL DEATHというファンジンも発行している)の許可を得て転載させてもらいました。

また期せずして、米国MRR誌の362号(2013年7月号)には、"アラブ首長国連邦シーン・レポート"(?!)なんて記事が掲載されていたので、こちらも筆者のReymond Bravoの許可を得て転載させてもらいました。

サウジアラビアのグラインド・コア・バンドへのインタヴューと、アラブ首長国連邦のシーン・レポートをもちまして、知られざる中東のパンク/ハードコア事情を垣間見てみたいなっと思います!



VA『UNDERGROUND ASIA』CD



左がサウジアラビア・右がアラブ首長国連邦(UAE)



NERVECELL(※アラブ首長国連邦を拠点とするデス・メタル・バンド)が大ヒットを飛ばしたように、中東のバンドを過小評価するのは全くもって賢明ではない。メンバーは言いなりになる奴らでもないし、商業的にもうまくいっている。そして、サウジアラビアの砂漠から現われたグラインド・コア・バンドがCREATIVE WASTEだ。衝撃的なフル・アルバム『Slave To Conformity』を2012年4月にリリースした彼らの、フロントマンでありベーシストのFawazに話しを聞く。

INTERVIEWED:Zivon Gurung

■ネパールから愛を込めて!調子はどう?

「バッチリさ!」

■世界の多くの人たちがCREATIVE　WASTEについて知りたがっている。君たちを知らない人たちにこのバンドを紹介してよ。

「僕らはCREATIVE WASTE。サウジアラビアのグラインド・コア・バンドだ。Fawaz Al Shawafがベース・ヴォーカル。Essam Al Ghamdiがギターで、Talal Al Shawafがドラムだよ」

■1stフル・アルバムの『Slave To Conformity』をリリースしたよね。何度も聴きまくったし、素晴らしいアルバムだよ。今のところ反応はどうかな?

「本当、凄くいいよ!良い評判をもらえて安心したし、頑張ったかいがあったね。最終的に行き着いたサウンドまで、すごく時間もかかったし」

■アルバムは自主でのリリースだよね。レコード・レーベル抜きでリリース作品をプロモートするのは大変だった?そうでもなかった?もちろん、僕らは世界中の何百万人へと届けることのできる、インターネットという便利なやつを有してはいるけどね。

「明らかな二律背反だね。しかし、実際にリリースすることは容易くなってきている。何をするにしてもイージーになっているから、一方を追求すれば他方を犠牲にせざるを得ないのは明らかだ。実際のところ、作品をリリースするのは簡単だよね。やるのはイージーだけど、バンドがたくさんいる分、注目を集めるのは難しい。

ショーを開いて演奏するっていうシーンそのものが全くないから、僕らの存在に気がついてもらうことすら難しいんだ。ここ以外の、どこのバンドと比べても難しいと思うよ。みんなには口頭で広めてもらう他にないからね…。ショーでプレイする唯一の方法は外国へ出ること。そして旅行にしろツアーをするにしろ、どこへ行くのも僕らにとっては簡単なことではないんだ。大金がかかるし、そんな金を僕らは持っていないから!経費に時間、資産、そんなことを考慮したうえで、僕らは自分たちができることをできる限りやろうとしている。だから全ては本当に経済状況にかかっているんだ。

それでも素晴らしいショーをやり、新しいバンドを見て、何らかの方法で関わることができた尊敬すべき人たちと出会う。そこから様々なことが学べるからさ」

■インターネットで違法ダウンロードすることは?遅かれ早かれ、全てのものが無料

でダウンロードされるよね。

「インターネットは今、僕らが"バンドとして"存在する、ほぼ全ての基になっている。インターネットがなかったら、エクストリーム・メタルを知ったかどうかも分からないし、グラインド・コアや僕らが主に影響を受けて引き込まれたバンドの洗礼を受けたかも分からない。インターネットなしじゃ、今のようなサウンドだったかも分からないな。

僕らはバンドにとって公平な分け前として、レコードをダウンロードしている。世界の中でも、特に僕らが暮らす国ではレコードを手に入れる方法はダウンロードの他にないんだ。まず無理さ!でも、それも2007年から2008年頃に変わり始めた。"Music Master"という地元のミュージック・ストアの棚にメタル・バンドの作品が並び始めたんだ。近隣国のバーレーン王国からお気に入りのレコードを手に入れることもできる。でもヨーロッパやアメリカにオーダーして取り寄せたら、時には定価の2倍もかかることがあるんだ。違法ダウンロードを規制するのはほぼ不可能だよ。音楽で生計をたてようと望んでいるバンドには、相当な痛手であるのはよく理解している。でもバンドの存続を脅かすことが、他のバンドの助けになっているってことも否定できないだろ。それは諸刃の刃だ。だから"本物"の熱心なファンだけが、バンドや彼らの好きな音楽スタイルをサポートするだろうさ」

■出会った全てのバンドにこの質問をしているんだけど、この怒れるフル・アルバムの背後にあるバンドの影響/インスピレーションは何かな?

「たくさんの要素を組み合わせているけど、主に僕らが最初にどのように感じたかを大切にしている。そして前向きな意識の中にもあるネガティヴな感情を吐き出して、作品に仕上げていくんだ。そのベストな方法を探し出そうとしているし、それが僕らの音楽だ。

音楽的な影響に関しては、メンバーそれぞれに異なった影響と好みがある。僕らは多種多様な音楽を聴いているからね。とはいえ、結局のところは、今の僕らのサウンドに影響を与えているバンドは以下に挙げるもので意見は一致しているんだけどさ。NASUM、REGURGITATE、NAPALM DEATH、CARCASS、PIG DESTROYERの初期、特に初期のCRYPTOPSY」

■1stデモ『Colonies』から最新のフル・アルバムまで、バンドはどんな成長を遂げて

いると思う?

「僕が思うには、僕らはあの当時よりもだいぶ成長していると思うんだ。2つの作品を交互にかけて聴いてみたら、パフォーマンス、ソング・ライティング、サウンド・プロダクションの点から言っても、全てにおいて大きな違いがあることに、すぐ気がつくだろうね。リスナーがそういう話しをしているのを見るのがとても嬉しいんだ」

■君らの作る曲には政治性と社会的な要素が含まれているよね。中東の政治的背景に直接的な影響を受けているのかな?これはちょっと主題からそれるけど、恐らくサウジアラビアやドバイは例外だとしても、国際的なメディアが描いているように政治状況は最悪なのかな?

「そうだな、僕らは中東で生活している。そして君たちがそのように受け止めていることは間違いではないと思う。しかしながら、事態をより緊迫させた出来事が最近あったよね(※"アラブの春"と呼ばれる、民主化を求めた一連の反政府運動のことだと思われる)。

様々なことが以前と比べれば、明らかになりはじめている。外国の人々の理解も深まってきているし、メディアは彼らの興味の対象やその国家のことを、彼らなりのやり方で伝えるべく、ベストを尽くしている。一連の出来事は感情的な面での助けとなった。現在進行中のこの反乱というのは、僕らのおかれた状況の大部分ではあるけど、中東に限った話しではないよね。ウォール街を占拠する運動だってあったし、他にもアジアやアフリカ、ありとあらゆる場所で困難と向かい合っている人たちがいるんだ。"まとも"な家族、人種、階級に生まれるという幸運に恵まれなかった人たちは、彼が誠実な人間であったとしても、クソみたいな日常を送らざるを得ない。病的にイカれてて、支配欲にかられた悪党が、この悲劇を引き起こすか、助長しているんだ。理由のあるなし、個人か集団かを問わずにね」

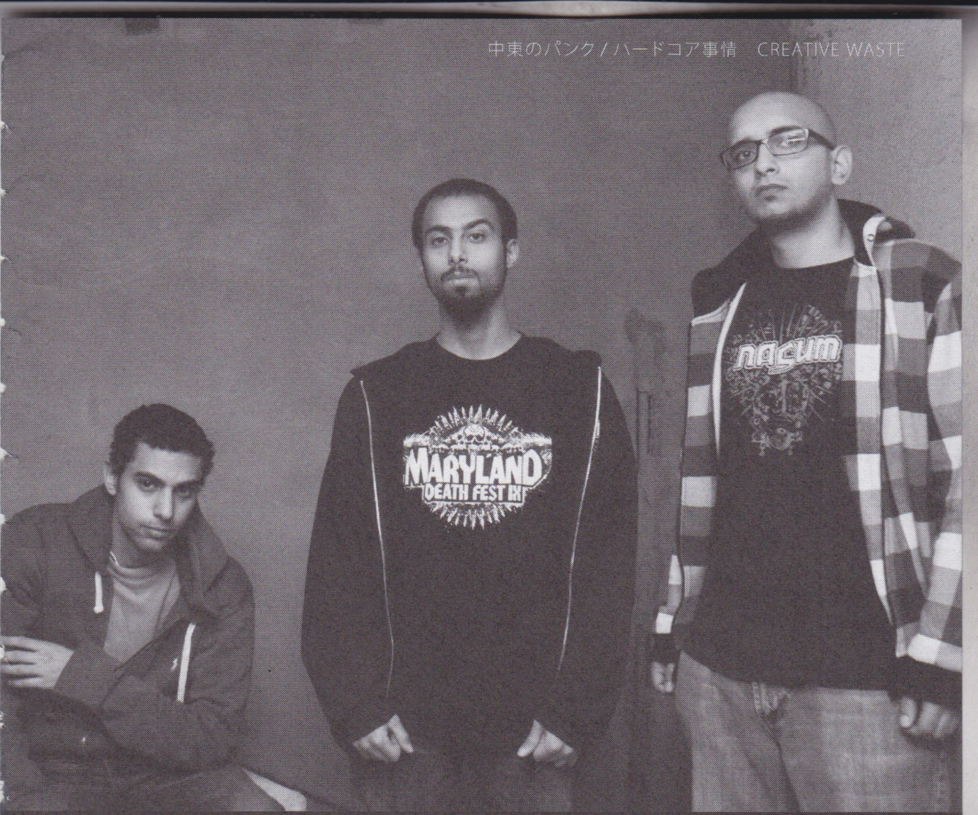
■オーケー。サウジアラビアの一般的なメタル・シーンはどんな感じかな?最近、イランのバンドと出会ったんだけど、イランでは完全にライヴは禁止されているみたいなんだ。サウジアラビアではどうかな?メディアや社会は、君たちのシーンについてどう捉えている?

「相当な数のメタル・ファンがいるよ。だけどバンドを始めようといった動きはないんだ。

バンドは、本当に全てを捧げないとできないことだから。バンドがライヴで演奏しない期間の平均は、そうだな、6ヵ月から1〜2年間くらいある。なぜなら様々な障壁、バンドとして考慮しなければならない不自由が山盛りだからね。ジャンルがロックだろうがメタルだろうがさ。多くのバンドは頭痛の種と圧力を取り除くことはできない。そして音楽が禁止されようがされまいが、僕が言えることは、この国が矛盾に充ちているってこと。君には何のことか理解できないだろうけどね。
いいかい、公的に何が合法で何が違法なのか、僕らは全然知ることができないんだ。例えば、ここでは女性が車を運転することは禁止されている。しかし…違法ではない。ちょっと考えみて。ほら、君は気がつくだろう。この話しを音楽に当てはめて考えてみてよ。いかなる楽しみもないことを確認させる宗教警察(※勧善懲悪委員会とも言う。警察とは別に、イスラムの教義に反する人間を処罰する)は言うまでもないけど、世間がどう認識するかも大きな役割を果たしている。多くの場合はどこかへ連れていかれて、ボコボコにされるだろうさ」

■ライヴをする状況に関してはどうなの?Maryland Death Fest含め、アメリカでもショーをやったよね。オーディエンスからの反応はどうだったのかな?

「ライヴは、ある意味では目立っていたと思うよ。僕らはレーダーの監視下にいるようなものさ。サウジアラビアに4〜6バンドしかいなかった2004年の後半から2005年は、順調だったよ。ヨーロッパからジッダ(※サウジアラビア西部のマッカ州にある都市)までいる僕らの友人が協力してくれたおかげで、状況は指数関数的に発展した。だけどそれも2008年後半までだったよ。女の子と出会ったり金儲けにはライヴがいい方法だと思ったんだろうね、どこからともなく新たなオーガナイザーが現われた。僕らは2006年にショーで一度だけお金をとったことがあったんだ。ちょうどショーが発展し始めた時でね。会場を押さえるために使った分を取り戻すためだったんだけど、その料金の8倍もの額を、奴らは安易に設定した。もう僕らには手に負えなくなったし、貪欲な奴ら(オーガナイザー)はそれまであった状況を地に落とした。言うまでもなく奴らはみんなの楽しみを台無しにして、2人のオーガナイザーは2008年後半のショーを最後に消えたよ。1人は追放されて、もう1人は8ヶ月だか12ヶ月、刑務所に入れられた。そして今、僕らは8年前の状況まで後退している。どうすりゃいいんだ?



アメリカとMaryland Death Festでのショーは、間違いなく最も素晴らしい経験だったよ。僕らが何をしているのか正確に理解している観衆を前にプレイしたことがそれまでになかったからね。素敵な人たちとこのツアー中に出会った、名前を挙げていくには多すぎるほどにね。だけどみんな本当にクールでナイスだった。近い将来、またあそこへツアーに出ることを本当に楽しみにしている」

■近々、ツアーやリリースの計画は？

「まだツアーはないね。ここでいくつかショーをやれたらと思っている。僕らには今、時間も資金もないからね。だけど5月11日にはアラブ首長国連邦の最高のバンド、HATE ETERNALとデス・メタル・バンドのPERVERSIONと一緒にプレイするよ。PERVERSIONの最新アルバム『Pillars Of The Enlightened』は凄いから絶対にチェックしたほうがいいよ！」

レポートに入る前に、アラブ首長国連邦(UAE)についての基礎情報を少しだけ。まず、石油と天然ガスの輸出でとってもお金持ち(最大の輸出先は日本)。ドバイの近未来的ビル群を、メディアを通じて目にしたことのある人も多いのではないでしょうか。国民は教育・医療が無料などといった手厚い保障を受けているため、一連の民主化運動もここでは殆ど起こらなかったようです。

…但し、UAEに暮らす人間のうち、"国民"に該当するアラブ人は20%以下。他は全て出稼ぎに来た外国人であり、失業者は強制送還するなど、国民に対する"ゆりかごから墓場まで"な対応とは真逆の厳しい管理体制がしかれています。そして本稿の筆者Reymond Bravoもフィリピンからの労働者であります。

各首長国によって程度の差こそあれ信仰の自由も、そして娯楽も認められているので、宗教警察が幅を利かせているサウジアラビアと比較すれば楽園のように思えますが、Reymondの目にはどのようにうつっているのか。"現地に暮らす外国人が見たUAE"ということを考慮の上で&分かりづらい比喩表現が無駄に連発されているマドロッコしい文章ですが、お楽しみ頂けると幸いです。

UAE scene report

アラブ首長国連邦シーン・レポート

TEXT:Reymond Bravo

さあ、始めようか…コーヒーをスプーン3杯、砂糖を1匙、特大サイズのM&M's。それから、クソったれタイプライター。いやいや、それは違うか。シーン・レポートを書こうとしているんだからな。今の俺は自分専用のノートパソコンを買う余裕だってある年齢だよ。パソコンは死にそこないゾンビ企業帝国の真っ黒な類いさ…。あー、もう俺の集中力は切れちまっている。どうでもいい話題、それもこんな中東のシーン・レポートなんかを取り上げて、君らの時間を無駄にしてしまっているんじゃないかな。…クソ、中東と言っちまうと、弾丸をかわし、タリバンの下着を使っているような、物騒な話しを思い浮

かべるかもしれない。そうじゃない、俺が暮らしているのはアラブ首長国連邦(UAE)で、厳密に言えば、太陽のふりそそぐドバイだ。ここではゾッとするような白人のクズが触れてはいけない王族のごとく扱われ、俺のようなアジア人は、民族のルーツから黒人のような扱いを受けている。

とにかくまずは、この国について話そう。若い国だよ…君らのおじいちゃん、おばあちゃんくらいかな。テレビで生のヒトラーを見ているとしたら、歳をとり過ぎているけど。若い国ではあるが、世界の70%にあたる第三世界の50倍は発展している。まるで神様がパイレート・ベイ(※スウェーデンの検索サイト)で"シムシティ"(※都市経営シミュレーション・ゲームのシリーズ)をダウンロードし、たった一夜でべらぼうな街を作ろうと決心しちまったようさ。クレイジーなくらいに巨大な構造のものをね。

丸い形をしたビル?作ったよ。キングコングに風邪をひかせるくらいに高いビル?それも作ったね。スワロフスキーでコーティングされた車?あぁ、それもだ。奴隷労働?やった。女性はレイプされるために刑務所に入る?それもだ。国の80%は外国籍の住民、残りは地元民と輸入したペットでなっている。隣国を支配している恐ろしいやつらに較べると、この国の支配者はイカしているんじゃないかな。ここじゃ、狂ったことをやっている人間も、通りで撃たれる光景を目にすることもない…そのために、Xbox(※マイクロソフトのテレビ・ゲーム機)が与えられているのさ。まぁ、エジプトやシリアのような国々と較べてみると、全く大したことがない。UAEにはセブンイレブンはないが、Zoomマーケットがある!今の時代、Zoomだぜ!スラーピー(※シャーベットのようなジュース。一部のセブンイレブンで扱っているらしい)はないが、それだけのことさ。若者にとっては危機か。不安と若者の反乱の根源なのかね。

ああ、クソッ、旅行ガイドブックの『ロンリープラネット』には良いことが書かれていない。ガイドブックから得る情報の代わりに、俺はシーン・レポートを書くぜ。たぶん現地の人間による旅行日記のような体裁になるんじゃないか。この地域を旅するパンクスにとっての情報にもなると思う。これでヤバイめに遭うこともないんじゃないかな。

初めて自分たちのやり方でシーン・レポートというものを書いたのはフィリピンについてだったよ。バンドや企画者に簡単なアンケートを送って、答えをベースにシーン・レポートを仕上げた。熱い情熱を共有し合うアンダーグラウンドで活動しているフィリピン共和国のような人たちなら、そういうやり方も通用する。ここは…ええと、ほとんどのバンドがラウドな音楽をやっているが、生き方というよりは趣味なんだ。少しはクールなバンドもいるし、過激なグループもいる。だから、このレポートで取り上げたせいで、UKかどこかの寄宿学校でこの記事が掲載されたジンを目にした狂った金持ちのガキが恐怖をおぼえ、そこから警察に目をつけられる、なんてことがないように俺はベストを尽くさないと。

仲間の一人が言うには、パンク・ロックに夢中なのはごく少数で、ほとんどはハイスクールを卒業したら国を出て行きたがっていると。チェッ、誰を責められる?彼らはUKやUSのような国を目指し、自分で生きていくのがどれだけ困難か知るんだ。UAEの中にいて、どれだけ守られていたのか実感する。しばらくしてまたここに戻ってくる。それからクラブ通いを始めるってわけだ!大抵のキッズはクラブにはまっている。メタルに夢中なキッズはいないな。NICKELBACKの"I Wanna Be A Rockstar"を個人的なマニフェストとしている。俺がやっているのは、文化には多種多様なものが存在するってことを彼ら自身で説明できるようになるチャンスを与えてるってことかな。自分の考えを口にして、トラブルにあうことも頻繁だ。でも俺は彼らが即答しないなら言わせてもらう。お前らの言うパンクはクソの一言で片づけられると。俺は彼らの家族の名誉を汚したとして"名誉の殺人"リストに名前を入れられちまうかも。…友達に迷惑がかからないようなやり方で記事を書く必要があるな。このシーン・レポートの目的は、これがきっかけになり国外の人たちと交流を持つようになること、そして自由な人間が生活していることをちょっとでも知ってもらえたらと願っている。

全ての尊敬すべき影響力のあるバンドの中でも一番の扇動者はGRAND HOTEL PARADOXだ。GRAND HOTEL PARADOXは男前な気のいい3人、Chris Ryan、Mike Priest、そしてStixによる制御不能な獰猛ファイター。ミニ国連ばりの反体制グ

ループを結成するのに十分なほど、様々な国々に住んでいたと話してくれた。彼らが言うにはJello Biafraよりも素敵な曲を書き、MISSION OF BURMAよりはライヴはひどい。FUGAZIと比較されることが多いな。それに関してはバンドも嬉しく思っている。ライヴを見て、俺はMINUTEMENを思い浮かべたよ。曲には彼らのセンスが溢れているが、表現しようとしている全般的なアイデアは"自分自身で考えろ"。これは文章で読むのは簡単だが行うのは難しい。俺たちはメディアや組織によってコントロールされたアイデアを、欲求を操作する力を持つ知覚に送り込まれちまう時代に突入している。

人は時たま自分自身に問いかける。自分の頭で考えているか?とね。このバンドは実行しているし、そういう曲を歌っている。だからゴキブリみてぇなバンドに高い金を払ったり、そんなバンド見たさに長い行列を作ったりしているなら、フェイスブックの"いいね!"ボタンなんて押すんじゃないぜ。GRAND HOTEL PARADOXはフルCDをリリースしている。実に素晴らしい作品で、完全なるDIYだ!見事にプロデュースされているのは、Vo/GrのChrisがサウンド・エンジニアリングの勉強をしているから。バンドのサウンドと作品は彼らが運営するABBREVIATED　Recordsでチェックできる。制作中の12"フル・アルバムをどいつもこいつも(俺もだ!)待っているところだ。ChrisはABBREVIATED　Recordsでも良い仕事をしていて、今年の頭には中東のパンク・ベネフィット・コンピレーションを出しているよ。これはwww.abbreviatedrecords.comでダウンロードかボーナス・トラックを収録した限定盤CDを入手可能さ!地元のバンドをもっとリリースしようと目論んでいる。できればヴィニールでね!

彼とはabbreviatedrecords@gmail.comで連絡が取れる。GRAND HOTEL PARADOXと連絡を取りたかったら、grandhotelparadox@gmail.comかwww.grandhotelparadox.comまで。

Mike(Ba)とStix(Dr)の2人はDEAD　SHAKESという新しいバンドも始動しているぜ。Chrisは海外での勉強を終えたところだ。数十億のアイスクリームコーンのビジネスをチェックするために、まめにUAEを訪れているよ。まだDEAD SHAKESは見たことはないんだが作品は体験済みだ。君のことも、君の宇宙人の友人だってご機嫌な気分にしてくれるぜ。BMXも飛び上がるさ!

人間はこうあるべきだという完璧なもう一つの例を挙げるなら、FIGHTING SUPER HEROESというバンドだな。メンバーはフィリピン出身のArielとシリア出身のRonとBibars兄弟。本人たちはサウンドをパンクとハード・ロックの融合だと言っているが、まさにその通り。彼らの曲を聴いてXERXES(※ケンタッキー出身の叙情ハードコア・バンド)みたいだとブツクサ言うやつがいたら、軍隊という軍隊が巨大なひき肉器を抱えて、君を目がけて突進してくるだろうよ!ABBREVIATED Recordsから出たコンピレーションに収録の曲を聴いてみたが、余計なお世話だぜってくらいにスゲエし、いきなりクレーンから1トンのレンガが落ちてきたみたいなサウンドだよ。曲はヘヴィだし、恐るべきヴォーカル。俺はアナーコ・パンク・バンドのTERMINUS(UK)を思い出した。TERMINUSの「Bring Out Your Dead」は覚えている?FIGHTING SUPER HEROESはチェックするべきバンドだよ。レコードのリリースが待ち遠しい。ドバイのベスト・バンドの一つだ。つけ加えると、ドラマーは2、3のバンドをかけ持ちしている。Arielはドラマーとしてこの国で最も保護されるべき人物さ。ドラム嫌いの宇宙人に誘拐されちまったり、Kay Parker(※イギリスのニューエイジ作家・元ポルノ女優)に似た裸の火星人が住む惑星に送られちまったら、少なくともパンク・バンド3つが消滅しちゃうよ。

略奪を目論むモンスターを打ち破ったら、グラインドをぶちかますMATICRUSTがいるぜ！MATICRUSTは目下、UAEのアブダビを本拠地にしている。2011年に結成したフィリピン人のクラスト/パンク/グラインド・バンドで、DISRUPTやEXTREME NOISE TERROR、TERRORIZER、BRUTAL TRUTH、THE CASUALTIES、DISCHARGE、クラストやグラインドの範疇に入るバンドに影響を受けている。メンバーはUAEではまだまだ新参者だが、アンダーグラウンド10年の歴史に刻み込まれているバンドだよ。90年代の初期からフィリピンのルソン島やミンダナオ島で積極的に活動をしている面々なんだ。アブダビで開催されたクソみてぇな"Pinoy Music Organization"でメンバーとなるDonとDennisがPaulと出会ったことからバンドは始まった。DonがPaulのTシャツを目にとめ、近づいていくつか質問しているうちに、ピンときたらしいんだ!ルーツも似ているし、好みもアイデアも共通していることが判明したのさ。すぐ

にPaulとVincentの暮らすフラットで、ジャムったり酒を飲んだりするようになった。やがて他の同居人や上下階の住人の怒りを買っちまう。建物のまわりで、クラストやグラインドを爆音でぶっ放して聴いたりしてるんだからね…。そんなこんなでMATICRUSTは生まれたんだよ。なあ?Tシャツは役に立つよな!着てれば、MATICRUSTのメンバーのように建設的な結果を生む。このバンドのCDは何としてでも手に入れたい。戦艦をもズタズタに引き裂くサウンドだせ。まじでブルータルだ。

最後にドバイの3ピース・バンドのTHE　VICTIMSを紹介しよう。シャールジャに暮らすMaria、アブダビに暮らすKulot、そしてこの原稿の筆者であるドバイの俺!クソ、この3つの忌々しい首長国は離れ過ぎているから、毎週末になると長旅をしなくちゃならない!だから俺たちはその時間の殆どを移動に費やしているんだ。そして、ようやく会って2時間程やりたいようにプレイしたところで、再び家路への長い旅が始まっちまう。レコードをリリースする前に、まずは旅行記を出版するハメになりそうだぜ!

俺が食料庫でいつものようにパラタ(※インドのナンのようなパン)を食っている間に、電話越しに俺らの音楽を聴いた奴らによると、俺らの音楽性はホラー・サーフ・パンクってところらしいぜ。俺たちのハッピー・サマー・チューンを聴いていると、躍動感を感じるって奴らもいたね。けど、そんなことを感じるってことは、そいつらはおめでたいアホなんだよな。だって歌詞はどれもこれも見事に悲壮的なもんなんだぜ。ところで、俺たちはみんなフィリピン人なんだ。人種的にKabayans(※フィリピンの言葉で兄弟/同郷人の意味)としてここUAEじゃ疎外されている。だから、そうさ、俺たちはUAEにとって薄汚い奴隷。まともにギグを組んでくれる人間なんてどこにもいやしない。イカれた嫌われ者さ。バンドに連絡したいときは俺までメールしてくれよ!rmbforme@gmail.comだ。トレードもやっているぜ!1st　7"の作業を現段階じゃ終えていないんだけど、他のバンドの7"ならかなりあるからトレードできるよ!Bandcampにもとりかかってはいるんだけどね。最近は仲間のリリースを販売するガレージ・セールもやっているんだ。UAEの最高のバンド、DEAD　SHAKESやフィリピンのロキシー・バンド、FAUX PAXとのスプ


GRAND HOTEL PARADOX

DEAD SHAKES



↓下段左から：
FIGHTING SUPER HEROES
MATICRUST
THE VICTIMS







リットを出す資金を作るためにね!それと小さいサイズのファンジンもやっているよ。Wrong Choice of Wordsっていうんだ。あ、メールよりかは実際の手紙の方が確実に返信するよ!THE VICTIMS c/o Rei Bravo, Po Box 1155, Dubai, UAEまでよろしく。気軽に何でも書いてくれよ!

ここには実際、素晴らしいバンドがもっといるんだ。だけど奴らときたら俺のメールに全然返信してこないんだよ!(※ちなみにこのReymond自身、最初だけ調子が良かったのですが、すぐに連絡がつかなくなりました…)きっと俺がイカれているからに違いないね。それでも、彼らは真っ直ぐなハートを持ったバンドであることに違いはない。多分、いつの日か俺のメールに応じてくれるはずさ。オンラインで彼らをチェックしてくれ。PLAINWAVE、THE DIRTY MACHINES、そしてCRANIAL SPEW。これらのバンドは未曾有の人災が転化した、誰にも止められない音楽集団だよ。俺たちなんかより遥かに才能があることを確信している。だからBandcampなりYoutube、夕方のニュース番組なんかでチェックしてくれよな…。

ギグはどうかって…?ここでもギグはあるよ。けど大抵の場合、メタルかグラインドか

デスなんだ。パンクのギグは、UFOから宇宙人が降りてきて道ばたで立ち小便する姿を目撃するよりも少ないんじゃないかな。時々開催されるギグで最も素晴らしかったのはABBREVIATED　Recordsのベネフィット・コンピレーションがリリースされたときのものだな。それ以外はメタルばっかり。ここには俺たちのシーンもあるってのにさ。どうしてメタルなんだって?そりゃ、ここの床屋はメチャクチャ高いからだよ!それにプラスして、生け贄のネズミみたいなメタル・ファンの奴らは、どいつもこいつもバンドが招聘するメジャーなバンドが見たくてしょうがないのさ。

先月ならGUNS'N'ROSES、そして今月はMETALLICAがやってきた…。ここにはBAD RELIGIONも来なけりゃDROPKICK MURPHYSも来ない。GREENDAYすら来ないんだ。全部メタル・バンド。メタル、メタル、メタルばっかさ。セイバートロン(※ロボット・アニメのトランスフォーマーに登場する惑星)を再建できるくらいメタル(鋼鉄)を得ているよ!それでも、ここで活動しているメタル・バンドには敬意を表したい。この国は文化的な法律に厳格だし、何かしら反抗的な考えや歌詞を広めようとすれば、"ヘヴィ・メタル・ドゥーム"の文字通りの事態を招くことになるだろう!だからキッズはそんなリスクを乗り越えていくメタル・バンドに希望を見出しているんだ…。ほら、尊敬したくなるだろ?まぁ、それでも、個人的にはパンク・ロックを愛しているけどね。でも、障害をものともせずにタフに生きている奴らのことは尊敬するよ。彼らもある意味じゃ、アンダーグラウンドだよ!

ここの地図のどこにパンク・ロックは載っているかって?アンダーグラウンドの更に地下さ!石油の臭いが嗅げるぐらいに俺たちはアンダーグラウンドに位置している!ここでのネットワークや共同プロジェクトについての話しを聞きたければABBREVIATED RecordsのChris　Ryanまで連絡してくれ。ギグやツアー、その他諸々はSTATESIDE PRODUCTIONまで。花嫁探しのご相談はドバイ動物園まで。今のところは以上かな。問い合わせがあればWrong Choice of Wordsファンジン、rmbforme@gmail.comまで連絡してくれよ。もし君がファンジンをやっていてここのバンドにインタヴューしたいのなら、俺がメールを転送することもできるぜ。OK、それじゃあ元気で、楽しんでいこうぜ!Shokran(※アラビア語でありがとうの意味)!

VIVA HATE

VISION OF DISORDER

TEXT:行川和彦

91年にハイスクール・バンドとしてニューヨーク州ロードアイランドで結成されたVISION OF DISORDER(以下VOD)。11年ぶりのアルバムの4作目『The Cursed Remain Cursed』を2012年にリリースしてくれたから、めでたく"VIVA HATE"というフレーズがテーマのここに登場してもらった。個人的に別格中の別格のバンドだが、客観的に見ても破格のバンドである。スタイルではない。響きと言葉に宿る意識に耳を傾けるのだ。

一生忘れられないライヴがある。そのひとつがVODの初来日公演だ。時は97年9月。場所は渋谷O-WEST。実のところ当時VODに対するおれの関心は低く、そのライヴも老舗洋楽雑誌だった『ミュージック・ライフ』で原稿を書くために行ったものだが、震撼した。それからというもの、言い訳がましく策を弄したパンクやハードコアが情けなく見えるようになった。

ハードコアの意味を知る。あらためて思った。音そのもの、声そのものがハードコアではないと。その響きにこそ真実が宿る。

VISION OF DISORDER。バンド名からして究極である。名は体を表す。よくぞ付けたものだ。高校2年生の時にギターのマイク・ケネディが英語の教科書で見つけたフレーズで、深い意味は考えずに単に言葉の響きが気に入ったから引用しただけらしいのだが、物事すべて直観が大切だと再認識させられるエピソードだ。"VISION OF DISORDER"という名を背負ったことは必然でもあり、バンドの運命は決まった。いつだって敵は見えない。いつだって敵は無数。だから全世界を見わたして"個"と対峙するしかない。だが疎外から逃れられない。だからこそおのれの中のカオスを解き放つ。

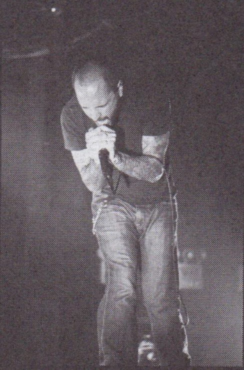
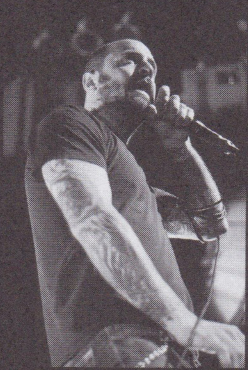
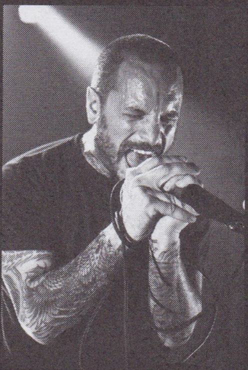
VODがニューヨークのハードコア・シーンから登場したことは間違いではないが、ニューヨーク・ハードコアの伝統をくんだバンドとは言い切れない。ニューヨーク・シティというより郊外のロングアイランド出身だし、音楽的にもパンクの子供ではないから

アップ・テンポで走るパートがほとんどない。かといってニュースクール・ハードコアほどスロー・チューン主体ではない。メタリックとはいえグルーヴィだから、CONVERGE以降の"モダン・ハードコア""カオティック・ハードコア（いわゆるマス・コア）"とも重ならなかった。まさに異端で異形。だからこそ尊い。

91年にバンドを始めた頃にコピーしていたMETALLICAや、『I Against I』〜『Quickness』あたりのBAD BRAINSのミディアム・テンポ・チューンが曲作りのベースで、静と動を使い分けるヴォーカル・スタイルはALICE IN CHAINSが元ネタのバンドである。数々のインタヴューから察するに有名どころ以外はあまり聴いてないと思われるが、掘り下げて聴くマニアックな音楽リスナーではないからバンドがダメなんてことはない。大切なのはおのれを深く掘り下げて声と音でどれだけ放射できるかだから。パンクでもハードコアでも何でもお勉強して作った音楽は空っぽの世界でしかない。だって頭でやっているから。体と心でやらなきゃ張子の虎。死に絶える肉体と永遠に生き延びる精神の間で生まれた強靭なグルーヴが音楽のすべてなのである。

デモとEPで音源を発表した後、96年にファースト・アルバム『Vision Of Disorder』（96年）をリリース。ニュースクール・ハードコア・ファンの間で人気が高く後々までス



テージで披露される曲も多いが、曲が乱れないように発声と演奏で指示が飛んでプロデューサーにパワーが抑えられた仕上がりなのはメンバーが認めるところで、おれもイマイチ入り込めなかった。VODの真価が発揮された作品とは言い難いと思ったのが、オジー・オズボーンが頭のイヴェントである"オズフェスト 97"に出演した勢いで決行した初来日公演である。

冒頭で書いたようにおれは全身を殺されたファックされた。セカンド以降のアルバムでも体験できるまさに全身全霊のパフォーマンス。なにしろ正直だった。ポーズの類が一切ない。ニューヨーク・ハードコア一派とも見なされるだけにVODにはタフ・ガイのイメージも付いてまわるが、メンバーも自認しているように一線を画している。オルタナティヴ・ロックのフィールドの偏見に満ちた人間はエクストリーム・メタルやメタル/ハードコア以降の音に対して何でもかんでもマッチョの"烙印"を押すが、音楽はそんな単純に割り切れるものじゃない。実際問題VODのメンバーには誰一人筋肉質の人間はいないし、VODの歌詞はタフであることを誇るわけでもない。

初来日公演で最も心に刻まれた姿はヴォーカルのティム・ウィリアムズのステージングである。観客をほとんど見てなかったのである。時にうずくまり、背を向けるシーンも少なくなかった。70年代の後半から色々なライヴを観てきてシンガーのこんな動きは初めて体験したから驚いた。オナニーみたいな自己完結では終わらずに無限のエナジーで空気を震わせていたし、スクリームにしてもまさに字義通り"苦痛と恐怖と驚きと怒りと興奮などで大声を上げる"声そのものだったから、歌と音の中に没入していた

ことは間違いない。ただ後にインタヴューで訊いたところ、当時のライヴで観客を見てなかったのは臆病だったからと答えてくれた。自分を強く見せる“粋がり”とは対極で自分の弱さを逆バネにするVODの“強み”をおれは見た。

VODは98年の『Imprint』でライヴと同じ自分らのカオティックな空気感をナマのままレコーディングした。1曲ヴォーカルで参加したフィリップ・アンセルモが当時在籍していたPANTERAからの影響も感じられるが、とにかく混沌とした空気が渦巻きっぱなしである。所属していたレコード会社のロードランナーの処遇に逆上していたからこうなったと当時発言していたが、そんなちっぽけなモチーフだけとはとうてい思えない。内向きの欲求不満とは別次元で轟き、甘えのない無限大の音と声と言葉が浮世を超越して突き抜けるべく放たれる。だから『Imprint』がメタル/ハードコア以前にロックのアルバムとしても歴史に残る作品になった。

パンク・ロック、ハードコア・パンク、スラッシュ・メタル、グラインド・コア、デス・メタル、ブラック・メタル、さらにテクノなどの類も含めればもっとビートが速い音楽はいくらでもある。だがこれほどの加速度のアルバムはそうそうない。それにしてもしょっぱなからしまいまでつんのめりっぱなしのこのヴォーカルはどうだ。破裂寸前まで膨張したフラストレイションで窮屈な五線譜の鎖をブッち切り続けて精神のレッド・ゾーンの危険地帯に顔面を何度も叩きつけている。まさに鬼気迫るヴォーカルである。

おれは『Imprint』を聴いて声の真実を知った。歌詞では調子のいいことをいくらでも言える。だが声はウソをつかない。何を歌おうがウソが見えてくる声だとしらけるようになった。わざとらしさに耐えられない。なぜ声にポーズをつける必要があるのか。音楽に限らず日常だって話し声に耳を傾ければ底意地が見えてくる。だからVODは『Imprint』収録曲の「Locust Of The Dead Earth」で繰り返す。“フェイク、ファック!”と。

ファースト・アルバム以前の曲の再録音が大半の『For The Bleeders』(99年)を経て、VODは2001年にオリジナル・サード・アルバム『From Bliss To Devastation』をリリースする。目立たない形でエレクトロニクスも使われているが、曲によってダブっぽい音処理も聞こえてくるとはいえメンバーがダブという言葉の意味を知らなかったということから察するに、そういう音を施したのはプロデューサーのアイデアと思われる。

それはともかく、VODならではのハードかつヘヴィなリフとグルーヴが核であることは不変ながら、執拗に叩きつけられる激昂極まり無き音塊とスクリームの執拗なうねりは減り、ある種の諦念すら漂うアルバムになった。

だがそもそも『Imprint』はこんなことを続けていたらまもなく死ぬ音楽だった。行くところまで行っていた。音楽に限らず様々な分野の正直な表現者がその時々の気持ちのヴァイブレイションを表現化するように、VODもおのれをdischargeするしかない。だって切羽詰まっているんだから。飢えているからそうする。生き延びるためにそうする。上辺の様式の保身に精を出すだけの“ゆとりハードコア”と覚悟の決め方が違う。まさに命がけだ。

曲にはストーナー&ブルージーな煙がほのかに漂い、さらにメロディアスな歌唱が増えている。だがやはりどうやってもティム・ウィリアムズは“楽譜どおり”には歌えない。綺麗には歌えない。だがだからこそ尊い。アルバム・タイトルの“至福から荒廃へ”という感情の震えがメロディ・ラインを常に塗り替えるのである。そもそも心から錯綜している思いを歌っていればお行儀よく収まるわけがない。様式美なんてところから百万光年かけ離れたところで生々しく響いているからこそ深く骨身に応える。ヴォーカルのティム・ウィリアムズはレア音源集のボックス・セットを買うほどDOORSのファンだが、歌の上手さは比べ物にならないとはいえ、そのシンガーだったジム・モリソンのハードコア版と言い切れる達観したような魂の震えの歌唱なのである。

VODの歌詞に渦巻く情念と激昂は変わらない。いややはり、『Imprint』前後のトーンを中心にそれまでのVODを凝縮してアップデートした4作目のオリジナル・アルバム『The Cursed Remain Cursed』(2012年)まで見ていくと、どんどん深手の傷が広がったディープな表現になっている。

「このアルバムは俺にとって、周囲の人間の意見に流されてしまう人々や、政府、そして日々起こる様々な事件に対するフラストレイションの“はけ口”になっているんだ」

ファーストのライナーに書かれたヴォーカルのティム・ウィリアムズの言葉だが、以降のVODの歌詞にも当てはめられる。

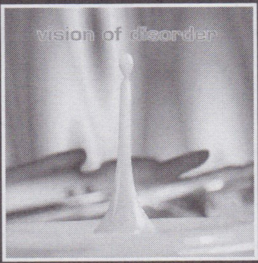
VODは政治も題材にしている。ファーストに収録された曲「Ways To Destroy One's Ambition」がボスニア紛争にインスパイアされた曲であるように、自国以外も見わたし

てポリティカルなこともモチーフにしている。だからといって“戦争反対！”なんて歌わない。MOTORHEADやSLAYERの弁じゃないが、戦争が良くないことはほぼすべての人間がわかっていることだ。そもそも世界は国家間だけの戦争に留まらず、民族紛争や宗教紛争は世界中で起こり続けている。そんな混沌の中で触発されることはひとつじゃない。

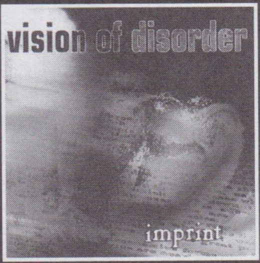
“反戦”だの“反体制”だのの“反〜”といったスローガンを歌うことで物事を合理化して“個”に向き合わない輩とは違い、VODは免罪符を必要としない。いわばすべての人間が犯罪者みたいな歌だ。ウソがない。潔癖すぎるからこそ本音で歌う。そもそも音楽に限らずグレイトな表現は善悪を超えたところにあるじゃないか。

まるで“ラヴ＆ピース”の欺瞞のはらわたを根こそぎ引きずり出すような歌詞だが、そもそもパンクはそういった無邪気で生ぬるい発想に対するカウンター・カルチャーだった。

VODは確かにパンク・ロックではない。だがパンクがメイン・ルーツではなくても、いや逆にパンクの音楽スタイルに囚われてないからこそ、VODの中ではいつだってプリミ



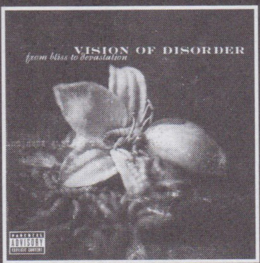
『Vision Of Disorder』



『Imprint』



『For The Bleeders』



『From Bliss To Devastation』



『The Cursed Remain Cursed』

ティヴなパンク・アティテュードがハジけており、その激化した形のプリミティヴなハードコア・スピリットが絶えることなく炸裂している。要はストレートエッジに代表されるストイックな生活様式のバンドが多い米国ニュースクール・ハードコア勢と似て非なるところが、VODの原始的なパンクっ気なのだ。

ヴォーカルのティム・ウィリアムズとギターのマイク・ケネディは、VODの活動停止中の2000年代にやっていたBLOODSIMPLEで“ラウド・パーク06”に出演したのだが、ステージに登場した時のティムの開口一番に苦笑した。何しろ「コンニチハ、マザーファッカー！」である。ほとんどお馬鹿さんだが、馬鹿馬鹿しいからこそピュアでプリミティヴなパンク・アティテュードである。頭デッカチのパンクに用はない。さらにVODの最新作『The Cursed Remain Cursed』に収録された曲の「Be Up On It」の曲間で“ワン、ツー、ファック・ユー！”と吐き出している。これも同じようなもんだ。言葉本来の意味での“むかつき”の連鎖と胸騒ぎの連続で心臓の喉が窒息しそうだから吐く。 パンク/ハードコアの原点である。

サウンドと共振してVODは歌詞も混沌とした壮絶な形相を見せ、閉塞を突破するためにフラストレイション（≠欲求不満）が加速し、永遠に止むこと無きネガティヴ・メンタル・アティテュードが炸裂する。VODはむろん人種差別バンドではない。特定の宗教を差別するようなこともしない。そんなの“甘ちゃん”である。すべてをファックする。いわばアルバム全体が“リアル・ヘイト・スピーチ”なのである。

VODの歌詞はPOISON IDEAやBATTALION OF SAINTSの系統、すなわちBLACK FLAGの流れの“非善人ハードコア”だ。数人のメンバーが歌詞を書いていたとはいえBLACK FLAGも歌っている内容が一貫していたが、その後期のヴォーカルだったヘンリー・ロリンズの歌詞に関しては、彼が率いたROLLINS BANDの言葉にも触発されているという。さかのぼるとRAMONESやSEX PISTOLS、BLACK FLAGといったパンクの象徴たるバンドたちが内包していたニヒリズムの流れをくんでいるわけだ。

ハードコアの源のひとつである70年代後半のパンク・ムーヴメントの肝は、大昔のヒッピーやフォークの時代に蔓延した共同幻想のウソ臭さをデストロイ！し、“個”としてどこまで自分を突き詰められるのか、追い込められるのかであった。JOY DIVISION

のヴォーカルだったイアン・カーティスなんてその象徴みたいなものである。目下の最新作『The Cursed Remain Cursed』を締める曲のタイトル「Heart And Soul」が、JOY DIVISIONの同名曲と共振しているように思えてならない。要はindividualismである。バラバラでありながら混沌としたハーモニーを成すのがパンク・ムーヴメントだった。だがいつのまにかパンクもハードコアも互助会みたいなものが"メインストリーム"になってしまっている。『Imprint』収録曲の「Up In You」にはピッタリの歌詞がある。"おまえは大衆の中にハマっちまったpunk(チンピラ)でしかない"。

ライヴ・ハウスでも慣れ合いが目につく。80年代初頭からハードコア・パンク・シーンで活動している一人がちょっと前に、そういうナアナアな風潮に憤慨して「俺なんか当時から嫌いなバンドに直接ボロクソ言ってやったよ」と吐いていた。VODにとっても友達は友達で大切だが、友達だからこそはっきり言う。たとえばEARTH CRISISのヴィーガニズムに対してもオフレコ無しで「なんだありゃ?」みたいな発言をしている。DIYで動くバンドが大半ゆえか80年代初頭からハードコア・シーンは、既成の音楽システムに頼る代わりにコミュニティを作った。シーン形成当初は濃い固まりだったとはいえ水増しが進み、切磋琢磨して高め合う関係ではなく"仲良し倶楽部"みたいになっている。

VODはインタヴューも常に真剣勝負だ。"戦略家"のアーティストではないから気の利いたことは言わない。そういう点ではシンプルなロックンロール・バンドに近いが、ティム・ウィリアムズは値踏みをするような表情で対峙してくる。真正面から向き合う。人間関係の基本である。だから歌詞もほとんどが"俺とおまえのタイマン勝負"である。人称名詞を見ていくと、初期の曲にはまだいくつか目にした"we"などの一人称複数形が消えていき、一人称は単数形になっていく。"俺たち"ではなく"俺"。歌詞も"個"であることを自覚したような色合いが強まっていく。VODにはみんなで拳を突き上げる共同幻想みたいな曲はほとんどない。「南無妙法蓮華経」という曲で"二本の足じゃ　ものたりず やたらと肩を 組みたがる"と歌った友川かずき(現・友川カズキ)と共振するアティテュードなのである。

VOD周辺のハードコア・シーンに話を戻すと、ユニティとも言われる徒党を組むのはタフ・ガイ系がほとんどというのも興味深い。タフ・ガイっぽいノリの人間がそうなる

のは音楽関係なくやはり普遍的に言えることだし、そこにいる一人一人が没個性に見えることも多い。やはり集団は結局"個"を殺す。そしてしまいには"みんなで世の中を良くしよう！"みたいな話になっていく。VODだって根っこではそうなってほしいとブルータルな祈りをずっと叩きつけている。だが昔の数々の悪行の罪を償うためのごとく善人気取りをするなんてことはない。そもそもそれ以前に、どうにかなってしまいそうな自己を救済することが先決なのだ。自分を救うための正直な表現こそがリアルで"生"が激しく呼吸をし、死にそうな人間に息を吹き込むことを知っている。

VODは孤高だ。音楽性や音楽スタイル云々以前にたった一人でも世の大勢に抗うアティテュードこそがハードコアだとわかっている。もっと言えば要は、世間一般だけでなく周りだのシーンだのにも流されず"自分自身であれ！"ってこと。全世界を敵に回しても味方が一人もいなくても自分を貫き通すってことである。ヴォーカルのティム・ウィリアムズは言った。

「全世界に中指を突き立てることがハードコアだ」

これぞ究極の"ヘイト・スピーチ"である。



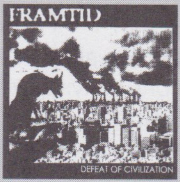
Recordshops Recommended Records 2013

レコード屋さんのオススメ音盤

日々、大量に投下されるパンク/ハードコア等々の音楽作品。10年くらい前までなら、「今はコレを押さえておこうよ!」的なリリースがあったようにも思われますが、何でも聴けて何でも知れて趣味嗜好も細切れミンチ状態の昨今、最早「何を聴けばよいのかサッパリ!」とお嘆きの方もいらっしゃるのではないでしょうか。分からないことは人に訊こう→一番音楽に詳しいのはレコード屋さんである!というわけで、"実店舗を有している"各地のレコード屋さんに、まだ9月だというのに「2013年オススメの作品5枚」を書いてもらいました(こういう記事は年末にやるのがスジなんですが、年末にel zine出るか分かんないし…)。

また、挙げてもらった音源についてであったり、昨今のレコード店さんをとりまく状況についてだったり、仕事の愚痴でも、今後の展望でも、内容は自由で400字程度のテキストもお願いしました。楽しいレコード・ショッピングの参考になれば幸いです!ちなみに、400字という字数制限を守って頂いた皆さん、どうもありがとうございます。思いっきり超過した皆さん、文字が小さくなっていますが、ご了承下さい(笑)。









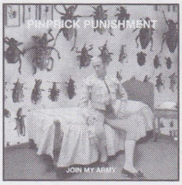




Nat Records



①



②



③



④



⑤

今年も2/3が終了、もうこんな季節ですか(笑)。

Natの5枚は敢えて、「現行のPunk Rock」からの選出です。再発モノの50's/60's、更には70's Punk、80'sから現代のHard core、更にはHard Rock、Psych、そしてPost Punk関連…。

5枚はとてもではありませんが、選びきれませんでした。レコ屋を続けて20年弱、毎年毎年良いレコードはどんどんと登場します。勿論、中古のレコードで新たなる発見もありますので、毎年ベスト50〜100位なら楽ですね(笑)。

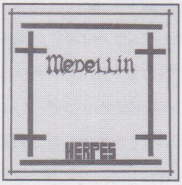
今回の選出は順不同ですが、どれもとんでもないセンスで衝撃度は日本の3バンドに軍配があがるでしょうか。聴き込んだという点でもその3バンドは相当聴きました。今後も良いレコードとの出会いに期待しています!　(板垣/Nat Records)

① XL-FITS/COWBOY/COLPO GROSSO(SID VICIOUS)7"
② PINPRICK PUNISHMENT/JOIN MY ARMY(BLACK CUBE)7"
③ BLACK AND WHITE/WE LIKE NOISE(HARDCORE SURVIVES)7"
④ GINO & THE GOONS/PLAY LOUD(TOTAL PUNK)12"
⑤ FAG COP/WHIMPERS FROM THE PANTHEON(RANK TOY)LP

PUNK AND DESTROY



①



②



③



④



⑤

①バルセロナの女性Vo DARK POST PUNK。このテのサウンドのバンドは増えておりますが、「POST PUNKでっせー!!」なんて大袈裟さのない現実味と、浮遊感がいいバランスです。1st LPより曲、アートワーク、プロダクションなど巧くパワーアップした感じ。ちゃんとしてる!

②ちゃんとしてない!不完全に完全なコロンビア激烈粉塵バズソウ洞窟怨念音楽が凄すぎる!

③HERPESよりは気持ちちゃんとしてる!みだりに敬う必要もないが、ギャグと捉えるのももったいない。純粋にかっこいいですよ。

④スペインRUIDO DE RABIAの前身にあたるバンドのベールを脱がした音源集。そう、初めから終わっていたのだ!音楽ってなんや?!

⑤メキシコの男女二人組のRAW HARD PUNK。鋭利な女性Voとジャキジャキ疾走する荒々しくもキャッチーなサウンドがいい感じです。メキシコのCINTAS PEPEというレーベルからですが、このレーベルのリリースは装丁も含め雰囲気ムンムンで注目しています。

(SAZA73/PUNK AND DESTROY)

① BELGRADO/SIGLO XXI(LA VIDA ES UN MUS)12"LP
② HERPES/MEDELLIN(FUCK YOGA)7"EP
③ ATAQUE DE SONIDO/ST(FUCK YOGA)7"EP
④ TORTURA SISTEMATIKA/
TODOS SOMOS CULPABLES(TRUCO ESPARRAGO)CD
⑤ CREMALLERAS/ST(CINTAS PEPE)LP

Record Shop BASE



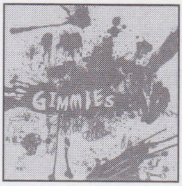
①



②



③



④



⑤

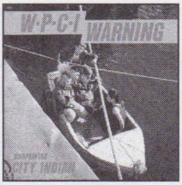
'13年のオススメ、というよりここ最近(9月時点)のオススメっていう感じの5枚です。順不同ですが、まずはBELGRADOの新作アルバム。1stアルバムからかなり注目のスペイン・バルセロナの女性ヴォーカル・パンク・バンドで、80's POST PUNK/GOTH/ANARCHO PUNK影響下、ダークで冷ややかなサウンド。同郷のSECTや、ARCTIC FLOWERS、SPECTRES、BELLICOSE MINDS、そしてDEATHCHARGEなどこの手のサウンドのバンドが続出し、注目、定着してきた感があります。忘れてはいけないのが三重/四日市のC-3'S。OVERTHROWからの1st EPも必聴です。続いて、南米ペルーのロウ・ハードコアDHK。デモ音源に続くファースト・アルバムで、80年代南米〜スペイン、粗暴でプリミティヴ、攻撃的で生々しいサウンドが強力です。UKのレーベルLA VIDA ES UN MUSの作品が2タイトル続きましたが、ハードコア・パンク・ファンは注目のレーベルですね。VOCO PROTESTAの新作アルバムも抜群でした。3枚目は、US/オハイオのダーク・パンクNERVOSAS。現在に蘇るWIPERSとでも言いきれそうなギターワークが特徴的で、ESTRANGED〜MASSHYSTERIあたりのファンにもお勧めしたいバンドです。日本のバンドから、東京のパンク・ロック・バンドGIMMIES。MANGROVEからリリースされたこの最新シングルは、これまでの彼らのイメージを覆すかの攻撃的でピュアなパンク・ロックが炸裂！身震いするほどのかっこ良さ!最後は、札幌の日本語パンク・ロック・バンドTHE KNOCKERS。新体制3曲入りシングルで、シンプルかつストレート、それでいてキャッチーなノッカーズ節200%!個人的にもノッカーズには夢中で、聴いてるとホント元気がもらえます。他にも再始動BACK TO BASICSの2ndシングルも珠玉の出来、センス溢れるSUSPICIOUS BEASTSの1stフル・アルバム、そしてLIFEやFRAMTIDの新作アルバムは説明するまでもなく、ハードコア・ファン最重要作品です。

昨今の状況で気になるのは、今年に入ってからの円安ドル高傾向と卸値も上昇、輸入盤の価格が割高になってきたことでしょうか。海外のバンドの輸入盤を熱心に追っているお客様には、心苦しい限りです。バンドとレーベル、そしてその作品を買ってくれるお客さんがあってこそなので、常に良い作品が提供できるようがんばります。

(南/BASE)

① BELGRADO/SIGLO XXI(LA VIDA ES UN MUS)LP
② DHK/LA KRUDEZA NO MUERE(LA VIDA ES UN MUS)LP
③ NERVOSAS/ST(P-TRASH)LP
④ GIMMIES/KIDS AND NEIGHBORS(MANGROVE)7"
⑤ THE KNOCKERS/オレはもう何にもできねぇクズのまんまではいたくねぇ(自主)CDR

Record Shop ANSWER



①



②



③



④



⑤

パッと頭に浮かんだ5枚を選ばせて頂いた。オススメというのはもちろんだが沢山売れた5枚でもある。

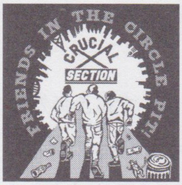
本来であれば国内のバンド、国内外各再発は敢えて省き海外の現在進行型で活動する新進気鋭なバンドをオススメ、ご紹介したいところだが実際のところ2013年度、残念ながら当店としてはそれが出来る程、入荷させなかった…というより出来なかったというのが正直なところである。

毎日届く各国からのNEW RELEASE INFO。本来の捜し物、目的を忘れ情報の整理の為?勤務時間の殆どをパソコンに向かう日々。仕入れる入れないの判断、カッコ良いカッコ悪い?の判断。どなたが買われるのか必要としてるのか…。音楽ソフト?えっ?欲しいの?誰が?濃度が薄い。一概には言えないが可能性に賭けれる現状では無い。情報収集は人ソレゾレ、好みもソレゾレ。

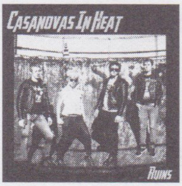
もう既にアングラ音楽?紹介販売業としては失格なのかも知れないですね。　(中村/レコードショップアンサー)

① WAR PAINTED CITY INDIAN/
COMPLETE DISCOGRAPHY(TIME BOMB)LP/CD
② LIFE/VIOLENCE,PEACE AND PEACERESEARCH(PUNK BASTARD)LP
③ 九狼吽/HUMAN IN CONFUSION(MCR)CD
④ TURTLE ISLAND/空空神々-KALAKALA KANKAN-(MICRO ACTION)CD
⑤ FRAMTID/DEFEAT OF CIVILIZATION(CRUST WAR)LP

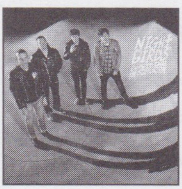
ディスクユニオン
渋谷パンク・ヘヴィメタル館

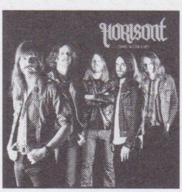


①



②


③



④



⑤

2013年にリリースされた4作品と⑤は2012年のリリース作品なんですが、今年になってから入手したので入れてしまいました。まずは①ですが、ライヴを観に行った人にはわかるあの1曲目を収録。普段の活動の中で感じた事がダイレクトに伝わってくる作品。作品、ライヴ活動、普段の会話と全てがリンクし前進を続ける飾らない姿勢は色んな意味で考えさせられます。そして、②はボストンらしいPUNK ROCKで大プッシュ!早くアルバムが聴いてみたい。③はシステマのEUROツアーに同行した際にライヴを目撃しているのですが、ほとんど覚えていないという情けない思い出…。そして作品を聴いてビックリ。SURFテイストを盛り込んだHARDCOREとPUNK ROCKの中間サウンド。DEAN DIRGもイイ感じでしたがNIGHT BIRDSも同じように注目されてもいいはず。そして、かなりお気に入りは④！スウェーデン産のビンテージ・スタイルHARD ROCKバンドの3rdアルバム。1曲目のTHIN LIZZYミーツ昭和歌謡な泣きギターが延々と頭の中でループしてしまいました。すかさず1st、2ndもゲット。1stも超カッコいいです！⑤はLPのみのリリースで、中々入手できなかったのですが、聴いてビックリ。これがなかなかSTRONG & FASTなボストンHC。みんな注目しているのがわかります。新しいバンドはまだまだいるはず！

(増田/ディスクユニオン渋谷パンク・ヘヴィメタル館)

① CRUCIAL SECTION/FRIENDS IN THE CIRCLE PIT!(CREW FOR LIFE RECORDS)CD/7"
② CASANOVAS IN HEAT/RUINS(DERANGED)7"
③ NIGHT BIRDS/BORN TO DIE IN SUBURBIA(GRAVE MISTAKE RECORDS)CD/LP
④ HORISONT/TIME WARRIORS(RISE ABOVE RECORDS)CD/LP
⑤ BOSTON STRANGLER/PRIMITIVE(FUN WITH SMACK)LP

record KNOX

お世話になります、レコードノックス橋本です。「2013年オススメの作品5枚」ということで、売れないレコード屋代表で参加させていただきます。

さて「'13年リリースで」というお題を頂きまして、ざっと自分のレコード箱を覗いて「コレは'13年だろう」的な物を30枚ほど引っこ抜いてみたところ、ほとんどが去年/一昨年(さらに前)のリリースでビックリ!!今年で40になるオッサンからすると1年の速さ(早さ)は尋常じゃなく、今年と思っていたモノはあっという間に過去(去年/一昨年)になっているのです(笑)。というわけでがんばって'13年モノ(1枚、'12年モノあり)を厳選しました。順不同です。良い悪いで言ったら'13年リリースだけでも軽く100枚はこえるので、ここでは勝手に(格好いいのは大前提として)個人的に思い入れもあるのを選びました。どれもオススメですので買って損は無いと勝手に思っております。音源について色々書こうと思ったのですが、文字数オーバーなのでコレにて失礼いたします。

今後ともなにとぞよろしくお願いいたします。

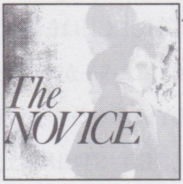
(橋本/record KNOX)



①



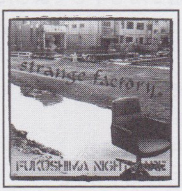
②



③



④



⑤

① CRIATURAS/ESPIRITU DE LIBERTAD(HARDWARE RECORDS)LP
② FRAMTID/DEFEAT OF CIVILIZATION(CRUST WAR)LP
③ THE NOVICE/ST(DIRTNAP)7"
④ STRANGENESS/ST(VILLAINY PRISON RECORDS)CD
⑤ STRANGE FACTORY/FUKUSHIMA NIGHTMARE(HARDCORE SURVIVES)7" ('12年10月)

RECORD BOY

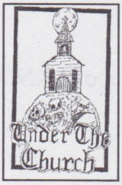

①



②



③



④


⑤

ここで挙げた作品の上位2タイトルは、現行では入手困難なものですが、2013年のBOYを、そして僕自身のモチベーションを大いに盛り上げてくれたものとして、絶対にはずしたくなかったですし、次の作品のリリースがちょうどタイミングよく控えてるので、あえて選ばせてもらいました。ABSOLUTは、本号のDeath to False Metal Punk特集でもちょっと登場する、MIDNIGHT、RAMMER、LEFT FOR DEAD、SLAUGHTER STRIKE、etcもやってたJoel Fisher君参加のANTI-CIMEXウォーシップ・スラッシュ。RANGERは、デスメタル連中によるフィンランドのスピード・メタル。VIRUSは、BOYがレーベル立ち上げてでも再発したかった80's UKハードコア・スラッシュメタルの再発盤。UNDER THE CHURCHは伝説のスウェディッシュ・デスメタル、NIRVANA 2002メンバーが始めた王道スウェデスど真ん中サウンドのバンド。BOYが作ったデストラクジャンを褒めてくれましたので、4位入賞です。RED STRIKEは、期待のスウェディッシュ・デスメタル若手バンドMORBUS CHRONのメンバー参加のプロト・パンク・スタイルの爆音ガレージR&Rバンド。どの作品も、el zine読者も存分に楽しめるメタル/パンクなので、機会がありましたら、ぜひチェックしてみてください。チェックしてなくても、BOYで買い物してください。「el zine読者諸君、有り金全部BOYに振り込みな!!」と、Alejandra姐さんも申してましたので。

(大倉 了/RECORD BOY)

① ABSOLUT/DEMO 2013(SELF RELEASE)TAPE
② RANGER/COMBAT METAL(FANATIC LODGE)TAPE
③ VIRUS/PRAY FOR WAR/FORCE RECON(MARQUEE)CD
④ UNDER THE CHURCH/DEMO 2013(SELF RELEASE)TAPE
⑤ RED STRIKE/TALKIN' TODAY(GHOST HIGHWAY RECORDINGS)10"

DISK SHOP MISERY



①



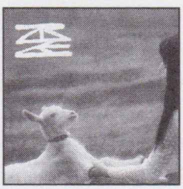
②



③



④



⑤

今年印象に残った５枚を選んでみました。(順不同)

OLEDICKFOGGYは再録音のシングルなのですが、この曲をあらためて聞いて、ランキングに入れさせてもらいました。

なので今回はOLEDICKFOGGYの"月になんて"をテーマに最近思ったことをつらつらと書き連ねてみました。

「月になんていかなくてもいい。同じ過ちを繰り返すなら」

日進月歩のこの世の中。発明はノーベルのダイナマイトに代表されるように幾度も戦争に利用され続けてきました。アポロ開発の担当者、フォンブラウンは月世界旅行を夢見る一人のアマチュア科学者でした。彼がナチスに利用され、V2ロケットを開発し、ヨーロッパ中を恐怖に陥れたことはご存知の方もいると思います。その科学力は人類を月へと導くわけですが、現在では大陸弾道ミサイルとしてその技術は使われているわけです。

「躊躇いと勇気は似てるから踏み出した足は半歩でも前に」

戦争を政治の道具や自己権力の増大にしか考えられない為政者たちへの提言のように聞こえます。

ネットには情報が氾濫し、為政者はそれらの情報をコントロールして都合のいい世の中を造ろうとする。

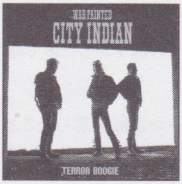
そんな世の中に対して音楽が出来ること。それは我々の想像力、そして創造力を養うことだと思います。戦争などいらない世の中へ向かって。

TO FUTURE!!

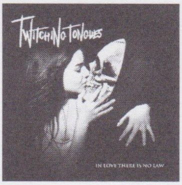
PS：来年は今より少しだけいい世の中になって、ラブ・ソングのベスト５を載せたいですね(笑)。 (GUY/BLOODSUCKER/DISK SHOP MISERY)

① FRAMTID/DEFEAT OF CIVILIZATION(CRUST WAR)LP
② TURTLE ISLAND/空空神々-KALAKALA KANKAN-(MICRO ACTION)CD
③ OLEDICKFOGGY/月になんて/街の灯が揺れる(DIWPHALANX)7"/CD
④ ESPERANZA/THE BEGINING(INSANE WORLD)CD
⑤ JAILBIRD Y/UMS EP(LOVE OVER VOLTAGE)7"

TIMEBOMB RECORDS



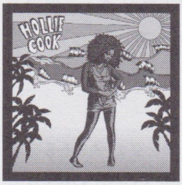
①



②



③



④


⑤

2013年のオススメ音源と9月に言われましたので、現時点でリリースされている音源(順不同、昨年作も含む)でよく聴いたものを無理矢理チョイスしました。5枚は相当難しかった…。

コレ以外によく聴いた、印象に残った音源いっぱいありまして、順不同で羅列しますとWAR PAINTED CITY INDIANの『Dynamite Years』、NEPENTHESのDemo CDR、CE$のMix CD、CRYPTIC REVELATION Demo CDR、ZAMZAM LABELモン7"全般、LOVEWISE DUBWISE 7"2種、DUB DYNASTYのCD、AKIMOTO"HEAVY"TAKESHI MIX CD、THE HEAVYMANNERS meets SCIENTISTのCD、CONGO NATTYのアルバム、巽朗氏のMCD、COPASS GRINDERZ『録音鬼2』CD、COFFINS『Fleshland』LP、POWER TRIP『Manifest Decimation』LPとALL PIGS MUST DIEなどS.LORDの新譜全般、MASTER MUSICIANS OF BUKKAKEの『Far West』LP、CRYPT CITYのセカンドLP、ANYO：裸体のスプリットCD、CROW DRAGON TEA『Eternal Voyage』CD、BIRUSHANAHの『ヒニミシゴロヤナ〜』CD、SPIRITUAL GARDEN『Everyday I Have The Blues』CD、KISS ME DEADLY『Glory Fighting!』CD、KiM『俺達は俺達の街で〜』CD、FRAMTID新作LPとDemo LP、LIFEのLP、ANTI SPECTACLE CD、KEEP AWAY FROM CHILDRENの再発CD、BLINDSIDE『State of Mind』CD、DELIVERANCE『Living Hell』CD、AND BELIEVEシングルCD、RAPPA CD、DEATH DUST EXTRACTOR 7"、S.H.I. 7"、BL'ASTの発掘LP、CARCASS新作LP、CATHEDRALラスト・アルバム、SEPTIC TANK 7"などなど他沢山…っと景気が悪いとかレコード売れないとか言うてますがまだまだ死ぬ程いい音源が出てる、恵まれた(?)いや逆に何を聴いていいのか分からない混沌とした状況になってる気がします。あ、あと、まだでてないけどCITY INDIANの再発とライヴ盤、OOZEのアルバム、不幸のアルバム、LIP CREAMの『Lonely Rock』と初期ライヴ、SANDの新譜は外せません!!

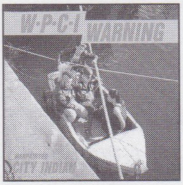
(小路/TIMEBOMB RECORDS)

① WAR PAINTED CITY INDIAN/
COMPLETE DISCOGRAPHY(TIMEBOMB RECORDS)CD/LP
② TWITCHING TONGUES/IN LOVE THERE IS NO LAW(ALLIANCE TRAX)CD
③ AGGRO KNUCKLE:BOUND FOR GLORY/
RESPECT & HONOR EAST MEETS WEST(YELLOW SIDE)CD
④ HOLLIE COOK/HOLLIE COOK(MR BONGO)CD/LP
⑤ VAMPILLIA/ENDLESS SUMMER(SUMMER OF FAN)7"+CD

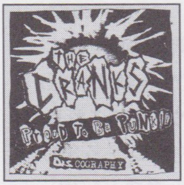
K-CLUB



①



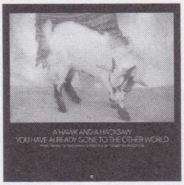
②



③



④



⑤

1位は文句無しのブッチギリ!!ハードコアと言う音楽を初めて目の前で見た時の衝撃!!あの日あの時が、今の自分を此処まで育ててくれたワケで!!その衝撃のシーンを演出してくれた西田氏の新バンドをどれ程待ち望んだ事か……。

2位はまさに青春の1ページ!!当然、全曲一緒に歌える!!

3位は2013年6月に発表する意味が、個人的ですが僕には物凄く有ったので………。そして、凄く良いバンドなので。

4位は高知から日本中に飛び出しまくるハードコア・フォーク・シンガーの4thミニ・アルバム!!沁みまっす!!染み入りまっす!!

5位は望郷心煽るドラマチックかつロマンチック作品!!

6位以降はこんな感じ!!(あくまで今の感じでね!!)

⑥ JAILBIRD Y 7"EP

⑦ JABARA/TOSPANG(HARDCORE SURVIVES)7"EP

⑧ BELL WITCH/LONGING..... CD

⑨ PINPRICK PUNISHMENT/JOIN MY ARMY(自主)7"EP

⑩ 三上寛/ブログ ツィート フェイスブック(CHAOTIC NOISE RECORDINGS)CD+DVD

もう、何も売れない時代に突入して何年でしょ!!??都会が何も売れないのに四国の端の高知で何かがバッシバシと売れる筈も無く………。自分が好きな物を好きな様に仕入れるスタイルに、ドンドンと突き進むここ数年。趣味と興味がオカシな方向に進んでおりまっす!!あああぁぁぁぁ〜〜〜〜。そんな事だから益々何も売れないワケで、このままだと"負の螺旋"からは逃れる事が出来ないのでっす!!それでも好きな事を好きな様にやって来たんだから、今更世間の流れを読んでみても何も出来ず………。結局はいつの時代も文句ばかりをノタマウと………。まっ、楽しく愉快に暮すには其れなりにリスクを背負ってしまうと言うわけでね!!　(井上ヨシオ/K-CLUB/CHAOTIC NOISE)

① S.H.I./STRUGGLING HARSH IMMORTALS(CRUST WAR)7"EP

② WAR PAINTED CITY INDIAN/
COMPLETE DISCOGRAPHY(TIME BOMB)CD/LP

③ CRANKS/DISCOGRAPHY(DAN-DOH)CD+DVD

④ ハナクソ/青(IT'S A SMALL WORLD)CD

⑤ A HAWK AND A HACKSAW/YOU HAVE ALREADY GONE TO
THE OTHER WORLD(L.M.DPLI-CATION)CD/LP

ES GIBT KEIN WERT

お盆に帰省した際に実家の掃除をしていたら、高校生のときにやっていたバンドのデモ・テープが見つかりまして、「うわ、懐かしいな〜!」と再生したら、恥ずかしさのあまり悶絶しました。ジャケはSNUFF『Not Listening』風味なんですが、歌詞は何故かポリティカルで「政治家の仕事は真実を捩じ曲げることだ!」と完全に間違っている英語詞で叫んでいます。そしてバンド名はTHE INSULTED BUMS("侮辱された乞食達"の意味)。…恥ずかしい!メンバーのKくんは子供が2人いるサラリーマン、Mくんは借金まみれで行方不明、Hくんは高校生の時点でハゲかかっていたから、今じゃきっと悲惨な頭部になっていることでしょう。さらば青春の光!

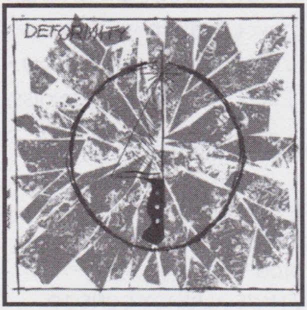
ADOLF HITLER KLAN/DEMO



のちにSURF NAZIS MUST DIEへと発展するドイツのバンドが唯一残したデモ・テープ音源(2001年)を7"化。SNMDもサイコーのガキ・ハードコアでしたが、AHKは更にヤバイ!ジジババ・パンクスの腐った頭を金属バットのフルスイングで叩き割る、恐るべき10代による完全無欠のハードコア。無軌道に転がり落ちる勢い一発のスラッシュ・サウンドでこれはもうセンスの塊というしかない。ドギツいバンド名含め、善人とモラルに唾を吐くこれぞ真義の青春パンク!

(RIGHTEOUSFUCK RECORDS RFR 04/HARDWARE RECORDS HWE 033)7"

DEFORMITY/SHARDS



ニューヨーク発のロウ・パンク・コンピ『NYC GROUND ZERO』にも参加していたバンドの1stシングル。血管がブチ切れすぎて変な汁が漏れ出ていそうなテンションの、騒音公害トラッシュ・ハードコア。クラスト〜D-Beat的なアプローチではなく、天然のガレージ・センスでのたうち回るのは、メンバーが18歳前後と若く何色にも染まっていないせいか。凝り固まることなく、このままトチ狂った感じで続けて欲しい。味わい深きシルクスクリーン・ジャケ。

(LA VIDA ES UN MUS MUS62)7"

BURIAL/RENEGADE



今の日本ではハッキリ言って全然売れていないであろう、ドイツのBURNING WOLVESによる通算3枚目のLP。TRAGEDYスタイルが爆発的に増殖した時代に出てきたバンドですが、そんな話しも今や昔。流行り廃りとは無関係に己のスタイルに磨きをかけて、着実な深化を遂げた佳作。「日本のクラスト・パンク大好きデース」と言った舌の根も渇かぬうちに消え去るトレンディなヤング達より、謹厳実直な姿勢を貫くBURIALを僕は応援し続けたいのです。

(HARDWARE RECORDS HWE 046)LP

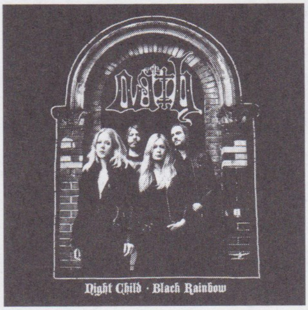
RÁKOSI/ST



共産党書記長にして首相も務め、粛清による恐怖政治を行なった、"スターリンの最も優秀なハンガリーの弟子"ラーコシ・マーチャーシュ(Rákosi Mátyás)の名を持つバンド、RÁKOSIの12年発表の2ndシングル14曲入り。ある種の普遍性すら感じさせる80'sスタイルのロウ・ハードコア・パンクだが、ハンガリー語の語感と相俟って、直情的ではない、どこか"愁い"を帯びた怒りを感じさせる。まさに"東側だった"国ならではの、乾き切らない傷口がジクジクと疼く音。

(LENGUA ARMADA LA74)7"

OATH/NIGHT CHILD



現AC4〜ex SONIC RITUALの138が思い切り「SRは解散した」と言っていたのでそのつもりでいたら、Henryのインタヴュー(P46)を読むと、あくまでも休止中らしい…。というわけで、記事中にも出ていたSRの美人ギタリストLinneaがギターを弾くメタル・バンドのデビュー・シングルがこちら。耽美でどこか懐かしい旋律と、悲壮感漂う女性ヴォーカルは、時代も国も違うのになぜか昭和アダルト歌謡の響き。宙空を漂う酩酊感がたまらない魅惑のオカルト・ドゥーム・サウンド。

(HIGH ROLLER RECORDS HRR307)7"

PRODUKT/UZALEZNIENI



EL BANDA、EDELWEISS PIRATEN、UTOPIAなどのメンバーによるスーパー・グループ(私的)の1stアルバム。これを僕が買わずして誰が買う?!ウオーッ!!と興奮のままに針を落としましたが、…正直それほど突出したところはありません。各バンドの要素が混じり合って逆にカドが取れた、平均的哀愁ポリッシュ・ハードコア。ギターのKrzysiek(EL BANDA)はやっぱりイイ仕事をしていますが…。あ、でも、そこいらのバンドよりかは勿論100倍格好良いですよ。

(PASAZER/TRUJACA FALA/TRANZOPHOBIA/ANGRY VOICE)LP

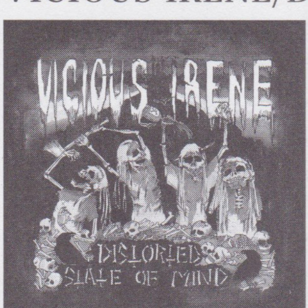
EXTREME NOISE TERROR/TEAR IT DOWN



こちらはウォーッ!!の期待を裏切らない、今年6月にヴォーカルDeanの自宅屋根裏で見つかったという86年の発掘音源。ベコベコベコベコッ!!と響いてくる弾丸ベース、そしてMick Harrisの激烈すぎるドラムに瞬殺されるA面は未発表の2曲収録。そしてB面はジャ!ジャ!ジャ!ジャジャジャッ!のイントロでお馴染みの名曲"False Profit"の原型となった曲、"False Prophet"で再びウォーッ!!!!!ENTファンには最早Buy or Buyという選択肢しか残されていない一枚です!

(MCR COMPANY MCR270)7"

VICIOUS IRENE/DISTORTED STATE OF MIND



スウェーデンはヨーテボリで2001年に結成されたオール・ガールズ・クラスト・コア・バンドの、12年発表のフル・アルバム。メロディアスな歌唱とギター・ワークでTHE ASSASSINATORSなんかを連想しますが、もっと粗暴なDisロックンロール・テイストが加味された姉御肌(not可憐)なサウンド。なかなかどうして素敵なのですが、如何せんミックスで失敗したのか、音のバランスが悪く、高音がやたら強調されててキンキンうるさいのが玉に瑕。惜しい!

(RUIN NATION RECORDS BOLLOX027)LP

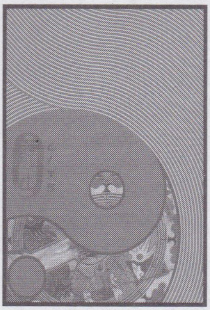
九狼吽/HUMAN IN CONFUSION



(MCR COMPANY MCR268)CD

名古屋シティ・ハードコア、九狼吽の2ndアルバム。付和雷同に中指を立て、己の生き様を曝け出し叩きつける強烈なアジテーション・ヴォーカル、そしてジャパニーズ・ハードコアを骨格としながらも現代のメタル・コアにも通じる強靭な音作りには、増々磨きがかかっています。時折顔を出すロックンロールなフレーズ含め、とことんストレートでありながらも奥行きを感じさせる楽曲の数々は、狭い日本を飛び出し全世界と真正面からタイマンはれる、威風堂々の仕上がり。

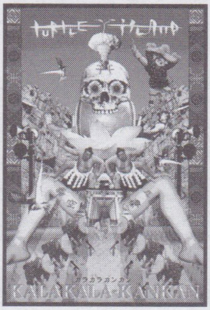
山人楽隊/聴山



(新汇集团上海音像有限公司 C2-X13607)CD

後述のTURTLE　ISLANDの招聘により来日も果たした、中国雲南省出身の山人楽隊の15曲入りCD。大陸ならではの雄大なスケールで広がる牧歌的な民族楽器の調べと、軽やかで澄んだ歌声の裏に滲む力強さは、前々号で紹介したポーランドのR.U.T.A.とも共振する。今作ではメンバーに英国人パーカッショニストも参加しており、繊細なメロディーが紡ぐ楽曲は民衆による解放のためのロック。日本盤(ライナーは永山愛樹/TURTLE ISLAND)のリリースも予定されています。

TURTLE ISLAND/空空神々-KALAKALA KANKAN-



(MICRO ACTION MA/CD5)CD

メンバーの経歴と、その音楽性で話題騒然となったデビュー作『深海の水のように』のリリースから、早いものでもう10年以上(!!)の月日が経っているわけですが、久々に聴いたTURTLE　ISLANDは不変にして普遍的な世界性を確立していた。土と汗の臭いが立ちこめるトライバル・チンドン・パンクはそのままに、森羅万象を呑み込み境界線を飛び越えた、夏の夜に響き渡るマツリゴト。老若男女宗旨人種民族不問で、足並み揃えず、てんでバラバラに躍れ——。

editor's notes

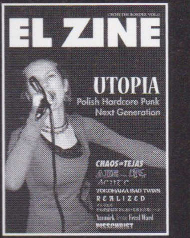
「el zineで山口冨士夫?」と訝しんだ読者さまもいるかもしれませんが、僕は今、東京の福生という小さな街に暮らしていまして、「現場」となった駅前を通る度に、何とも言い難いモヤモヤとした気分に陥るのです。
見ず知らずのアメリカ人に突き飛ばされて頭を打って死ぬ、という人生の幕引き。人の死はいつだって不条理で理に適ったものなんてあるわけないのですが、それでも、この理不尽に対する、「何だそれ?!」というわだかまりが延々と燻っていました。
ただ、そんなことを言いつつも僕は山口冨士夫について全く詳しくないので、詳しい大越さんに、自分のモヤモヤを晴らすべく原稿を依頼してみた次第です。完全に私的な理由でお願いしましたが、結果、故人の軌跡を辿る決定的な原稿になったと確信しています。

さて、今号もまとまりがあるんだかないんだか、よく分からないですが、とりあえずパンクな内容だと思います。日本、アメリカ、スウェーデン、スペイン、サウジアラビア、アラブ首長国連邦と、色んな人がいて色んなパンクがあります。それって素敵なことですね(?)。
それでは今日も一日、頑張っていきましょう〜!!

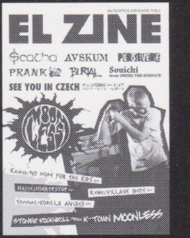
※インタヴュアー及び執筆者名の記載のない原稿は全て山路健二が記した

el zine vol.14　2013年10月31日発行　E-MAIL　unno13@gmail.com

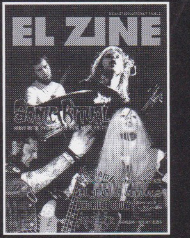




VOL.0 UTOPIA / SOLD OUT



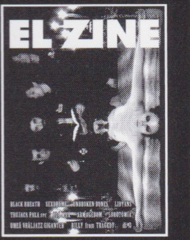
VOL.1 MOONLESS / SOLD OUT



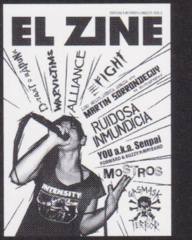
VOL.2 SONIC RITUAL / SOLD OUT



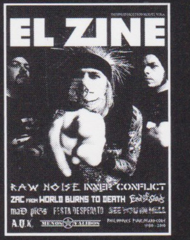
VOL.3 KALASHNIKOV / SOLD OUT



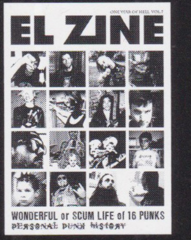
VOL.4 BLACK BREATH



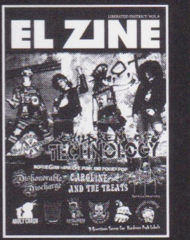
VOL.5 RUIDOSA INMUNDICIA



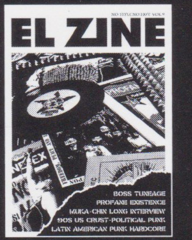
VOL.6 RAW NOISE



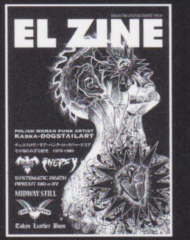
VOL.7 SIXTEEN PUNKS



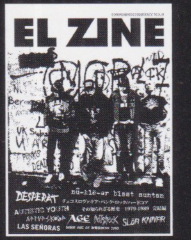
VOL.8 CHILDREN OF TECHNOLOGY



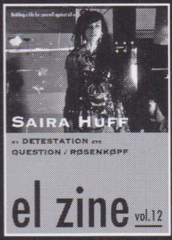
VOL.9 PROFANE EXISTENCE



VOL.10 KASKA-DOGSTAILART



VOL.11 DESPERAT



VOL.12 SAIRA HUFF



VOL.13 AC4

BACK ISSUES

バック・ナンバーはパンク / ハードコア取扱店
又は http://www.juzasha.com にてお求めになれます

Espiritu de Libertad



el zine vol.14 600 YEN



el zine vol.14 Decisive moments

Decisive moments



STEVEN RUUD

CHAOS IN TEJAS 2013 PHOTO REPORT

ERNST AND THE EDSHOLM REBELS

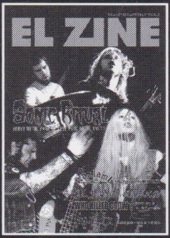
el zi



VOL.0 UTOPIA / SOLD OUT



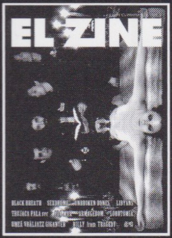
VOL.1 MOONLESS / SOLD OUT



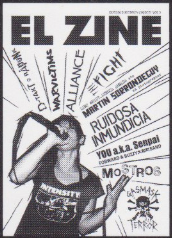
VOL.2 SONIC RITUAL / SOLD OUT



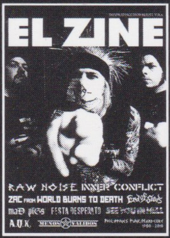
VOL.3 KALASHNIKOV / SOLD OUT



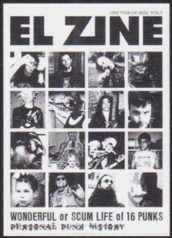
VOL.4 BLACK BREATH



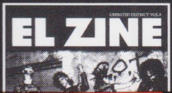
VOL.5 RUIDOSA INMUNDICIA



VOL.6 RAW NOISE



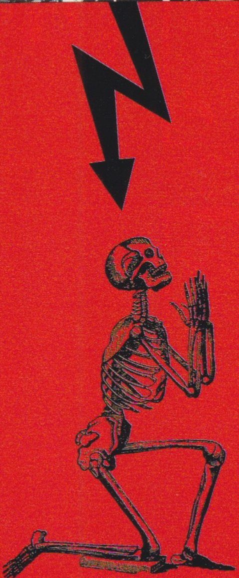
VOL.7 SIXTEEN PUNKS

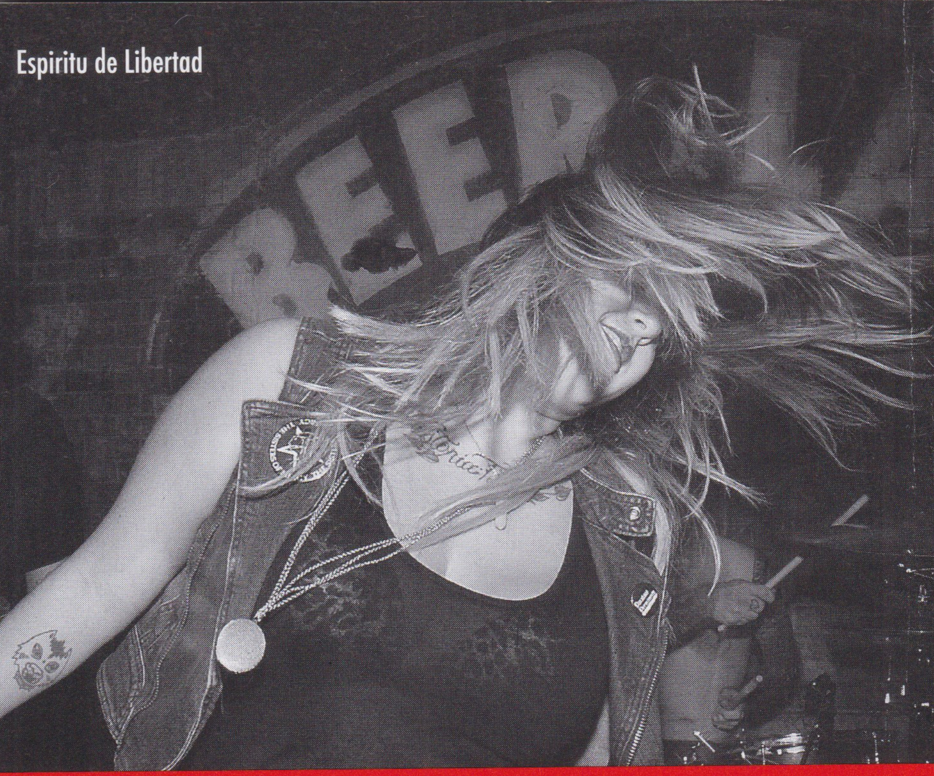












CRIATURAS

SOLDÄÄTOS

Recordshops Recommended Records 2013
レコード屋さんのオススメ音盤

Death to False Metal Punk

VIVA HATE
VISION OF DISORDER

スペイン・マヨルカ島のパンク
METADONA Records

PUNK/HARDCORE IN MIDDLE EAST
中東のパンク／ハードコア事情

THE C-3'S

LASHING SPEED DEMONS：山口冨士夫

el zine vol.14 600 YEN ES GIBT KEIN WERT



S SOLPÄRÄYDS

...mmended Records 2013

レコード屋さんのオススメ音盤

VIVA HATE

VISION OF DISORDER

スペイン・マヨルカ島のパンク

METADONA Records

THE C-3's

冨士夫

T KEIN WERT

el zine vol.14

Decisive moments



STEVEN RUUD

CHAOS IN TEJAS 2013 PHOTO REPO...

EATER R

ERNST AND THE EDSHOLM REBE...

el zi...